川柳塔

昭和六十三年一月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻七二八号

日川協加盟

No.728

同人特集・私の一句

一月号

藤村〆女句集
『ともしび』発刊記念

本社一月句会

日時　昭和63年1月7日（木）午後6時
会場　メンズファッションセンター3階
大阪市東区内本町一一一電話06(941)1918
地下鉄「谷町4丁目」下車(2番出口)交差点西南角
☆短冊交換会（一人3点以内）
☆62年月間賞杯授与と全出席者表彰
☆62年愛染帖賞、茴香の花賞表彰

おはなし　黒川紫香

兼題　「花形」　藤村〆女選
「矢」　福本英子選
「元気」　大坂形水選
「ひげ」　西尾栞選

席題　2題　各題3句　締切7時
会費　五百円

1988年

新春おめでとう会

日時　昭和63年1月15日（祝）午後一時開会
会場　大成閣（和室）
大阪市南区大宝寺町中之町二六
（心斎橋大丸とそごうの間を東へ約百m）
電話　06（271）5230

挨拶　西尾栞

兼題　「待つ」　西出楓楽選
「車」　松川杜的選

懇親宴
会費　六千円

同人・誌友を問わず多数ご参加下さいますようお待ちしています。

川柳塔社

謹んで戊辰新春をおよろこび申し上げます

西尾　栞

第二の矢

仏教の教えに「第二の矢を受けるな」というのがあります。

第二の矢というのは、わかりやすく言えば、連鎖反応のことです。わたし達が日常生活の中で、何か失敗をします。人間は不完全だから絶えず失敗をくり返します。ところが、わたし達は人間だから失敗をしたことに大変こだわります。

「ああだから失敗をした」

「こうだからだめだった」

と、いつまでもこだわって、なかなかおしまいにならない。そして自分自身に都合のいい弁解をしているのです。

すると失敗をした具体的な事実、つまり失敗による具体的な損失、その損失よりも、それにこだわっている精神的、時間的なマイナスの方が、はるかに大きくなる場合が多いのです。そのことを第二の矢といいます。

失敗をした具体的な事実、それを第一の矢といいます。

第一の矢は仕様がないのです。人間だから……。大事なことは第二第三と、連鎖反応を起こさないこと、第一の矢だけで終りにしたいものです。

これは或る日の武井哲老師の話の一部です。

鳴き竜の音のひびきも初詣で

竜頭蛇尾になる一年の計を樹て

昇り竜許りの句がくる年賀状

座右の句

俺に似よ俺に似るなと子を思ひ　（路郎）

私の句

一本の傘に夫婦の歩が揃う　井上白峰

川柳塔　一月号　目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

第二の矢……西尾　栞……(1)
七福神は夢だった……黒川紫香……(2)
川柳塔（同人吟）……西尾　栞選……(4)
自選集……(31)
■川柳太平記（116）川柳の群像　大山竹二……東野大八……(34)
■連載　誹風柳多留廿六篇研究（三十三丁）……(36)
俳諧あづまからげ（上）……阿達義雄……(38)
〈同人特集〉私の一句……(40)
水煙抄……黒川紫香選……(54)
秀句鑑賞［同人吟……高杉鬼遊……(53)
　　水煙抄……清水健司……(75)］
愛染帖……橘高薫風選……(72)

七福神は夢だった

黒川紫香

晩年、或るホテルの女子寮の寮長として数年過した事がある。

寮には適齢期の娘達ばかり居るので歩留りも悪いが毎年高校出を補充するため常に三百人近い大世帯である。男は私と賄いのおじさん、そしてボイラーマンの三人だけだから文字通り女護が島と言ってよい。

性格や、出身地の違いから来る人間関係が難しい。寮にいる時は袴を脱がせ家庭内の雰囲気を持たせるので案外解決し易い。それも若さからくる単純さだと思う。

怖いのはいろんな誘惑と病気であり、夜中に発病して救急車を呼ぶ事も多い。主に寮母の仕事だが私も一晩病院で寝ずの看病をした事がある。彼女達との信頼感を持つ事が大切で寮内では親代りとしてどんな相談にも乗ってやらなければならない。

外敵もある。痴漢がそれで夜中に裏の大木によじ登って覗き見をし昂奮したのか落下して骨を折ったり、鼠小僧もどきに壁を這い上って部屋へ侵入したのはよいが、余りにも多い寮生に騒がれ腰を抜かした喜劇もある。

その寮生達も正月を迎えると娘らしく着飾る。一部は帰郷しても年中無休の会社だから

〈女性コーナー〉 茴香の花 …… 八木千代選 …（76）
62年度愛染帖賞受賞作品 …… （78）
62年度茴香の花賞受賞作品 …… （79）
タツは青春 …… 東野大八 …（80）
Kさんへの手紙 …… 時実新子 …（92）
句集「絵皿」のおいしいユーモア …… 橘高薫風 …（93）
鹿野よいとこ …… 西山幸 …（94）
初歩教室 …… 阿萬萬的 …（96）
「松」 …… 石田清泉選 …（98）
一路集「驚く」 …… 吉原紅月選 …（98）
「妥協」 …… 神夏磯道子選 …（99）
柳界展望 …… （100）
本社十二月句会 …… （111）
各地柳壇（佳句地10選／吉岡きみえ） …… （115）
■1月各地句会案内 127　■編集後記 128

座右の句

一日の重さ軽さよ　日記帖　（薫風）

私の句

衿足を浴衣がのぞく夕涼み　横山為子

相当数が寮で正月を迎える。三ヶ日の内休みのとれた者は前日に美容院へ行き髪を結い崩さぬよう起きたまま眠る。元旦の朝早く自分で作ったか親に買って貰ったか素晴らしい晴着を寮母に着付をして貰う。だから寮母は大変である。休みの寮生といっても相当人数が居るし、時間もかかる、寮母がへとへとになって終るのがお昼前。

そんな訳で寮でするお祝いは夜になる。勤務の者が全部帰った十一時過ぎから行う。ご馳走は賄いの夫婦が造ってくれるが寮生達の自慢料理も加わる。酒も出て乾杯もしカラオケも出て大変賑やかになる。

或る年、七福神の内、四福が揃った事がある。というのは私が来た時既に「布袋」という姓の娘が居て珍らしい苗字だなと思っていると翌年「戎」「大国」と揃って入寮して来た。大勢居るといろんな名前の者が来る。二年後紛れもなく今回は「弁天」というのが入って来た。これで四福が揃ったので翌年の正月は彼女達を中心に新年を祝った。だが流石に私が居る間に残りの三福は難しい名だったので入寮して来ず七福神が揃うという夢は消えてしまった。

私より先に朗らかで人気者だった「布袋」さんが辞め、「弁天」さんは名前程美しくなく残った二人は平凡な娘で私の記憶には残っていない。

川柳塔

西尾栞選

父と子の壁を子が塗る厚く塗る　尼崎市　春城　武庫坊

浮浪者の袋の中に今日の風

娘と孫が此の世の土産とも思い

あだ花を咲かし続けて生きている

B面の顔がきびしい出世主義

つぶやきがこぼれベランダ露しとど

サルビヤの赤が中国国旗染め　桜井市　岩本　雀踊子

おとんぼの躾か嫁も親思い

闘病の長い廊下に冬の音

婚期過ぎた女が悪女になりたがり

ふきだまりに街の天狗が来てくれぬ

モウ一本妻におねだり蛸の足

ボタ山に男がすてた山の唄

天皇と一緒にお病み申しあげ　岡山県　土居　耕花

寺の寄附断ったまま病みつづけ

ギャグひとつ医者に言うてもはじまらず

スキヤキの夢をナースに起こされる

看護婦が綺麗と思うまだ死ねぬ

お見舞いが最中ぐらいの義理ばかり　岡山県　嘉数　兆代賀

悪人が佇っても開く自動ドア

転職の話へ亡父も来て坐る

美しい嘘が新幹線で来る

騙されてやらねば嫁の座が困る

白足袋の白は妥協を許さない

神を信じ他人を信じている余生

倉敷市　野田素身郎

おもちゃ売場に来て目を覚ます背中の子
満山紅葉その迫力に声も出ず
渋滞の峠越えれば陽が沈み
定年退職半分にする寄付の額
ラブホテル初心者マークも一二台
傘さしてする立小便がもどかしい

倉敷市　小野克枝

みんないい顔松竹梅の勢揃い
角かくし神へ一番近くなる
鈍行を乗り継いで行く雨もよし
知恵の輪の抜き方忘れ齢わすれ
有難うと死ぬまで言えぬ傘の中
三界に家ありルール守り抜く

八尾市　高杉鬼遊

高い物ばかりで暮れの台所
意外にも第九を歌う友がいる
昇り疲れてすこし遊んでみたい龍
会社からお金をもらう領収証
ご近所に内緒でメロン食べてます
三畳の小屋から見えるツインビル

熊本市　有働芳仙

元旦やおんなじ夢をくり返し
姑への叛旗をたたむ子の寝顔
ポケットにいつも温めている秘密
現場を知らぬから大きなことが言え
乙姫の笑顔がにくい玉手箱
初恋は白いお皿のサクランボ

竹原市　小島蘭幸

二十一世紀へローン組んでおく
駅伝のたすきが渡る祈りが渡る
テーマは愛　妻とにらめっこが続く
江川の哲学真似てみたいと思うなり
おとうともいもうともいるひとつの火
友達に馬鹿と言われたことがある

伊丹市　樫谷寿馬

酢こんぶと笑う松竹新喜劇
恐いこと言ってる歯医者の独り言
浮き足で体重計へダイエット
菊に水遣っておいてと菊花展
禁煙のポケット漸く孤に馴れる
あと一つ詰碁残して駅に着く

島根県　堀江正朗

ひとすじの道白杖を握りしめ
空想も妻のヒントでふくらます
日本語が分らなくなる耳になり
咳一つ誰かいるらし襖ごし
音みんな信じて生きる耳がある
無精髭だけはペースを崩さない

和歌山市　西山幸

新しい年が始まる手水鉢
今日からの鼻緒もやはりきついめに
マンネリと仲よしになりすぎないか
よせ鍋で思い過ごしが煮えている
ストーブもぬくい話はしてくれぬ
せめてもの意地白足袋を白く干す

八尾市　宮西弥生

シクラメン母の秘密を脱けられず
外人の視線が碧い古都の秋
まだひそかに想いつづけている鬼の面
針千本呑むのがこわくて男待つ
神様の試練と思いひとり住む
蘭手入して今日の休みが暮れてゆく

大阪市　西出楓楽

そんな気はないのに自動ドアが開く
華道展花のうめきが聞こえぬか
七人の敵のひとりにいる夫
まわりみな善人困ることもある
善人で実直敬遠されている
考えごとばかりが増えて冬になる

大阪市　津守柳伸

持ち駒を全部晒して女坂
ストレスの氾濫ワープロビデオテレタイプ
松茸を冷凍させているおせち
GOサイン浄瑠璃寺に西日射す

深刻な仮面を覗く十二月
円高のドラマが尽きぬ師走風

京都市　松川杜的

マネキンの人形やけど眼のやりば
肩パット入れてみたとて十二貫
花束のよろこびのまんまカスミ草
人生双六上りにみかん等は無い
整型の顔では子供生まれない
招待券ペアーでくれる友が居る

高槻市　辻白渓子

中流の生活を作文すっぱ抜く
曖昧な返事を当にする落目
仲人の嘘は善意に受けとられ
麻雀へ抜けてメロンを食べ損ね
スケジュール替えて参加をしたゴルフ
不器用な男が指図ばかりする

和歌山市　福本英子

花活けてたったひとりの祝箸
良い顔をしたくて弾むポチ袋
決算もつもごりも無い年を越し
ポケットベル付けて遊びに来られても
貸し借りをしている中はまだ他人
おめかしをして銀行へ借りに行く

島根県　堀江芳子

とうさんに生かされてきた鍼供養

新しい旅路にかえるカレンダー
朝の月ものほし竿に乗っかかり
曲り角折れると風もくる小径
妻という字のありがたさ忙しさ
これっぽち預金した日の碧い空

松江市　柳楽鶴丸

腐れ縁と言いつつ銀婚式迎え
飽食の世を雑食で生きている
スケジュール一パイ病気の欄がない
フィクションとノン・フィクションの夫婦です
還暦やこれから遊びも上品に
暗証番号に妻の生年月日

米子市　小西雄々

初夢が思い出せない歯を磨く
寸志なら闇でいただくことにする
みぞおちへためらいがあり花を買う
忍と苦を拾い羅漢の中にいる
遺言へがっかり落す肩もある
自慢する元気へ憎まれ口も増え

尼崎市　春城年代

言うにいわれず大根をすぱすぱ切る
小手先で描いたこころに疎まれる
例外でなく私の腕も疼きだす
ふとん干す人にまつわる赤とんぼ
童謡を唄えばかなしくなって秋

戒名のはなし珈琲飲みながら
年を経た輪ゴム少しだらしない
老人ホームでいつか話が煮えていた
父は俺より偉くなかったのが救い
故郷とは何さ山川枯れている
三つとや後は続かぬ数え唄
向日葵は俺でも描く醒めている

名古屋市　越村枯梢

洗い髪明日のいくさを秘めている
手を洗う医師の背中へ目をこらす
紙袋サラダ記念日など入れて
千手観音の前で指切りなど致し
気に染まぬ人に会う日の通り雨
書きなぐる逢いたい人の頭文字

西宮市　西口いわる

酒好きの竜初春の夢に酔う
新年の誓いは泰山木の前
年輪に喜怒哀楽の繰返し
耐えること教えてくれた亡父無口
気まぐれな彩も美事に柿紅葉
生きている血の騒ぐのがうれしくて

茨木市　井上森生

四捨五入六十歳の顔になる
ほどほどに泣いたら明日またおいで

鳥取県　土橋螢

ちちははのうしろの山に雪がくる
甘党で通したことに悔いはない
決断を問う台風のど真ん中
台風の後片づけに雇われる

平田市　久家代仕男

秋の雨淋しがりやの胸に降る
水槽の底でざり蟹春を待つ
几帳面すぎて貴方は絵にならぬ
わたくしの言葉を持たぬ審議会
鉾先をかわそ眼鏡を拭いている

下関市　石川侃流洞

ビリヤードならとパチンコ屋の強気
グルメ志向石焼用に新品種
試着室鏡すてきと言っている
ハイハイハイ三ッ続けてやる気なし
パラボラアンテナ地球の裏を追い回す

倉敷市　稲田豊作

お雑煮の箸は施設の子を思い
たまの酔い妻よ家計を言う勿れ
手の要らぬお舅ですと喜ばれ
役割にママが不満の児童劇
父という肩書だけの父が好き

美祢市　安平次弘道

ドアチェーン性善説を信じない
マリオネット余分な糸に狂いだす
体験談ちと粉飾が過ぎないか
偏差値が何さ少年木に登る
インテリの挫折聖書が手に重し

柳井市　弘津柳慶

天皇の手術へ博士無表情
神殿へ過去なつかしく振りかえり
気にかかる処方箋を横目で見
角栄もそろそろ過去の人となり
疎まれていると知りつつあこがれる

奈良市　宮口笛生

どんぐりこお池にどじょう住んでいず
一日ぐらいゆっくりせよと雨が降り
後継ぎがないまま老いのコンバイン
百姓の明日へ夕やけ空がある
正月が其処まで来てるつるし柿

兵庫県　遠山可住

妥協してあげる笑顔が高過ぎる
決断が出来ぬ助役のまま老いる
永代供養して安らぎの涅槃かな
選挙カーに乗ると心が見えて来る
気高くて誤解をされたバラの刺

兵庫県　辻文平

愛がある男無口にしておかず
数え唄十を越されぬ過去の罪
茶柱に朝の仮面が出来上る

心にもない嘘が出る洗い髪
捨ててきた女グラスの中に浮く

宇部市　平田実男

中立のしんどさを言うヤジロベー
道草を食った話の解る叔父
温室で季語に逆らう花が咲き
未練などないと特攻隊の嘘
悪友のおみやげ妻へ出しそびれ

今治市　越智一水

農薬が効いて死んだぞ弱い虫
熱きくちづけ許して人妻棘を持ち
これきりと切れぬ指切り燃える恋
人生双六自分のくつ音聞いて生き
エンピツは母のやさしさ秘めてあり

今治市　矢野佳雲

一筋に生きた夜警の鍵の束
お買得夫婦茶碗にひびがあり
屑篭に渡る世間がつめてある
折り鶴にいやな文鎮置いてある
ほろほろとただほろほろと銀杏の黄

弘前市　波多野五楽庵

初雪や浄土はさてもかの如し
風見鶏だれも降ろしに来てくれぬ
美しい科白で孫が泣きにくる
勿体無い言葉を妻に分けてやる
分別がつく年齢の味気なさ

弘前市　田中叶

遠景の枯木の中の研究所
昼の月道を行くのは私だけ
今日ひと日窓から見えている鴉
ワープロで不倫の人の名を打たん
通る時何かが過ぎる駅の裏

大阪市　河井庸佑

行間に愛情にじむ母の文
子育ての手抜ききっちりつけが来る
権利だけひとり歩きをして困り
謙譲の美徳ライバルに先越され
舌足らず思わぬ波紋おきてくる

大阪市　江城修史

いとおしむ命に初春の幕が開く
福耳の相もつ女が隅に生き
負け犬の強気気負いをあわれとも
汗知らぬ人のゆとりをうらやまず
楯となる妻へ今日も風まとも

大阪市　本間満津子

自我捨てて始めて聞こえた天の声
軽い嘘心遣いが嬉しくて
美しい刺繍の裏がややこしい
すばらしいアイデア稲光りして生まれ
天を指す杉に向って背を正す

大阪市　神夏磯道子

神様の方がこの頃騙される
糖尿の夫に遠慮する茶碗
陽炎がもえてやさしさ取り戻す
虫けらも神様からの命です
良い便り郵便受けを拭いておく

大阪市　黒田真砂

もの想う時いつからか萩の道
励ましに軽い嘘等交ぜて友
不揃いを承知で買った秋なすび
独りとは気楽なものよ缶ビール
見えかくれする位置に居て子との距離

大阪市　大野武太

おないどし総理も僕も負けられぬ
ときどきの怒りくらしのバネにする
金儲けほかに話題のないおとこ
ボーナスのないくらしにも初春がくる
標札も武太とかけて初春をまつ

大阪市　吐田公一

一歩ずつ上り醍醐の水の味
人間がいるので神も拝まれる
スピードの出し過ぎ悔いる松葉杖
妥協する歩幅を持たぬ男下駄
保険屋へ怪我は大層に見せておく

大阪市　大塚節子

初詣天神さんから順ぐりに
一陽来復今年は龍に乗って来る
ストーブを出した日故郷の雪だより
銀の鍵亡母の秘密の小抽斗
髪にかかるテレビの雪のとけぬまま

大阪市　柳原静香

本でも読めと静かに秋の雨が降る
聴こえないくらいは何さ秋の天
菊人形淀君はいま着替え中
これからの命が重い六十九
結局は捨てる粗品の列に着き

大阪市　藤田頂留子

初空へうだつ上げたい凧の糸
そういえば去年も言うた今年こそ
なんやけど豆もするめもかめまする
西方寺月日の早さ君しのぶ
ひな人形だんだん出番早うなる

和歌山市　堀端三男

どっぷりと和の中にいて和が見えず
だまってなあかんと妻に釘さされ
勲章にしている母の座りだこ
源泉徴収票かなり奉公しているぞ
近道を走らず古稀へ手が届き

和歌山市　松原寿子

トンネルの中で運命の風に遇う

ほろ酔いが可愛いなどと責めてくる
願望を美化しておとこ切り返す
粧うても背なに孤独と書いてある
掌の届くお人ではない夢を斬る

和歌山市　福井桂香

革新の旗がときどき手に重い
玉子酒ひとりの人を待つ夜寒
ハイヒールちょっぴり背伸びしたいだけ
髪染めてまた龍宮へ行くつもり
それぞれが握るおにぎり物語

和歌山市　牛尾緑良

中流のゆとりは少し無理がいる
花が散る別れ話の日のように
コスモスを育てて少女たらんとす
コーヒーへ砂糖ひとつを知る絆
電話する先は根雪の母の里

和歌山市　桜井千秀

愛情の脆さは云々せぬように
デザインで選んだ靴が咬んでくる
えび天の尻尾はえびというしるし
潔く兜脱ぐのも城の為
注連飾りめでためでたの一里塚

京都市　都倉求芽

余生とや趣味にいそしむ日が足りず
残り火を種火に変えて子に託す
旅の味が忘れられない靴の底
しんがりをつとめて山茶花の温い白
還暦へ画竜点晴欠いたまま

京都市　山本規不風

ひょっとしてかも知れぬ女から長電話
例えばの咄に冬眠する不倫
冬の蝶八ツ手の花にひとり言
一寸失礼大空へ煙草の輪を放つ
めがねを換えかけてはずして時稼ぐ

米子市　林荒介

火の匂い水のにおいの仏たち
昇る陽にためらう事の無いように
筋書が出来て仕事が捗らぬ
閉じた掌に父を住まわせ母を住まわせ
川が広くなって石を投げても投げても

米子市　石垣花子

耳栓をしててもピアノほめてくれ
あの日から天狗は鼻を自慢せぬ
他人様の怪我は静かに見ています
切り捨てる鋏を母はもう持てぬ
辛い日の足跡だまって消しておく

米子市　林瑞枝

背筋ぴんと伸ばして新春の虹を追う
お針箱がわが家の地図を抱いている
冬を背にピエロの面をはずさない

お座りよ明るく月の射す部屋に
使い慣れたペンの御恩を見直そう　米子市　菅井とも子

新しい夢を見ようと枕買う
立ち止まるゆとりを何時も持っている
古里に帰り訛に攻められる
遠くまで見せたい孫を肩車

夫の同窓会に出席

瑠璃光寺の塔は知ってた夫の青春（はる）　米子市　青戸田鶴

極楽は今かも知れぬ酒をつぐ
なぐさめの言葉プライドきずつける
想い出はみんなきれいな彩になり
手ごたえをつかんで深い息をする
老いた木も裸になって生きている　米子市　政岡日枝子

それはきっと徳ある人へくる遺産
楽しい母で時々父より強くなる
歩行者につぶされそうに老母が佇つ
内緒だが隣の犬とは仲が良い
腹の虫何百匹も押えてる　米子市　寺沢みど里

春よ来い古巣ひたすら耐えている
実ざくろが弾けて遠い人おもう
分身と思う古びた割烹着
老眼鏡ときどき嫁に甘えてる
裁ちばさみ女に生命ある限り　米子市　澤田千春

下り坂けった小石に胸が鳴る
例えばの話にのった落し穴
雑草の耳に流れる川がある
こわもても時には夜叉の面になる
絵の中に自然も人も溶ける秋　米子市　光井玲子

松ぼっくりころり仲間をさがしてる
裏通り歩く煮豆が匂うから
簡単に五蔵六腑を覗かれた
手ごたえがあるから廻り道はせぬ
夕暮れの道にくっきりそばの花　堺市　中川滋雀

大正の誇りを刻んできた余生
「赤とんぼ」過去が流れるハーモニカ
笑い話の肴にされる輪に入る
灰皿の居場所がだんだん隅になる
髪染めた妻の背中を送り出し　堺市　高橋千万子

菊花展犠牲の蕾数しれず
ベテランといわれ歳月はずかしい
祝福の言葉女の胸多彩
それなりの勝算を抱く亀でよし

ちゃっかりと五桁くんでる御年玉

島根県　西村早苗

喜びとなる親切は小さいけど
逢うてすぐ別れに馴れてきた二人
県境はだいぶん降った汽車の雪
中一も中三も部屋閉めたがり
異常気温蕾のかんがちと狂う

島根県　小砂白汀

雪を背にまんりょうことさら紅を刷き
これほどの仕事するとはダムの水
孫の煮るカレーライスに妥協する
わが子さえ苦言をやると寄りつかぬ
降れば泣き降らねばまた泣く人の死や

島根県　榊原秀子

石段を一歩一歩の初詣
年頭の誓いは神にだけ告げる
大安日ゆくかろやかな裾さばき
前置きがとっても長い話下手
お上手がいえないうちの九官鳥

島根県　錦織文子

庭下駄を揃えたままの春の雪
一人居の心を時に石に問う
箒目を入れてくつろぐお茶の味
借景が少し気になる庭に佇ち
落ちついた心へ石の貌が見え

松原市　玉置重人

聞き流すつもり補聴器はずしてる
此の人に喋れば噂ひろがるぞ
無駄口は決してきかぬ力釘
人恋し人を縛りにくる電話
酒煙草あかん男の守備範囲

松原市　佐藤藤子

約束を破って義理についてゆく
地価高騰堪えているのは葱畑
名曲を聴いてるうどん伸びてくる
自炊の子に送る蟹缶カレー缶
香典の額を電話で話し合う

唐津市　田口虹汀

裏まではじけなかった計算器
龍宮の門にブザーが見当らぬ
還暦の龍に素直な妻の虎
十字架の重み知らない儘傘寿
蜂蜜の甘さ知らない蜂がいる

唐津市　仁部四郎

一票の加減乗除がなぜ合わぬ
うぬぼれの加減乗除に出た黒字
思い出の加減乗除にゼロはない
成り行きか責任なのか昼の月
成り行きといえば良い子にみんななる

唐津市　久保正敏

ポックリと死なれて困る貸金庫
二号には惜しまぬ金を子に惜しみ
元旦の陽を追い師走の陽に追われ
一度だけ追われてみたい青い鳥
推敲が出来ぬ対話の勇み足

唐津市　浜本義美

古都税廃止京の甍の春光り
笛作る老人ありて供日前
朝市の壺焼き匂う人だかり（呼子朝市）
天高く秋を深しに万歩計
屋敷跡露わにみせてダム涸るる

唐津市　山口高明

もう塾へ通って敵の中に居る
悲しみへ鞭打つようなテレビルポ
立読みが唾まで付けてページ繰る
反戦歌唱えて国は大演習
他人の子教えて我が子儘ならず

寝屋川市　宮尾あいき

御命日私が咲かせた菊の花
御命日亡夫が好きな熟し柿
良い名でしょ映一郎とつけました
芦原温泉那谷寺拝んで来ましたよ
故里を思い出させてつわの花

寝屋川市　柴田英壬子

六十の智恵をうながす福寿草
天の声ふとブランコに乗ってくる
龍族にたつのおとしご居て愉し
平凡な言葉で祝う龍の初春
原稿紙女の嘘も真実も

寝屋川市　稲葉冬葉

死ぬまでが花道たるや男たち
すこしいびつな松茸が届けられ
嫁姑息抜くところ弁える
みんなが笑う古い時計が動いてる
大樹の影に父母の道しるべ

寝屋川市　岸野あやめ

銀色の鍵だよあれもこれも過去
新年会迂余曲折はさておいて
売り家のチラシはうちの筋向かい
病院は苦労話の花盛り
木枯しに吹かれて戻りつく我が家

寝屋川市　平松かすみ

プラカード提げて直った不眠症
辰年の姑は達者で医者通い
やさしさを祖父から貰う息子の育ち
顔と顔つけて猫好き犬も好き
寄進して足跡残す屋根瓦

松江市　恒松叮紅

しきたりが廃れ佗しい街の初春
寝たきりの長寿へ巡る誕生日

ショー化して嗚呼新郎の色直し
漫画文字少し大人になりました
出棺にためらいもなく押すシャッター

松江市　舟木与根一

倦怠期でも習性は米を研ぐ
深慮遠謀吊り橋へ誘い出す
美しく生き甲斐競う菊花展
青墨の味を六十から習う
おらが町から総理出る秋日和

鳥取市　両川洋々

俺の汗土は裏切ったりはせぬ
凧の糸切れた山頭火の旅よ
安楽死できぬレールへ枯葉舞う
良心は留守さ賄賂へ目をつむり
妻の繰る糸で喜劇を踊ろうか

鳥取県　川崎秋女

川床の紅葉しばしの声もなし
北壁の弘朗の句碑なでてゆく
台風の爪痕いたし三の沢
枡水の双眼鏡(かがみ)にうつる弓ヶ浜
ちっぽけな哀しみ山に置いてきた

鳥取県　松下たつみ

マイケルの歌は知らない菊が好き
他人の世話ばかりで個性ない暮し
調停へ造花の仲が狂いだし
百姓を継ぐ子を世間不思議がり
禁煙車ガムもそろそろ底をつき

富田林市　板尾岳人

新春の笑いはきっと父と母
母の死後父の匂いは冬ごもり
天狗から貰う情けは森にある
めでたさは大なり夫婦餅を焼く
言い訳は決してしない夜の汽車

鳥取県　新家完司

手品ではないがお金が消えてゆく
ポケットに千円ゆたかなる秋よ
馨しき秋を横切るやきいも屋
ああうまい誰が造ってくれた水
わたしより哲学的なポチの顔

倉吉市　奥谷弘朗

知恵と金無いから汗を出すという
女房の方が世間に顔が利く
責任が無くてやっぱり風見鶏
田舎街銀座通りがちゃんとあり
いくらかは償いの気で帯を買う

倉吉市　渡辺独歩

道徳を考え直す塀の中
母さんは美人だなあと参観日
積っても母屋よ軋むな老母独り
喪の耳はそれから疑い深くなる

仏生を授かりたくて灯を点す

倉吉市　渡辺菩句

文化包丁十一月三日の音
演歌好きな善人そして大音痴
観音の頬に売約済の札
こりゃどうじゃトイレになんと貴船菊
タオルこうしてこうしてネズミ出来上り

岸和田市　福浦勝晴

新春の見果てぬブルーに澄んだ空
朝まだき出湯の街を発つ旅愁
演技派のタレント独り食べる鮨
生きのべてぶつくさこぼす得手勝手
手相見の黙って夜更けにわが手相

岸和田市　古野ひで

その次を聞くのが恐い黙っとく
亡夫の忌黄菊白菊真っ盛り
陶芸へ意欲を燃やす老いの指
大島にときめき包み逢いにゆく
落ち葉ひらひら見果てぬ夢を抱いたまま

高知県　赤川菊野

ブランドを着てもやっぱり元の顔
石一つ投げて波紋に賭けてみる
おとぼけもここまで来れば芸の内
はちきんの足に意外なすわりダコ
ひとり寝のまくら女の本音聞く

岸和田市　原さよ子

計算が合わず老眼ずり落ちる
我を張れば空しさだけが残される
好きだったこんなパズルに骨が折れ
青虫がみごとに活躍したキャベツ

近江の寺を旅して

童心にかえり釣鐘順に打ち

高知県　曽我部裕

エスカレーター今度は降りるタイミング
美容室夫の船が明日かえる
手枕を抜いたら孫が起きそうで
おとなりの柿がほどよく熟れた窓
うかつにも漏らした笑みに付けこまれ

富田林市　藤田泰子

乗り換えた舟はとっても揺れる舟
フルムーン夫は温泉アレルギー
スタートは同時わたしはマイペース
仲良しでいつも同時に風邪をひく
いい音で響き合いたい距離に居る

藤井寺市　吉岡美房

村長の祝辞の上を鳶が舞う
落葉踏む中で詩人に近くなる
小春日の中で仏に包まれる
泥かぶる覚悟をきめて北風に立つ
クリスマスだろうとお経あげて出る

岡山市　時末一灯

射程距離で泳がす怖い夢を見た
均等法女すたこら渡る川
一万人殺す車も文明か
病んで知る神仏からのペナルティー
停留所安全地帯とはいわず

羽曳野市　榎本吐来

淡白な男にされて乾すコップ
キャスターがにっこり笑って人を斬る
底浅い暮らしの耳に地価騰貴
夫婦論争茶の間の知恵に押し切られ
二度の職パートに混じり立つホーム

西条市　片上明水

首筋を握っていても嘘をつき
看板の字の大きさを信じきる
住職が寝込んでからの昼の鐘
酒辞めてからもやっぱり酒の友
伸び伸びのTシャツを棄て菊が咲く

西宮市　林はつ絵

もみじ拾う天地の声に触れながら
仲のよさ土産に持って母帰る
傷つけず善意届ける日を祈る
駅までの道さえ話こぼれ落ち
姑の年齢亡姑は働きづめでした

静岡市　永倉僕川

控え目な言葉時々胃が痛む
口喧嘩言葉の奥にある火種
合掌をすると心が晴れてくる
神様と仏様にも願をかけ
ネクタイを結ぶと男の顔になる

箕面市　坪田紅葉

ファッションが泣き出している太鼓腹
理屈ではとけぬ人生七曲り
描きながら心のかよう赤いバラ
過去だけに生きてる老いのひとり言
しゃべるだけしゃべってかえる老い達者

神戸市　仲どんたく

大津絵の鬼極楽の道が好き
雪下駄の音が枕にしみる宿
木と紙の家月光に愛される
的外す配慮も入れてある対峙
肩の子に顛末を聞く人の垣

高槻市　竹内花代子

二度咲きの花いつくしむ如露の水
塗装屋の仕上日約束ふいにされ
頂いた切符望遠鏡で見る座席
寡婦一人食べられませんお裾分け
亡夫の手の温みが欲しい置き炬燵

出雲市　園山よし子

夫呼べば菊花の上に首を出す

いい笑顔横から見てもよい笑顔
小春日の何となく急く老いの道
布団干す単身先の日和ふと
ライバルも又敬老の顔で来る

岡山県　小林妻子

漬物と似合う寒さがやって来た
麦飯と漬物があり旅帰り
漬物石の出番へ雪が降り積もる
年頭の客へ自慢の武蔵漬
漬込みが終れば母のお正月

浜田市　中川幸一

肝臓のはなしが酒をまずうする
民営になると煙草の白書出る
張り切るといのちの糸が切れる齢
無念夢想ウキを見つめる空の魚篭

浜田市　佐々木裕

敵として惜しいが味方でも困る
風車受けた風だと捨ててゆく
知り尽す筈の夫婦に闇がある
正論が闇から闇へ葬られ

島根県　栂みどり

菊におう墓標へ話しかけながら
アルバムの中に秘めてるオルゴール
娘等の留守ひとり静かな厨かな
立冬の霧たちこめる朝を出る

当選祝ぞろぞろ後へついてゆき
虚勢から脱却できぬサングラス
サングラス似合わないのが竹下さん
土痩せて時既に遅しふるさと論

島根県　北川民子

安物の竿で釣られたハゼの顔
こだわってみたとてあなたと私です
ブラジャーを外した日から照り続け
丸い顔充電などは受けつけぬ

島根県　藤原鈴江

散り際の花を招いた舞扇
振り向いても振り向いても陽が落ちる
それとなくポストに託す恋心
あれもこれも老化現象の故にされ

島根県　松本はるみ

横顔があの人に似ていた俄雨
何時からか消えてしまった下駄の音
ボールペン吐息をじかに聞いている
泣き笑い見ていてくれる屋根の月

出雲市　原独仙

週刊誌ニンマリ読んで旅ひとり
敬老会去年の顔を見ぬわびし
干柿の細りゆく日々霜深し
ゲートボールお休みじいちゃん菊造り

島根県　石田清泉

出雲市　吉岡きみえ

村中をおさわがせします花嫁さん
ふるさとも同じ月だろ丸かろう
サンマ焼く煙がつなぐくされ縁
出る釘が打たれいよいよ秋深む

出雲市　園山多賀子

名案を自負して見ても猫に鈴
親切が無性に嬉し年波か
さかのぼる鮭にふるさと血の匂い
陰徳を積んで深山の吾亦紅

和歌山市　若宮武雄

どんぐりを軽蔑しない苦労性
馴れ鮨も廃り紀州の名も廃り
それからをしぶとく生きる枯尾花
老い独り元気に生きる窓をあけ

和歌山市　垂井千寿子

負けまいぞ光らせて来た敵の靴
地の温さまだ信じつつ散る枯葉
ちょっと首かしげた医者に目がすがる
何しても許されている不幸かも

和歌山市　内芝登志代

腹の児に名曲聞かして新春を待つ
おばはんの笑顔で売れてるたこやき屋
清姫の炎が残る絵巻物
一期一会何か淋しい冬のバラ

和歌山市　神平狂虎

影法師冬にはふゆの曲り角
風呂吹きだいこんぐつぐつ手紙まだ来ない
祈るしか知らぬ窓辺のシクラメン
ひとを恨んでどんどん雪が降り積もる

和歌山市　山川克子

娘にせめて寡婦のプライド寡婦の意地
渋滞の中で小便したくなる
身長も体重もオーバーしたが知恵
双方をたてるためです示談金

和歌山市　木本朱夏

芒ゆれ今年の秋もまたひとり
自慢するものがないから働こう
「もし…ならば」言うてせつないことを聞く
赤ちゃんの笑顔けんかを仲裁し

和歌山県　寺田裕美

花活けて女に遠い音ばかり
仕合せを植える土壌を耕やそう
ごたごたがあってやせたと言うてくれ
決断を枕の裏に問うてみる

大阪市　西森花村

幾山河しっかと児の手妻は亡し
達筆で無いのに美人とは見えず
大寒も土用も逃げず面の皮
御詠歌も佳境に入って子の寝息

年金のくらしに辛い慶弔費　大阪市　北　勝美
寺からの案内状も高うつき
ボランティア明日の予定をダブらせる
塀の中恐さの中に好奇心　大阪市　坂口公子
話の先折ってなかなかつかませぬ
言わされておはようございます有りがとうございます
目をつむった許りにレールきしみ出し
ようまあまここまで老けたと鏡殿　大阪市　坂本仙吉郎

大三島一の宮参拝の旅

尾の道の文学の道は又の事
大山祇神社で
義経の緋威の武具見落して
帰路急ぐ道後の湯にも寄らずして
甲斐御岳仙峨の滝へ馬車でゆれ　大阪市　中西兼治郎
本物とならべにせ物出来をほめ
くせやおへん病気ですねと言う浮気
うちの娘にパンチパーマの虫がつき
ぜいたくな我慢サウナの中でする　大阪市　古川美津枝
球団の策謀がうむ名ドラマ
まねき見て京の師走は始まりぬ
死ぬ時は死ぬがよろしい松竹梅
百八ツ静かにきいて眼鏡ふく　大阪市　寺井東雲
傾きをささえているのが借金で
長生きは大恥と言いよく食べる
救急車着いても医者は急がない
匙投げた患者に医者は嘘を言う　大阪市　板東倫子
時候より株の話で挨拶し
貯めてから人生観の変る人
楢山へ笑い袋を持って行こう
建前の夫を本音の妻が責め　岸和田市　島崎冨志子
優勝の沖縄心が少し晴れ
あと一枚のカレンダーにある誕生日
台風がそれて鉢植重いこと
性別は聞かず産声まで待とう　岸和田市　芳地狸村

京の旅（二句）

説法が落語になっている和尚（妙満寺）
借景にタワーが入る京の庭（渉成園）
占いが気になりだした適齢期
バスツアー隣が気付く乗り遅れ　鳥取市　森田熊生
日本が好きでうどんの箸を割る

出し切った汗声グラウンド夕焼ける
消しゴムがコロコロ答みつからず
さよならが素直に言えた秋の風

鳥取県　林　露杖

法話きく耳と中傷きく耳と
病む妻の小言宥める骨がある
敵失でとれた点でも勝は勝
よいことも大禍もなくて去年今年

鳥取県　森山盛桜

何するという事は無い信号機
元旦の合い鍵少し油断する
片方の目玉を捜すダルマです
人情を受ける両手を丸くする

大田市　藤田軒太楼

下手な考え休むに似たり寝るとする
またと来ぬ本番汗を掻き汗を拭き
受皿も持たぬ気短か先急ぐ
孫の守りゲートボールに日々是好

仙台市　川村映輝

伊達さんの偉業の一つ四っ谷堰
身辺を整理してから入院す
週休二日肝臓の負担重くなる
嫁の悪口酒の肴じゃまずくなる

竹原市　森井菁居

スランプが続いて爪が伸びている
ともかくも勉強部屋の灯を信ず
矢印は要らぬてっぺんめざすのみ
一期一会噛みしめさせて夕焼ける

守口市　羽原静歩

レトロブームいえいえ私は未来派で
せんねん灸まだまだ生きる欲を持ち
遠いシグナルに浄土が近くなる
人間の祈りの石よ大鳥居

東大阪市　森下愛論

片づけて坐って昼のメロドラマ
良心で喰えるかいなと居直られ
恐縮の盃だんだん目がすわり
飲み仲間だけが居残る通夜の席

貝塚市　行天千代

老人会で般若心経習って来
どこまでもつづく玉砂利ハイヒール
見苦しい少しの隙間へ腰かける
次の世もつないでおきたい紅の糸

米子市　田中亜弥

赤ちゃんの拳の中は徳いっぱい
凧合戦作戦だけはしゃべるなよ
耕して今日もうれしい花暦
笑わせて少し力をぬいてやる

高石市　浅野房子

足跡は消しても傷はまだ痛む

生涯をあなたのそばで鞄持ち
とある午後猫と目が合う網戸ごし
花時計待っている間に枯れてくる

米子市　野坂なみ

竹下総理誕生

キラキラと奥出雲にも陽が登る
遠い日のキャラメル分けた温もりよ
宍道湖で無口になった蜆たち
おみやげに料紙いただく有難さ

奈良市　天正千梢

楽譜読めずモーツアルトに酔うている
輪廻の話うなずいている無神論
便利さの洪水の中で足腰いたみ出し
縄長くながく八十年のたずなとし

神戸市　山口美穂

山茶花の紅を便りに書き添える
つわぶきの黄に秋深し人恋し
イヤリング迷うて琥珀に決めました
お香席しばし雅の顔をして

大和高田市　岸本豊平次

通勤に対向電車は空いている
家族でも多数決には父が負け
家計簿があなどっていた幼稚園
ペンキ屋が塗ればまだもつ家と言う

姫路市　人見翠記

ブランドのバッグを提げてガニ股で
金かかる子に育てておいて嫁の愚痴
キャスター付鞄を押して人を縫い
師の君の難聴会話笑うとく

宝塚市　丸山よし津

アルバイト苦学の文字は遠くなる
その時は音を立てずに来て欲しい
傷全部見せて気楽な道を行く
金余り贋の名画を買わされる

寝屋川市　江口度

天に唾女をいじめないように
針のない時計で童話にもならぬ
人ごみをじっと見下ろすはぐれ鳩
着せかえる間も笛を吹く菊人形

岡山市　川端柳子

靴下の穴おずおずと世間観る
コタツから鎖が放してはくれぬ
手を振って今風という別れ方
わがままもいいの生きててほしいから

羽曳野市　佐野白水

京都行き金閣公開まで延ばし

亡父五十忌、亡母十五忌の法要

五十忌の亡父の遺影は若過ぎる
亡父と亡母一族四十一人集め
大僧上の読経亡父亡母聞き給え

岡山県　岩道博友

傷口の消毒綿から恋が出来
極楽か地獄か道標付いてない
ししおどし観光客が去んで止み
終局は横道に入り飲む話

岡山県　山本玉恵

思いあぐねて手の鳴る方へ向きを変え
待ち針を一つずらして今日を生き
縄電車中の一人がストをする
世渡りが下手でも笑顔よう捨てぬ

豊中市　田中正坊

エリートの菊が集うた菊花展
ネクタイをしめるとピンとする背筋
子孫には残してならぬ金と核
実りある余生を希う松飾り

羽曳野市　田中隆二

割り箸に人恋しさがつきまとい
人生はかくありたしと聞く話
本心とは別阿呆なことばかり言う
考えてみますみますとほっとかれ

唐津市　筒井朴竜

退官の後へ盆栽松手入れ
ニューリーダー松竹梅も順不同
自己主張押さえ盆栽松造り
潮騒の松葉雫よ松露掘る

唐津市　浜本ちよ

人生のラストを飾る日々にする
許された二人に茨の道続く
二次会は上戸ばかりと限らない
譲られた席借物をした心地

呉市　林野甦光

春抱いて恵方より来る遠回り
見違える程にはならぬ化粧水
一年の計ブロンズの裸婦磨く
会員になると詐欺師が目を付ける

福岡県　横地雅風

背なに湯を浴びて東天拝す宿
のど飴を食べて老人しゃべり出す
ブロイラーのようにお米も乾燥機
文人か二の字二の字を浜に描き

笠岡市　松本忠三

ふりかえる幸せ味方がついてくる
善し悪しを誰が決めたか年廻り
達磨さん一つ目のまま何処へ行った
現代っ子夕焼小焼へ無表情

和泉市　西岡洛酔

サングラス隠す野心の孤独さよ
笹舟に流した過去は辛かった
女傘覗いて見たし小糠雨
豊かなる胸は母です女です

鯛の餌にされたくはないエビの自負　橿原市　岩井本蔭棒

駅見れば小走りになる癖かなし
凡俗の悲しさ銭を拾う夢
氷山のその一角になる不運　高槻市　川島諷云児

年毎に意地も背中も丸くなる
故郷が無性に恋し冬木立
母さんの涙に弱い葱坊主
らしくない夫婦とウマが合うツアー　高槻市　河瀬芳子

後手後手に儲けばなしを聞いている
寂しくはないかと男萩の道
わたしにも言いたいことのあるグラス
すりへった奥歯で言葉噛み殺す　松原市　北野久子

秋も又出費つづきでままならず
嫁の肩持てば家風が変りゆく
好きなのは酒と女と言いたそう
頼られる倖せ抱いて生きている　松原市　小池しげお

からかった女にあんじょうからかわれ
体験談嘘のところが面白し
ロボットに知れたらアカン程もうけ
売り出しの粗品二ツそっとくれ　河内長野市　井上喜酔

良薬と信じた酒の酔い心地
信心の声とコーラス別な喉
長生きの自慢はなんと総入歯
人間に分らぬ鳩のラブソング　東大阪市　崎山美子

後ろから見れば親しみもてる鬼
茶のドレス一足はやい秋を着る
針箱が語る女系家族の裏表
お化粧に時間がかかるのが美人　富田林市　田形美緒

有為転変澄むことのない大黄河
梵鐘の響き無欲なるべしと
街々に第九響いて暮となる
帯芯に固い決意を秘めている　枚方市　宮川珠笑

台風が同行してくれ夫婦旅
寝台車銀婚夫婦へ同じ揺れ
肩貸した居眠り覚めてつんと降り
本人が外泊してる誕生日　八尾市　宮崎シマ子

検査結果何事もなく弾む秋
無人駅紅葉山から来た谺
仲間かな同じ柄の宿ゆかた
蘇生して輝く姿金閣寺　西宮市　奥田みつ子

勲章はないが主婦業優等生

花の名をたくさん知っていて独り
　姑の死に寄せて
蔦もみじ土蔵に映えて姑は亡し
好物がまだ棚にある二七日　七尾市　松高秀峰

おでん煮る弱火強火に母の味
死んだ気でやると年賀に書いて来る
嫁姑火種はいつも壺に入れ
愚痴言わぬ母の涙が子を諭す　高知県　中内朱坊

減反の労苦空しい稲の出来
転作のトマト季節に欺かれ
焦りなど無し年金で足る余生
忘年会早や新年の飲むプラン　弘前市　斉藤劦

山に雪朝の味噌汁旨くなり
セールスが林檎の出来を褒めて行き
わいうえお仮名を書くよに散る落葉
鰯二枚齧り終えてもまだ留守番　大阪市　鍛原千里

伝言板そんな若さもあったっけ
柿の実が熟れれば答きっと出る
逃げ道があるので少し強くなり　大阪市　町田達子

サスペンス追うと俄に鳴る時計
ストレスを皆吐き出す風の駅

故郷便祭り囃子が聞えそう　大阪市　松尾柳右子

姫ばかりぼやいて父の丸い肩
証券の話は他人の事と聞き
花束を抱いて娘がふえ孫がふえ　大阪市　井上白峰

物忘れ控えたメモも置き忘れ
謙遜の辞退にライバル躊躇せず
美人薄命なぜか女房はまだ元気　大阪市　横山為子

連絡船今日一日の旅終る
ドクターに命預けて禁煙中
花時計便りをのせて時刻む　鳥取県　金川満春

喜寿過ぎて淡い愛情庇い合う
喜寿過ぎて楢山の灯の見えかくれ
暴落のショック地球を駆け巡る　鳥取県　羽津川公乃

問診表身内に肺ガンひとり居る
握らせた手応え酒がよくまわる
あの世へは地つづき曼珠沙華が炎え　鳥取県　江原とみお

僕と君はっきりさせる杭をうつ
金のいる話になると妻がでる
黒眼鏡はずせと澄んだ空が言う　鳥取県　さえきやえ

白鳥を待つ湖に下駄が浮く
独学で歩く男にあるなさけ
つまずいたお蔭できょうの灯をともす
和歌山市　後藤正子

唐突な言葉を添えて帰り花
ナナカマドの紅い実ほどに意志表示
思いがけぬ蕾へ空気軽くなる
和歌山市　玉井豊太

綻びる縫い目を母の強い糸
金は天から降らぬあきない腕比べ
曇り空続いて父の荷が重い
和歌山市　青枝鉄治

信濃路に狐通るのしるべあり
旅の風一期一会のドラマあり
種まいた夜に神からくれた慈雨
和歌山市　山田高夫

謎なぞを頬に女の片笑窪
完璧という弱点もある君子
恍惚の気儘を許す置炬燵
出雲市　板垣夢酔

賀状見て欠礼あわてまいことか
ひざ枕覚めて座布団とは悔し
終いまで聞けと出鼻をくじかれる
出雲市　石倉芙佐子

浮き雲の未練を映す高瀬川
簡単に曲ってしまう銀の匙

幽玄も夢幻も枯葉こだわらず
出雲市　小白金房子

まけて勝つ母が教える丸い文字
席一つ空けて上司を待つ欠伸
稲架に大根白く冬を干す
竹原市　岩本笑子

和服着て夜汽車にのれば雨になり
いつかきっと自由の鳥になってやる
初春明ける双生児のケンカから明ける
竹原市　信本博子

人生に未練を持った祈りの手
三つ目の顔は見せない事にする
砂時計なら時が戻せるかも知れぬ
竹原市　古田太虚

龍の画を習い初める十二月
無情という勿れ我に妻子あり
しおれない花がほこりをかぶってる
富田林市　松本今日子

墨をするただそれだけで澄む心
日めくりとても真面目に暮してる
本音より雑音ばかり補聴器よ
富田林市　片岡智恵子

天蓋に鐘の音響く死者生者
皿と皿厨のひと日を響き合う
ふかし芋体重計の目が躍る
岡山市　井上柳五郎

雨しとど猿も出不精高崎山
伝説と史話のカクテル九州路
味覚より腹に八分でよし明治

岡山市　行吉照路

菊花展箸と小筆とピンセット
再就職軍隊調がさまになり
ええじゃないか孫も私の血をつなぐ

岡山県　荻野鮫虎狼

本年も無事息災と年賀書く
普段着の母８ミリの中に居る
神主の祓い給えで暮れて明け

岡山県　二宗吟平

お神輿に勿体なくも犬が吠え
電話とは裏腹あいそのない机
暗唱で来いと師匠は無理を言う

岡山県　矢内寿恵子

雑兵で生きれば風も気にならぬ
風雪に耐えて馴染んだ風の街
年金の枠で気ままな趣味が増え

姫路市　大原葉香

豊作の米に政府が慌ててる
大根おろしぴりりと冬を目覚めさせ
長生きの秘訣はみんな結果論

姫路市　丁坪サワ子

ちょっぴりと悪魔が覗くティータイム
姥ざかり読んで生き方替えてみる
翔んでいる姑は孫と馬が合い

姫路市　釣遊光

雑念を捨てて写経の筆をとり
一病を持つ身へ喜寿の祝い酒
福寿草耐えた苦労は語らない

吹田市　茂見よ志子

何故こうも横着になる一人めし
消化剤やめて歯科医へ行くことに
充電の為の読書は眠くなり

吹田市　園田文子

湖の愛を告げてる渡り鳥
叩かれても母ちゃんがいい流れ星
生きていて聞く友達のいい言葉

豊中市　上田登志実

充電をしてもパワーがすぐおちて
うしろから来るランナーの執拗さ
沖縄の酒場で唄う島育ち

豊中市　辻川慶子

湯ヶ原熱海旅行

旅はよしひととき主婦を忘れさせ
同居してさざ波もある屋根の下
忘年会私もあります二つ三つ

町田市　竹内紫錆

固有名詞で群ぬく課長
ひょうきん者もこわばる勝負
さわぐ教室どなれぬ講師

終章は趣味に明け暮れ日々速む　静岡市　渥美弧秀

湯上がりの妻に酌するフルムーン

嵯峨野路は三々五々と秋ひかる　倉吉市　野中御前

透明な器で中身意識する

荒れた酒妻は黙って茶をいれる

それからは馬鹿ばかしくて黙秘権　倉吉市　淡路ゆり子

小舟だが乗り出すチャンス初日の出

にんにく酒飲んで明日に挑戦す

のれん分け秘密があった落し蓋　西宮市　瀬尾六郎太

木のクセを知りつくして伽藍成り

実篤の字が好き画が好き美しきかな

洗濯に出した途端に入用で　高知県　小澤幸泉

ふりかえる度に重さが増してくる

履歴書のあと半分はうそを書き

頬杖のうえを空しい風が吹き　高知市　北川竹萌

大正の殻破っても半端者

土愛し鍬一筋に深く掘り

愛土から見事な大根抜きあげる　広島県　藤解静風

一生の不作どちらもそう思い

人並みという曖昧な群に住む

敵の矢は前から来るとみた誤算　広島県　田村新造

昇天の竜連凧が追っていき

玄海で烏賊釣る船を見て育ち

仲秋無月それでも琴の音は聞こえ　兵庫県　脇田米朝

さわやかな帰路へトンボが従いてくる

絵にならぬ肩書又も振りかざし

はしゃいでる白いすすきの揺れる丘　八尾市　山下みつる

夜昼のけじめがつかぬ地下の職

カレンダーに丸で表し旅に出る

ガイド本持ってる割に旅はせず　堺市　柿花紀美女

どの窓も平和に見える団地の灯

ふる里の川は淋しさだけ残り

いつか来る別離を思う夫の手　羽咋市　三宅ろ亭

チラシ見て正月品を揃える気

能登の海こんなにおいしい鰤と鱈

この街の雪吊りが好き途中下車　羽曳野市　中村優

年金でモンペ美人が老化する

月の夜に大正琴の枯すすき

パレットに夢二は死せずおさげ髪

気にしてた嫁が明るく返事する　岸和田市　清野こう
端金ではすまされぬお年玉
紅葉を裾模様にして木曽穂高　玉野市　小谷仙山
下っぱの椅子の固さよ冷たさよ
順番が有って無い様に人が散る
ぜいたくを皿一ぱいに盛って見せ　松山市　谷信夫
付添さん飴玉口へ入れてくれ
恩讐の時の流れに消えてゆき
欠伸してもくしゃみをしても頻尿の　和泉市　岡井やすお
相乗りで可も不可もあり地方自治
この分じゃ長生きするのが怖くなる
そろばんの指がコンピューターに活き　鳥取県　広本文子
性格が不一致だから夫婦です
ケーキ入刀さてさて鬼か蛇になるか
もう一度男を振り向かせるスリル　交野市　山本テルミ
折れてみて折れてよかった朝の顔
満月が見事に裸木に割られ
軽い服軽い靴へと年を取る　寝屋川市　堀江光子
秋風の立つ日を待って明日香村

秋の夜たしなめられる言葉かず
秋の灯に拾い読みなど許されず　川西市　松本ただし
噂もう先にこっちへ着いていた
お詫びには草書の言葉が都合よい
補聴器を地獄耳にはしたくない　島根県　松本文子
リンゴ噛む友の訃を聞く空しさに
祈りにも順序があって鐘鳴らす
納骨も無事に一人のお茶すする　海南市　三宅保
大過なく勤めましたとうぬぼれや
五センチのずれがつづいている夫婦
坪千万円せめて土足で踏んでやる　芦屋市　竹中綾珠
八月四日入院八月十四日左胯関節手術
病窓から飛行機どれも玩具めく
四、五年も痛んだ脚が嘘のよう
窓に写る朝やけ雲の美しさ　藤井寺市　福元みのる
酒という強い味方のある孤独
飲みっぷりだけは上役みなしのぎ
右派と左派中が正とは限らない　出雲市　小玉満江
血圧とひざの痛みを一くさり
縁有って等といきさつ語らない

姑は年期の入ったとぼけ振り　河内長野市　植村毟代

七福神一度招待したい人
同じ服視線をそらす両向い
もう少し厳しくなってもよい日本　茨木市　堀良江

ハンサムな検眼者顔寄せてくる
初対面話題やっぱり孫のこと
聞き上手ないしょごとまで引き出され　大阪市　渡部さと美

故郷のみかんと正月には逢える
酸っぱさと甘さとみかんの丸さなり　大阪市　北山悟郎

僕の血が犠牲になること好きらしい
十一階高所恐怖症が住んでいる　大阪市　塩田新一郎

抜いてみた刺がこんなに小さくて
上品な音よと妻は己が屁に　大阪市　宮下とし

階段に仲間同士の会議あり
敬老の日孫の結納の日もきまり　米子市　茂理高代

幸せな柿に夕陽燃えてくれ
唐草でみんな包んで楢山へ　米子市　川上より子

争って見てもしょせんは妻である
温い話家族のばか笑い　枚方市　二宮山久

待合室素知らぬ振りで聞く話
病室の下で「ヤーキイモ」声を上げ　姫路市　中塚遊峰

君のこと隠した日から火の匂い
断ち切れぬ酒で人生自己弁護　福岡県　吉川（きっかわ）一郎

二人づれ別府湯の町夢の町
団体客温泉玉子よく売れる　富田林市　新開千代女

読むでなし眠るでもない暖房車
まる三日声を取られた春の風邪　豊中市　一瀬福一

縁談に母が持ち出す伊勢暦
蜆舟島はしぐれて鐘の音　箕面市　椎江清芳

熟れる日々りんごに渋い顔出来ぬ
好きな道細くなるほどよい景色　弘前市　真喜内實

子の夢に母は毎朝水をやり
何事もないかのように子は育ち　出雲市　竹治ちかし

詩を織って散る銀杏
海猫（ごめ）鳴いて漁師迎え　岡山県　直原七面山

自選集

尚まるくなって十五夜城の上
ため込んだ愚痴をお城へ捨ててくる
遺産分け世間と同じ事を言う
今の世に六歳からと言う舞妓
万才をきいてる顔が尚おかし

高橋操子

はらわたに傷がいっぱいある魚
船底の箱に大事なものがある
みんな同じ箱を神から渡された
不本意なものまで箱に溜めている
みぞおちのあたりに潮が寄せて引く

八木千代

お正月の夫をうんと威張らせる
古い手でまだ誘惑をする電話
大屋根に上ると故里が見える
諦めた筈の命が餅を焼く

小出智子

どうぞお先にゆっくり歩くことにする
南天に教えられたる冬の天
百舌鳥啼いて冬の静寂取り戻す
煮もの屋に頑固な味が付けてある
袋小路喜劇の幕をあげる朝
詩ごころが無いと解らぬ枇杷の花

月原宵明

体調に自信湧いたり崩れたり
達者なら長生きしたいなと思う
メモしてたことをころっと忘れてた
貰うものもらいさよならすっと出る
集金が寄らずリズムがまた狂う

金井文秋

燃え尽きて悔いなく落葉風に舞う
礎に正しい杭を父が打つ
無位無冠その礎に母がいる

藤村〆女

諦めを重ねて老いを着ぶくれる
長い道いつかひとりになる訣れ

正本水客

箱根にて

硫黄泉白くあふれて秋を連れ
乙女峠の富士が身近に顔を寄せ
彫刻の森みどりと太陽わがものに
旧街道甘酒茶屋は風の中
緑のしじま風の光が語りかけ

児島与呂志

老い確か一蓮托生歯が痛む
本心は自分も知らない夜の闇
冬近い軒の陽ざしのつるし柿
茫洋の海に似合わぬ石蕗よ
石蕗がこんなに綺麗な色で咲く

黒川紫香

野仏に風は冷たし坂の道
ホテルでの寝正月とは佗しいね
奥様のすすめ上手に酔うてくる
神前で嘘は言わないことにする
自画像もやはり女にもてぬ顔
定退のゆとり早目に賀状書く

小林由多香

なつかしい汽笛津和野へ聞きにゆく
嫁がせたやすらぎ白い足袋を干す
楽天家に何かがあった腕を組み
初競りの蟹万円の泡を吹き

工藤甲吉

元日や齢を忘れることにせん
一本釣り永田町では人が釣れ
食いっぱぐれを烏勘左衛門嗤う
窓をあければ淡谷のり子は若返る
横綱の碑は村中の寄付で建ち

本田恵二朗

或る日ふと見果てぬ夢が空を翔ぶ
五十年たっても切れない縁の糸
月夜道狐がついて来る予感
舞扇殊勝な顔を作り合い
ご謙遜げなご自慢へかしこまり

大矢十郎

一家して祈る陛下のご全快
セールスに聞けば質問ほめてくれ
人形に食わせば孫も食べたがり
新築の優越感を撫でてくる
送るとも言わず一家でついて来る

猿芝居人間らしく呆けてきた
年賀状　魑魅魍魎も来て惑い
見倣うて今年は囃す位置にいる
唄われよわたしは囃す思い遣り
ようそろう取舵面舵やめられぬ

野村太茂津

酒の座を断る父の宵寝する
厄介なこと妻にまかせて寝てしまい
泳いでる鯉に希望の明日がある
家計簿に夫に見せるように書き
もう人の世話は御免と言いながら

長野文庫

御身大切なんて私の辞書にない
ふっ切れた迷い地獄に堕ちようと
焼酎をこよなく隠主の人間味
志同じゅうして右派と左派
久しぶり墨する駄句を所望され

山内静水

数の子も目出たく坐る三ヶ日
子や孫の希望叶えてほしい春
おみくじは縁談成就初笑い
桜土手わたしの跡を追う落葉

藤井明朗

中流の意識の中に見栄がある

水粉千翁

昇龍と架橋

昇龍へ春の日輪かな拝む
虹の橋架かる出逢いも七色に
凌ぐべし香るべくして花笑う
ふくいくとざわめく如し菊の園
茶へ問えばうなずくばかり安らぎぬ

米澤暁明

一力で義士の心にふれるもの
しこまれた言葉だろうが舞妓はん
正直が損した話ほんとだよ
座りこむ親娘買う気の呉服店
本を売る離宮の女やや冷た

橘高薫風

屠蘇祝うわが家の龍虎おだやかに
今は昔　昔は今の屠蘇の味
福寿草五人家族はこのような
見える風見えぬ風吹く十二月
十二月妻の侠気も役立たず

川柳太平記（116）

川柳の群像

大山竹二

東野大八

「作者のことば＝伝統川柳の５７５定型は不必要なほどの間（ま）、不必要なほどの助詞が、実は必要な味、或いは雰囲気をつくっていると思います。このわけのわからぬ味（俳諧的な）から脱皮、生れかわろうとする現代・詩川柳に志す人だちの意図はよく解ります。が、私にはまだ５７５定型の歯切れのよさの中で、すべき仕事が残っているように思います。いまのように定型川柳が未完のままでは心残りです。かつての新興川柳が成し遂げたような、定型川柳への頂点への道、これが伝統の滓がしみこんだ私という作家の針路です。

柳歴　大正十二年より作句。昭和三年　大阪「番傘」同人、のち昭和八年神戸「ふあうすと」同人となり今日に至る。生来の身弱、最近七年の病臥より回生。当五十歳。」（一九五七年十二月・川柳新書第27集　大山竹二集）

右の句集には八十句が集録されている。簡素な印刷物であるが、死去四年前の竹二の川柳観がよく示されている。

国敗れやはり十文の足袋を穿く　竹　二

学歴なし砕けて泡とうかぶ浪　〃　〃

門標に竹二としるすいのちかな　〃　〃

竹二は別号双竹亭。本名大山竹治。明治41年2月14日神戸市生れ。初号一狂を「ふあうすと」同人と同時に竹二と改号した。

「竹二は神戸市荒田町の貧民窟に生れた。刺墨の連中である博徒の多い中で育った。それは彼の没後出版された「大山竹二句集」（昭38刊）を見れば分る。小学校を出るとすぐ三菱銀行に給仕として勤めた。母が偉かった。彼の退社時間になると、銀行の裏門で待っていた。これが彼を真面目な青年に育て上げた。俊坊（小池鯉生）はそれをこの眼で見た。

句会へ出るようになって、紋太の和菓子店へ出入りした頃のことを竹二句集の序文に紋太が書いている。神戸新聞社が道を距てた向い側にあった。延原句沙弥が勤めていた。青森の奥昭二の弟が共同通信社に勤めていて句沙弥と机を並べていた。竹二を川柳に誘ったのは、奥昭二が、ふあうすとに所属していたのと関係がありそうだ。あや子夫人との仲人は増井不二也になっているが、住田藍旦（乱耽）が最初に逢わせたという説がある。竹二は文字をあや子夫人から習ったんだと思う。

大学へ行きたかった彼の心中は哀れであった。後から入社した者が追い抜いて、出世転勤する中にじっと堪えて、遂に三菱銀行神戸支店の監査役で没した。竹二の句には、他人と変った詠い振りの句が多い。東京では前田雀郎に一番なついていた。宇都宮図書館雀郎文庫の中に、竹二から雀郎宛の書が沢山あるのを実地に見た。（筆者宛小池鯉生書簡）

竹二は、昭和37年11月11日死去した。享年五四。暢真慈恵善士。この追悼記が「ふあう

すと」で特集されているが、彼の死に最も哀切な悼文を数ヵ月にわたり同誌に寄稿したのが房川素生であった。以下その抄録。

「この一連の作（大山一狂、婦系圖）は、昭和十二年のものであるから作者はまだ三十歳そこそこであった。

お蔦とは二重瞼のさびしき名　一　狂
美くしき無智十六の撥を持ち　〃
狛犬のうしろへ廻る恋ごころ　〃

こうした連作十五句に付して、彼は〝市井の夢〟と題しこう記している。

「新しい道に進んでゆく苦しみは尊い。近頃流行の現実主義、勿論賛成する。が、そんな人達ばかりの川柳界になった時の空漠を考えると、とてもさびしい。一人位低俗な生き方をしても許されてよいだろう。嘲笑われるとも、青春の感傷を過去に持ち、旧い道徳にしたしんでいく」

竹二は右の文中の〝青春の感傷を過去に持ち〟という程の歳ではなかった。その頃作者はすでに、川柳の在り方にもっと高いものを望み、その方向に進んでいた気持から、嘲笑とも、と書かざるを得なかったのであらう。

（略）作者竹二はこの作に一応断ったような「市井の夢」を付しているが、しかし前号に「竹二の郷愁的な庶民性」と書いた私の、その庶民性、情緒性、そしてそれらのものからの諦観、または義理人情についての竹二の憶い出を、もう少し書き続けたなれば「婦系圖」が竹二の言う単なる休息的作品でなかったかもしれぬものがあると思う。」（「ふあうすと」昭38年1月号〝秀作家竹二の憶い出〟）

「友達を五人選んでやっと寝る
お早ようとまるで明るい靴磨き

格調のある句を作るので知られている竹二だったから、その用語も句にふさわしい現代的な新鮮さが用意されてあったが、〈やっと寝る〉のやっと〈まるで明るい〉のまるで、などは用いかたによっては俗語であり、広い意味では方言的だと言える。勿論、現代性もあるし、その効果も計算されてある句なのだが、しかもなお竹二の生地を、これらの作品から感じとれるのである。格調型の句には、意が働いていると言えるなら、これらの句は情を見せた句と言えるかもしれない。（略）

竹二は学歴を軽く見てはいなかった。ひがみもしなかった。学歴が人間形成に、社会的貢献に立派に役立っている雰囲気の中にいた竹二だった。むしろそれが精進努力にもなったであらうことは否めない。竹二は、高いもの尊いもの深いものを、素直に憧憬し、尊敬できる性質であった。それは彼の川柳からもよく受取れるものであった。」（「ふあうすと」昭38年3月号〝秀作家竹二の憶い出〟(2)）

清新の気魄で、未開の扉をたたく抒情の秀麗さは「竹二調の深味と滋味の抱懐は思想としての頂点であらう」（葵徳三）と評価されているように、竹二作品は「ふあうすと」社中に止らず、川柳界においてその魅力に傾倒する多くの支持者を得ていた。

花火黄に空の重心全く西　竹　二
特に厭う温泉の中の身の浮力　〃
臥して思う漱石ぎらい志賀嫌い　〃

竹二の句はそのインテリジェンスに溢れたリリシズムの極と評し難解だとされているが、その知情意の深渕さは特異のものである。久保田万太郎や、前田雀郎に傾倒し、山口誓子に定型の真をみたとする竹二は、はじめの「川柳新書竹二集」序文における定型確立の真を追う心こそ、真の竹二が居たのである。

★次回は「**森田一二**」

誹風柳多留廿六篇研究（三十四丁）

鈴木　黄・石田晋一・南　得二
小野真孝・本多正範・石田成佳
大屋六郎・八木敬一・多田　光
故岡田　甫

574　**寝入たふりてまつてるも古風也**

鈴木＝他の部屋などに寄っている女郎を待っている客の情景。狸寝入りして今来るか〳〵と待っているような客は当世風ではなく、むしろ古風な昔かたぎなお客である、というところ。

上草履ぬいだを聞てそら寝入　　算四19

石田晋＝洒落本「繁千話」に「空琴、よりそへて「モシへ〳〵、もう寝なんしたかへ〳〵」馬骨、さすが狸ねいりは古風とおもってはいれど」とある。ここでは古風なやり方が陳腐である、というほどの意味ではないか。

八木＝「古風な昔かたぎ」というより「やり方が陳腐」あるいは「使い古した手」といったニュアンスであろう。

多田＝同右。

575　**談義僧すしをつけるハ手柄也**

鈴木＝談義とは、宗旨の有り難さを布教するのを目的としたが、人を集める為に、漢書の講義をしたり軍談物や仇討物語などを面白おかしく聞かせたもので、之等を語る僧侶を「談義僧」と言った。

「すしをつけるハ」は人間の鮓漬けのように、会場一杯に聴衆を入れることと理解する。

いびりてを沢山よせる談義僧　　二二14

南＝賛。

本堂へ鮓シを漬るが談義僧　　五八37

大屋＝「すしをつける」は、「筋をつける」だろうと思います。仏の教えをわかりやすく、面白く筋立てて話すわけですから、うまい具合に筋をつける、それは議義僧の手並だということではないかと考えてみた次第。

八木＝談義僧と魚の熟れ鮓の取り合せ、それを「手柄なり」と持って来た所に作者の苦心があろうか。

多田＝賛。

576　**おしめりがほしいと紺屋世事を言**

鈴木＝ひと雨ほしいような晴天続きのさなか紺屋にとってはもっけの幸いの天候であるにかかわらず、「このへんでおしめりがほしいですネ」と心にもないお世辞を紺屋が言ったということであるが、紺屋は元来ウソをつく

ことになっているので、こんな心にもない世辞も当然だろうという所か。

石田晋＝諺「紺屋の明後日鍛冶今度」を使ったもの。礎の「嘘をつく」を強調する必要はないと思うが。雨が降ってはこまる紺屋が言うからおかしいということではないか。

石田成＝賛。晴天続きで商売繁昌、お世事が言えるだけ余裕が有る。

多田＝同。

577　**廿日過素顔乱鬢文を書キ**

鈴木＝吉原の「廿日過ぎ」「暮の文」の句。遊女が十二月二十日過ぎに、なりふりかまわず、心あたりの客筋に手紙で無心やらお願いやらを書き送る状景。

廿日過文でおっかけおひ廻し　四29

石田成＝賛。

廿日過物くるハしく文を書　第一45

多田＝賛。

578　**因果な子だと賀の餅を里て喰**

鈴木＝「賀の餅」は、賀の祝に搗く餅。賀寿の本人の手で、その餅に紅で寿の字を書き、そして親類縁者へ配ったのである。

「因果な子」は不運なめぐりあわせな娘という意で、姑が長生きすれば表面はおめでたいとお祝いするが、嫁さんにとっては不運なめぐり合せである。

南＝賛。

賀の餅をばか〳〵しいと里でくい　四〇26

賀の祝ひ目出度も無ィ嫁の里　一三九40

大屋＝賛。

里へ来てほんにわたしは因果者　明五智5

多田＝賛。

579　**重箱を隣へ見せて猫をかり**

鈴木＝はっきりしないが、花見の句か。花見のために重箱にご馳走をつめこみ、これを隣人に見せて「これから花見に行くのだが、三味線を貸してくれないか」と、三味線を借りる。

南＝重箱は普段遣わないもの、適々入用となって取り出すと鼠に噛じられている。これは大変鼠めがというわけで、隣へ重箱を持って行き、これこの通りと見せて猫を借りるということか。

本多＝「猫」を三味線の異称ととって、礎稿のような場合と思う。

大屋＝花見に行く仕度をして「重詰め」を隣に見せるというのは少々無理でしょう。

多田＝駄労解。宴席で重箱に詰めた何かのご馳走を順番に回す。「ごらんなさいこんなごちそうですよ」と隣席の人に見せて渡し、さて次に三味線を借りる。

580　**湊のことく船かつく下手講師**

鈴木＝はっきりしない。下手な講釈師は抑揚もなく内容も平凡で面白くなく、丁度船が波のおだやかな港に着くようなものだ、という事か。

南＝「船かつく」の語意はっきりせず、つくは着くか。船を漕ぐ居眠りの状態がすぎて観客がゴロゴロ横に臥せて熟睡するの景。あたかも湊に於ける到着した多くの船が長い船腹を並べたように、ゴロゴロ横臥した状態か。

下手講師寝るとハたたき起ス也　九三1

下手講師昼寝死人の山を築　一二五21

句意は、講釈師が下手で、湊についた舟のごとく観客が次々と枕を並べて寝入ってしまうとのこと。

八木＝南氏説にだいたい賛である。元来「湊の如く船がつく」は賑わう、のイメージがあるのであろうが、この賑は聴衆が多い、の意ではなく、ガヤガヤして私語多く謹聴していない、ぐらいに解したい。

多田＝賛。

『俳諧あづまからげ』（上）

――上方句と江戸万句合の接点――

阿達義雄

（一）

『あづまからげ』は、江戸芝切通の中村小兵衛板で、宝暦四年秋以来の湖月点の万句合の、勝句の摺物二十四部からの抜萃であり、その前句題は二乃至五で、それに冠句題が一つずつ添えられていた。例えば

ひっぱられけり〳〵
こゝを大事と〳〵
おいてくだんせ〳〵
なにもいはずに手を合せけり
それ〳〵に

という風に簡潔になっていて、「なにもいはずに手を合せけり」の前句を除外すれば、殆んど同語反復式の前句であって、川柳評万句合の出題方式に似ており、川柳評の前駆的な姿を見せていた。

この『あづまからげ』の句は、川柳評以前の前句附の中で、川柳点の前句附に最も近似して、多くの佳句を擁しているという点で注目すべきものである。

『あづまからげ』の句を、その取材の点から見ると、遊里に関係ある句が多く、

書いた内いつち嘘なに請出され
―前句「ま、にならぬはうきよなりけり」
親は売り他人は買てかわゆがる
―前句「ぜひもない事〳〵」
宿に寝るとは格別の三つぶとん（注1）
―前句「こころよい事〳〵」
女房に登天の匂ひ嗅出され（注2）
―前句「かほをあかめて〳〵」

これ等にあっては、未だ人情の機微を穿つという程に至っていないが、人生の皮肉が西鶴的な眼で見詰められ、多少割切り過ぎた様な点も見られるといえ、既に川柳点の発想に近いものになっていた。

『あづまからげ』には女性の容貌、化粧、姿態を詠んだ句が目につく。例えば、

美しい貌に生れて気がつまり
―前句「こまりはてたり〳〵」
死にたがる女のくせに身だしなみ
―前句「念を入れけり〳〵」
今日からはひとりの為にする化粧
―前句「おちつきにけり〳〵」
髪ぐせの直りて久し留守の内
―前句「まちかねにけり〳〵」

一般に名詞止が多いので、軽みや洒落が余り感じられないが、後来の川柳点などの着想の源泉の一つになっているように思われる。

以上は、どちらかと言えば、心的態度を中心にした句である。これに対し、女性の動作を狙った句は、

鼻紙でおこす炬燵のもどかしさ
―前句「のぞかれにけり〳〵」
唐紙にきつい悋気の当りやふ
―前句「ぐわらり〳〵と〳〵」

のぞかれて盥の内にかしこまり

―前句「かほをあかめて〳〵」

焦点を男女の愛欲・口説に当てた句の多く見られるのも、前句題の出し方に制せられたものであろう。すなわち「来るか〳〵と待ちわびて居る」の前句に附けた句としては、

退屈の櫛は後ろへぬけて落ち
虫の音が止むと枕に耳をよせ

などがあり、「羞づかしそうにうつむいている」の附句には、

落したる文へそのまゝかしこまり
私がのと言はれぬ櫛の有りどころ

などがあり、更に「わけもないことばかりいわんす」の話体の前句につけられた句には次の様なのが見られる。

口説身も口説かるゝ身も手を合せ
大たんと知って口説がにくいかへ
なびきたる証拠は髪に畳の粉
お貌よりおまへのうそが美しい

〔注〕

(1)三蒲団……妓楼における三枚重ねの蒲団で、華魁が馴染客に無心して調達して貰ったもの。

(2)登天の句…登楼した気配。

(二)

湖月点には、発想において川柳点によく似ているものが多い。だが、同句も見当たらないので、比較的川柳点に似ている句と並べてみると、

旅芝居皆なたゝんで馬につけ　（湖月点）
―「おもい事かな〳〵」
一ト村を粋にして立つ旅芝居　（柳多留二編・11）

―「にぎやかな事〳〵」
のべ紙で草を押へりや脇で鳴　（湖月点）
―「いつのまにやら〳〵」
押へれば薄離せばきりぎりす　（柳多留五・24）

口説く身も口説かれる身も手を合せ　（湖月点）
―「わけもないことばかりいわしやんす」
手をとると片手で櫛を深くさし　（柳多留一四・33）

さほど句数も多くない湖月評『俳諧あづまからげ』の一巻に櫛の句が五句も発見される。すなわち、

退屈の櫛は後ろへぬけて落ち
私がのと言はれぬ櫛の有りどころ
なびきたる証拠は髪に畳の粉
あのやうな作にも櫛の施主がある
二つ指す櫛にも縁のあるとなし

などであるが、これらを一括しても、前に示した柳多留の句の「手をとると片手に櫛を深くさし」の含蓄の深さには及ばないであろう。

次に湖月点から特に注意すべき句や問題になる句を示してみると、

提灯が消えて座頭に手を引かれ
―「ありさうな事〳〵」
たて明に下手大工めと戸をたたき
―「こまりこそすれ〳〵」
先祖から請た異見を子にゆずる
―「かたい顔して〳〵」
死に行く身にもよけるはぬかり道
―「そろり〳〵と〳〵」
片乳房にぎるが欲の出来初め
―「ひっぱられけり〳〵」

以上に挙げた湖月点の代表句によって考えてみるに、大体において題材は、市井、特に家庭内に取られることが多くなって来ており、これは人々が次第に現実卑近のものに目を注ぐようになった結果でもあろう。

同人特集

私の一句

てっちりや昨日の流れ今日のつき　八尾市　西尾栞

お人好し褒めると安来節唄う　米子市　小西雄々

幸せに生きる女の心掛け　和歌山市　山川克子

新人類雄も負けずに化粧する　橿原市　岩井本蔭棒

しゃがませてのぞきこませてやぶこうじ　倉敷市　水粉千翁

嫁姑つなぐ手に咲く福寿草　大阪市　井上白峰

鈍足の一生なれど歩は確か　福岡市　吉川一郎

本心を滝の前なら話せそう　倉敷市　小野克枝

夫婦とも一緒におわる手内職　松原市　小池しげお

手のひらに何かまじない書いてある　島根県　西村早苗

木枯しは自分で寒い音を出し　川西市　松本ただし

一枚のはがき見事な鯛を釣り　和歌山市　青枝鉄治

美人湯で効能書をたしかめる　大阪市　津守柳伸

残り火を温め十指にある祈り　出雲市　園山多賀子

二者択一踏絵にジョーク通じない　美祢市　安平次弘道

指紋なと残しておゆき花泥棒　米子市　石垣花子

方向音痴で又ふんわりとはぐれ鳥　島根県　松本文子

にいちゃんと言うて一ぱい注ぎに来る　岡山県　二宗吟平

夫婦茶碗いずれ一つが残る日も　大阪市　長谷川春蘭

不機嫌な男を乗せる話選る　吹田市　茂見よ志子

飲んで歌って踊って出れば雪模様　倉敷市　野田素身郎

好きな女遠くに在りて秋深む　出雲市　原独仙

巨師偲ぶ影をとどめる福寿草　和歌山市　山田高夫

交際の好きな財布で痩せている　兵庫県　脇田米朝

閉山の挽歌フェリーが島を発つ　唐津市　浜本義美

生き甲斐は子や孫よりも下手な趣味　唐津市　浜本ちよ

古稀の手に息子の温いお年玉　下関市　石川侃流洞

鈴振って見ても叶えぬ願い事　豊中市　一瀬福一

会費だけ食べて来ますとパフ叩く　倉敷市　稲田豊作

妻連れて月を愛で　岡山県　直原七面山

楽譜無き歌を奏でて来た山河　神戸市　仲　どんたく

もう少し開けずにおこう玉手箱　豊中市　上田登志実

大胆に表と裏を使い分け　出雲市　石倉芙佐子

あの人がと近所の人も裏切られ　柳井市　弘津柳慶

勝敗がついて王と歩同じ箱　静岡市　永倉僕川

灯を消すともつれた糸が解けてくる　高槻市　川島諷云児

子の夢を泳がす母の海は凪　出雲市　竹治ちかし

朝礼の百面相へハッパかけ　守口市　羽原静歩

荒地には荒地に生きる草の花　大阪市　本間満津子

故郷の山は仏に見えてくる　倉吉市　淡路ゆり子

たるんでる息子に赤い唐辛子　大阪市　山根いつを

新人類あしたの風をもて遊ぶ　呉市　林野甦光

札のしわ伸ばしてタバコ一つ買い　東大阪市　森下愛論

売れて行く植木にもある適齢期　大阪市　金井文秋

ひたむきに生きて涅槃の蛙がたつ　海南市　三宅保

衣替え形見の帯を〆めて見る　貝塚市　行天千代

自画像が私をじっと見つめる日　寝屋川市　堀江光子

魂胆があって言訳引っ込める　倉吉市　奥谷弘朗

ふとんほかほか草ぼかぽかの春がある　倉吉市　渡辺菩句

職の無い靴もやっぱり減っている　鳥取県　松下たつみ

年賀状待てない一言添えておく　姫路市　越田みつこ

ダイエット三日で崩れたお餅腹　姫路市　丁坪サワ子

蟹喰いに来いよと誘う友が無い　姫路市　釣　遊光

付け下げの躾糸切る小唄会　姫路市　中塚遊峰

ハトバスの二時間コースで時かせぐ　姫路市　増田とし

茶柱を信じて受験の子を送る　姫路市　松浦輝月

スナップへ問われもせんのにハワイです　姫路市　植村客遊子

気がかりを一つ持ってる老夫婦　和歌山県　児島与呂志

無職にも朝昼晩の白い飯　姫路市　大原葉香

距離少し取って友情気が付かず　大阪市　河井庸佑

ひと筋の川のこころも秋になる　大阪市　正本水客

おんなを終る日まで鏡と親しもう　和歌山市　西山幸

二次会は足が出そうなのが揃う　高槻市　辻白渓子

合鍵を持って余生を行ききする　米子市　田中亜弥

人間が好きで川柳やめられず　羽曳野市　田中隆二

春うらら仁王は力もてあまし　羽曳野市　佐野白水

ご迷惑でしょうが必死のバタフライ　米子市　川上より子

受かるまで夜食の碗が重かった　和歌山市　玉井豊太

負けてやる孫にほんとに負けている　熊本市　有働芳仙

煩悩すこし暮色の里において来る　大阪市　町田達子

命あるかぎり働く手を洗う　宝塚市　吉田笑女

風吹けば風に揺れてる母の影　桜井市　河合茂雄

老いたとて女は女紅をひく　箕面市　坪田紅葉

とび跳ねる手に大地の陽の匂い　出雲市　小白金房子

核のないワールド・オケの新世界　静岡市　渥美弧秀

天皇の笑顔が見たい皇居前　寝屋川市　稲葉冬葉

この年はひとの慶び喜ぼう　羽咋市　三宅ろ亭

終点が見えず呑気に生きている　米子市　菅井とも子

この夫に草書のかすれがちと欲しい　京都市　松川杜的

君が代に反対があり式次第　奈良市　宮口笛生

唐突に青いリンゴはかじられる　高石市　浅野房子

本流の音が小さく聞こえだす　鳥取市　広本文子

天ぷら油に生活の音を聞く　交野市　山本テルミ

下積の頃の写真は肩を組み　西条市　片上明水

未定ばかり続くと花がしぼみだす　尼崎市　春城年代

雁首を並べて読めぬ句碑に佇つ　尼崎市　春城武庫坊

けなしたらきっと私もけなされる　和歌山県　寺田裕美

夫婦してぽっくり寺でも参ろうか　岸和田市　島崎冨志子

ゆきづまり形身の帯をしめなおす　米子市　澤田千春

宇治十帖源氏のロマン踏みしめて　寝屋川市　近藤一途

他人から見ればなんでもない器用
母の日も老母は雑巾縫うている
今嘘を書けばきのうも嘘になる
隔世遺伝火のつきやすい血を貰う
福寿草去年の罪はとがめない
輪になれば楽しさ苦しさ数珠つなぎ
中腰で眉毛をちょっと足して出る
五十年生きた証の酒の味
春の雪娘の住む国に負けぬ程
初雪が舞うて絵になる御堂筋
美しく老いたし心温きまま
御仏にお供えしたい陽の光り
一番高い山が少年待っている
究極の願いはいとも安楽死
生きている倖せ春の髪を梳く
雲の果て明日を信じ渡り鳥
漬物の石重すぎた軽すぎた
顔洗う心を洗う朝の水
盲人の下着きちんと替えさされ

寝屋川市 **里 小路**
芦屋市 **上田 佳秋**
米子市 **八木 千代**
広島県 **藤解 静風**
奈良市 **天正 千梢**
西宮市 **瀬尾 六郎太**
寝屋川市 **平松 かすみ**
茨木市 **井上 森生**
茨木市 **堀 良江**
豊中市 **辻川 慶子**
藤井寺市 **吉岡 美房**
大阪市 **宮下 とし**
兵庫県 **遠山 可住**
倉吉市 **渡辺 独歩**
大阪市 **黒田 真砂**
河内長野市 **井上 喜酔**
米子市 **光井 玲子**
島根県 **堀江 芳子**
島根県 **堀江 正朗**

ふところ手竜馬を真似てみたけれど　高知県　赤川菊野

手のかかる妻のお蔭でまだ老いず　藤井寺市　笠原吸江

ひとりの人を愛しつづける薄化粧　和歌山市　福本英子

旅人の道しるべにと彼岸花　米子市　青戸田鶴

ひとつのことととことんやって路地住まい　和歌山市　桜井千秀

真ん中に姑が坐って恙なし　西宮市　奥田みつ子

広辞苑しらべた余裕黙ってる　西宮市　西口いわゑ

ほめられて八十路謡声艶と張り　西宮市　朝山千代子

船が出る気配に刀抱き寄せる　和歌山市　神平狂虎

四面楚歌いましばらくは立ち泳ぎ　富田林市　田形美緒

小走りの言い訳が来る花時計　東大阪市　崎山美子

哀しみは呪文のとけぬ氷中花　富田林市　片岡智恵子

僕に似て息子も嫁に押され気味　宇部市　平田実男

意気込んで山の向こうも見たくなる　米子市　寺沢みど里

土があるだから植えとく柿の苗　鳥取県　林露杖

絵のような島で男に職がない　今治市　月原宵明

負けるが勝ならばいつでも勝ばかり　八尾市　宮崎シマ子

再就職よほど家には居れない身　岡山県　荻野鮫虎狼

妻になれる小面だから焦らない　米子市　政岡日枝子

ほろ酔うてめし炊き女に過去がある　出雲市　吉岡きみえ
サイコロのどの目が出ても吉とする　宝塚市　丸山よし津
天地に今日生かされている祈り　岸和田市　清野こう
犬呼んだ妻へうたた寝返事する　枚方市　宮川珠笑
目の高さ変えると澄んだ空がある　富田林市　松本今日子
夢一つ一つ生き恥さらさんか　竹原市　山内静水
川柳に出逢って祖母は若がえり　大阪市　岡田ふみ
これからは新人類を先生に　富田林市　藤田泰子
万年青の実日中友好二千年　豊中市　田中正坊
僕の絵皿恋の色味もう出ない　寝屋川市　宮尾あいき
妻の留守例の手紙を探さねば　寝屋川市　江口度
台本がなくて気ままな暮し向き　七尾市　松高秀峰
木枯しに風の姿を見てしまう　大阪市　北勝美
気負いない暮し一日ずつを生き　平田市　久家代仕男
逃げ込める部屋が温いので困る　大阪市　神夏磯道子
遠会釈もみじ一枚舞い落ちる　西宮市　林はつ絵
ワイングラス深いいたでを負っている　寝屋川市　柴田英壬子
黄砂降る疲れ果てたる色で降る　島根県　小砂白汀
雲流る春の鼓を打ちながら　島根県　松本はるみ

親鸞の垢にもなれぬ日の怠惰
それぞれの悩み持ち寄りお茶を淹れ
男いきり春の女神へ手を伸ばし
大往生遂げて椿の土に落つ
石ひとつ立て風狂の門とする
繋がった沢庵今日も良しとする
枕辺の灯を妻が消す旅はよし
手を継ぎ幸人類漫歩する
丸い石苦労のあとなどのぞかせぬ
マンションの夫婦の里もビルの谷
足もとに春が来ている福寿草
巡る四季素直に妥協して生きる
それなりに愉しい男の市場篭
三日月と欠けた私の長話
どの花も母の好みに咲いている
自画像のバックは淡いむらさきに
受精卵です大学は受かります
頑固でも温もりがある父の肩
緩やかな流れの底にあった渦

島根県 石田清泉
島根県 藤原鈴江
島根県 北川民子
島根県 細木歳栄
鳥取県 新家完司
大阪市 鍛原千里
今治市 越智一水
倉敷市 本田恵二朗
大阪府 坂口公子
兵庫県 中田白李
和歌山市 三宅一郎
大阪市 江城修史
竹原市 森居菁居
米子市 茂理高代
岡山県 小林妻子
寝屋川市 岸野あやめ
大洲市 米澤暁明
岸和田市 芳地狸村
吹田市 藤村〆女

気分なお下段構えを崩さない　鳥取県　森山盛桜

鉄冷えにNTT株だけ熱気あり　大阪市　坂本仙吉郎

柏手を打てば社の静かなり　高知市　川竹松風

自販機がすねて人間うたがわれ　堺市　高橋千万子

大学は遊ぶところと見つけたり　藤井寺市　福元みのる

一頁先へ空論書いておく　岡山県　岩道博友

古ぼけていても時計の正直さ　箕面市　椎江清芳

四捨五入砂はこぼれてゆくばかり　尼崎市　奥山美智子

澄み切って嘘をまだ見ぬ朝の空　大阪市　渡部さと美

一枚を脱ぐためらいと憧れと　和歌山市　後藤正子

初対面たばこを吸うていいですか　高知県　曽我部裕

がむしゃらに泣けばすこうし気が晴れる　岸和田市　福浦勝晴

銀の鍵亡母の秘密の小抽斗　大阪市　大塚節子

悪人になれぬサクラの散るばかり　堺市　中川滋雀

自信喪失小さな風に迷わされ　鳥取市　小林由多香

平和平和あわれ男もメーキャップ　青森市　工藤甲吉

聞かいでもよいこと聞いて肚を立て　大阪市　西田柳宏子

母さんの歩いた道を嫌い抜く　高槻市　河瀬芳子

だまされる余裕を持った不仕合わせ　和泉市　岡井やすお

縁の下でそのまま生きる母の石　米子市　野坂なみ

もう初春ネ笑い袋を縫っておこ　鳥取県　川崎秋女

本当の平和を願う兵の墓　桜井市　岩本雀踊子

自画像の右のほくろが好きなので　京都府　田中笑風

母の忌や書斎を出ない父となる　和歌山市　堀端三男

女坂越えても花の出合い待つ　八尾市　宮西弥生

島国の悲願が実る瀬戸の橋　高知県　中内朱坊

旅立ちぬ父の背中を振り出しに　和歌山市　牛尾緑良

余生まだ真白い紙を持っている　有田市　松井かなめ

あの返事あれでよかった菊を活け　富田林市　新開千代女

猿と目が合うて会釈をしてしまう　竹原市　小島蘭幸

雛壇がお待ちしてます浩宮　河内長野市　植村喜代

故郷の土を愛する自家菜園　高知市　北川竹萌

荒れる海地蔵は静かに立っている　唐津市　桑原掬水

傘寿猶家族会議の司会する　唐津市　田口虹汀

水雷で泳いだ海で魚獲る　唐津市　山口高明

ポックリと死なれて困る貸金庫　唐津市　久保正敏

若人よペンの強さを信じよう　唐津市　仁部四郎

パン食が大和魂消してゆく　和歌山市　内芝登志代

頑迷でないが頑固で押し通す　和歌山市　野村太茂津

魚屋で鰈の動悸見ていたり　松原市　谷垣史好

七十七尚矍鑠として学徒なり（生涯大学文学科に在学）　姫路市　人見翠記

五分程時計進めているやる気　羽曳野市　榎本吐来

禅杖へ打たれ脊椎積み直す　唐津市　筒井朴竜

古傷に触れぬ友情温める　鳥取市　森田熊生

ぼんやりの視野にも慣れて花を買う　松原市　北野久子

子の背なを押して愚かになっている　大阪市　鈴木節子

昼の風呂老いという字をはね返す　大阪市　柳原静香

当分は愛があるから生きられる　大阪市　小出智子

双方の未練かくしていた和解　寝屋川市　北田綾子

世は常に浅き夢見しいろは坂　大阪市　藤田頂留子

トンネルの向うにおいて来た夕日　松原市　佐藤藤子

ひたむきに生きる明日へ予定表　岡山県　山本玉恵

自画像に勲八等もぶら下げる　大阪市　中西兼治郎

銭に背を向けてときどき振りかえり　八尾市　高杉鬼遊

今宵みる飛鳥美人のような月　和歌山市　福井桂香

甘い水信じる螢生きのびる　岡山市　北上柳五郎

肩の凝る日も後家は負けられぬ　大阪市　西森花村

やっとこさ産まれたらしい里帰り　大田市　藤田軒太楼
思い出を結びなおして女かな　和歌山市　松原寿子
よく喋る大工の釘を確かめる　松原市　玉置重人
空港ができる自然を一つ消し　岸和田市　高須賀金太
行列が嫌で金貨持ってない　大阪市　寺井東雲
陽が昇り素顔で動く裏の街　大阪市　松尾柳右子
道祖神にも明日があります夕焼ける　泉佐野市　阿萬萬的
考えて考えすぎて折れた葦　和歌山市　木本朱夏
影は誰が影きりきり舞をしてござる　鳥取県　中原諷人
病床へ顔顔顔の笑みが降る　鳥取県　中原みさ子
あの日あの時偲ぶ平和の鐘が鳴る　鳥取県　中原汲香
ふと触れた女に棘がありました　羽曳野市　塩満敏
その中身わかれば笑っただけ残る　大阪市　神谷凡九郎
笑うのも泣くのもひとり夜が更ける　岸和田市　古野ひで
一匹が花屋をみつけおしえない　出雲市　小玉満江
福寿草よ八十歳になりました　岡山県　土居耕花
新春の水の流れは母想い　富田林市　板尾岳人
母の背を見れば安らぐものがある　岡山県　矢内寿恵子
また植木もろて大事にして枯らし　尼崎市　黒川紫香

—同人吟—

秀句鑑賞

—前月号から—

高杉鬼遊

若いといって欲しくて齢を言うらしい　西出楓楽

ここまで裏を読まれてしまうと動きがとれなくなる。そこを衝くのが川柳家の皮肉である。衝かれた人が感じとれたら和やかな雰囲気になれるのだが、往々ボタンの掛け違いになって残念だ。

盲人にそっと触れてく冬の蠅　堀江正朗

寂しい句であるが、作者と蠅のふれあいに人間同士にないやさしさが通う。ここまでゆけば凡俗の手のとどかない信仰の領域である。

米一合を量り違える筈がない　西山幸

ひとり暮しの寂寥を、このように詠まれると、闇の深淵に逆吊りされたように肌に粟立つ恐怖を覚える。いま流行のホラー映画にない、誰もがこころの奥に抱く畏怖だろう。

スリルとは妻から離れることを言う　渡辺独歩

川柳における外来語はあまり好きではないが、この句の微妙な感情の表現には「スリル」に替わることばが見当らない、適語だ。

心入れ変えてそれからどっと老け　高橋千万子

句集「絵皿」の著者。商家を背負って生きてきた骨太い句風は、何の衒いもなく一本芯が通っている。この作者にして老けるどころか、いよいよ若返る気力十分である。

東京の人よどこから湧いてくる　野田素身郎

湧いてきた自分を忘れたように、とぼけられると、都市の猥雑さも楽しく見えてくる。ガリバーの見た首都「東京」か。

生命まで担保に入れた願い事　小野克枝

神仏との取引にいのちをかける時がある。それほど、この願いごとは掛替えのない大事であった。今夏、母堂を亡くされた作者だけに切実な思いを感じる。

定年やコトンと蝶番がはずれ　谷垣史好

ユーモア句が少なくなったと言われるが、それは一般論であって〝川柳塔〟においてそんなことはない。老いと病いと死に準ずる宿命に定年を数える現在である。笑いの本質は悲しさである。この句がそれを証明している。

百円ライター男の明日が落ちている　大原葉香

使いすて時代とか消費経済とか、物の価値観を変える贅沢な世になった。その最も身近な物に百円ライターがある。それほど男が堕落したとは思わないが、辞令一枚で家族と離される企業戦士に、昔の一銭五厘を連想する。ブラックユーモアの怖い一句である。

だらしない親に代ってどついたる　新家完司

何の技巧も使わずに思いのほどを吐いて、笑いを誘われるのは、この作者の徳だと思う。下五の〝どついたる〟は、関西ことばだとばかり思っていたが「全国方言辞典」によれば関西は勿論のこと、鳥取を初め、岡山、香川、徳島、愛媛、各県の一部でも使うらしい。

みの虫よお前は専守防衛か
特攻の真似は古いぞ火取り虫　土居耕花

武装した栗身内から虫がつき　園山多賀子

防衛費一%枠の歯止めを破られて早や一年近くなる。権力を批判して獄死した反戦川柳人・鶴淋ほど過激でないが、国家を憂える不安な真情を読みとることができる。

軍歌しか知らぬが右翼ではないぞ　吉岡美房

沖縄で日の丸の引きおろし事件があって間もないが、第二次世界大戦の後遺症をこの句に見ることができる。終りに老いの句二句。

美しき老いなどはなし診察券　天正千梢

美しく老いたいなどと無理を言う　中川幸一

黒川紫香選

陶枕夢見の悪い日が続く
金環蝕の日から彼女が出来ました
失職の男写楽の貌をもつ
路郎忌を忘れ水府の忌を忘れ
安眠をくれるイミテーションである

倉敷市　田中好啓

やるしかない靴は明日へ向き直り
さわやかな愛ペン先をこぼれ落ち
ユーモアを添えて空気を軽くする
畳ヶ浦の青さへ思慕を増してゆく
先生と対話をしよう句のなかで

浜田市　中尾まゆみ

伏せ字ひとつ想いは同じ賀状くる
ひとつ齢取るお餅を焼いている私
廃止線庇っているよう枯尾花
パチンコ屋で捨て猫の瞳に見つめられ
福耳が今日の運勢聞きもらす

佐賀県　寺中三枝子

あみだくじ先輩雨の中走る
次の鞭のころ合いを知る怠惰
金だけでないと信じていた油断
砂時計そっと買い足す砂すこし
日がな一日ポックリ寺の自由席

富山市　舟渡杏花

ご無沙汰の便りに百合の香を入れる
夢を売るバクを一匹飼っている
お喋りの天狗の鼻は白かった
高きところを友と眺めて生きてゆく
案の定柳の下にいたどじょう

鳥取県　小谷美千

気まずさを飛ばしてくれたシャボン玉
軽い靴浮いた噂も秋のせい
シクラメン挑戦状と受けとめる
錦鯉華麗な旅のグラビアに
夕映に刻々変る五色沼

高槻市　笠嶋恵美子

舞台裏で鬼が眠っている平和
足し算へいくつも指を用意する
欲捨てた心に四季の星が降る
父と子の間を埋めるキャッチボール
季節感なくした野菜の失語症

熊本市　永田俊子

秋風が吹いて計算ばかりする
いい旅の終りに覗く丸い月
生きざまを伝えて母が他界する
勘定は頼むと肩を叩かれる
大和路の柿が夕日に映えている

尼崎市　児玉歌子

新車だから靴を脱いで乗れと子が
内緒ごと持ってすこうしはずんでる
句読点打ちに好きな娘と食事
電算器の頭脳が祖父の気にいらず
いいづらい事は私にまかす夫

熊本県　大川幸子

龍の子に天まで昇る夢があり
その辺に軽い財布はほっとかれ
夕焼よノルマがたんと残ってる
爪染めし日の追憶よほうせん花
鍵穴に相手の目玉見たショック

熊本市　宇野昭代

薬屋が元気な話して行った

鳥取県　土橋はるお

街路樹の下でハーモニカを吹く
だんまり屋が笑い地蔵を彫っている
暗がりでおんな心を塗りかえる
伝言板のいつもの場所がわからない

京都市　木村たけし

なじめない森に毒矢を刺しておく
出張のおごり一人の酒を酌ぐ
自画像を描いた見舞のハガキくる
結論の出ない煙草の火を借りる
思い出が坂で止まっている夫婦

名古屋市　藤井高子

ワハハワハハと笑顔のエコー聞く賀状
父さん蛙は立派なことを言いすぎる
知恵の輪をゆっくりと解く椅子さがす
六十の童女をあやす初かがみ
オルゴールで踊ってるのはお人好し

滋賀県　久保和友

私の8ミリ映画に戦後は消えている
離婚届一枚のせた島の舟
青いブレザーで月の砂漠を歩き出す
月の出の決闘松虫くつわ虫
この街のうどん屋で川柳の話する

今治市　野村京子

遅れ毛が渚を甘い風にする
オンザロック氷の角がとけた愛
トランプの恋占いに凝るおんな

そして秋果たし状書く恋ひとつ
イヤリング男の嘘を聞きあきる　河内長野市　大西文次

酔うてても他人の靴が解る足
じゃんけんに力が入る石と石
Uターンしても明治は遠過ぎる
口下手が黙っておいて行く土産
食事費の中に入れとく猫の餌　長岡京市　木本如洲

花活ける姉を残してゆく孤独
母からの手紙切手にある温み
もめごとに関係のない斬られ役
候補者の写真嘘つく顔でなし
満点は目玉焼きだけ娘の料理　八尾市　高杉千歩

初硯まだ生きる気の墨占い
親も子もいい齢になり水いらず
点滴をうけてる方が太い腕
羅漢さんの欠けたお鼻を描きあぐね
川のない橋の歴史を書き遺す　吹田市　井上照子

出席の返事に迷う衣装箱
あれた手にたっぷり温い湯をかける
職退いてサンデーばかり花づくり
絵はがきに早く帰ると旅便り
らく焼の皿に記念の渡月橋　京都市　松川芳子

ストレスを水割りにして飲んでます
手の内は読まれています花時計
一枚のハガキ絆にして孤独
噂には弱い女の浮き沈み
申し訳なくも妻だけ旅の宿　広島市　流奈美子

聞き上手へあんな事までつい喋り
ワープロにペン字がそえてある安堵
迷うこと知らぬ男の高いびき
ポイントの言葉ジョークに混ぜておく
父の振るタクトで和むハーモニー　岐阜市　渡辺杏村

日本髪にふとほれなおす三ヵ日
女性上位今日は飲みます十五日
今年こそは嫁にゆきたい初詣
賀状来る一枚毎に柳友の顔
新世帯コタツの上で屠蘇の味　久留米市　鶴久百万両

妻だけは素直になろうかと思う
鎧脱ぐと男に勲章などいらぬ
内濠を埋めあの人に逢いにゆく
ドンキホーテをいつも演じる俺でなし
最後の晩餐かもサヨナラがまだ言えぬ　守口市　森川まさお

藁塚の傍に女体の案山子立つ

ケーブルの下まで聞こえる威し銃
種袋カタカナでメモ書き添える
商談に雑炊の口拭いて行く
小抽斗に千円札が畳まれて

大阪市　上田柳影

軽く見た夫に頼る十二月
プロセスの中にひそんでいた別れ
自己嫌悪ごしごし洗う昼の風呂

秋の神戸異人館を訪ねて

望郷の海が呼んでる異人館

羽曳野市　吉川寿美

文殻を重ねて逢えない人を恋う
祈りつかれ鶴折り馴れて冬の章
赤い実が羞じらう雪のななかまど
行く末を案じて葦が佇ちつくす

寝屋川市　太田藍子

顔ぶれが揃ってやっと本調子
苦労したのかいい顔してる人がいる
行列の中程に居る安堵感
忙しく書いた年賀も着けば春

静岡県　薗田獏沓

手を貸した車椅子からありがとう
満ち足りて柿は木のまま赤くなる
棟上げの餅を撒いてる秋日和
鳶の輪にすっぽり入る町に住む

高槻市　津田スミ子

健康になって堤防歩いてる
遊びには行けぬが来いという知らせ
名簿から一人消えてる年賀状
郵便受けをみがいて友の便り待つ

唐津市　相葉あき

妥協など自叙伝にない独裁者
斜視になり妥協の道を踏みはずし
地球儀がクルクル廻る兜町
小さくとも無事に門松立てて春

和歌山市　丸岩晏

寝化粧をして老妻も女です
そつのない女将にのってもう一献
見習工すねる釘だけ持っており
番犬に吠えられた手のラブレター

滋賀県　安田志津

菊を賞で人出に酔うて野立席
よりそうた落葉を風がかきまわし
夜おそい娘を待つ編目揃わない
鍵付きの日記を買うてから悔いる

和歌山市　田中みね

不倫から目覚めて白き割烹着
灰皿に和解の兆し見え始め
受け皿を信じて渡る夫婦舟
里帰り積もる話に夜が白む

出雲市　金村青湖

国策にそうて先祖の田を休め

ライバルが姉とはいじらしい闘志
ロボットという後輩に追い出され
耳鳴りの底に軍歌がまだ消えず
米子市　足立由美子

疑いがないから小犬じゃれまくる
それからの事が日記に書いてない
不器用な血筋娘が継いでいる
価値観を変えて外出好きになり
東予市　小山悠泉

真実は神だけが知るミステリー
やんわりと皮肉も交じる京訛り
真相を話せば肩が軽くなり
米喰えと農協さんの米祭
鳥取県　黒田くに子

愛枯れて汚れたシャツが置いてある
止まり木の熱燗春へ向けている
一病のリズム狂わす秋の冷え
夜の蜘蛛お前もわたしも落ちこぼれ
大阪市　亀井円女

僕も私も一足お先に逝く話
自画像は下駄をはかして若い目に
秋風が古都の歴史を語りかけ
私の地図にやっと子達の城が載る
西宮市　松本一郎

ブランコに揺れて終った恋のこと
空白の箇所が随所にある日記
質草の悲しい過去をもつ指輪
駅弁が食べたくなって旅に出る
尼崎市　山田保蔵

敬老日今日は子守りを休みます
広告をやめて原価を下げなはれ
雑巾のように働き黒字国
忘れたい橋で別れたあの夜を
尼崎市　森安夢之助

待つだけでタバコ十本吸いました
妻の留守メザシ三匹夜の膳
サロンパスの匂がします集いの輪
笑い顔見ると力が抜けて来る
尼崎市　鈴木良征

よその子を叱ると鬼がとんでくる
賭けごとの好きな男でホラ吹きで
米食うてうんと長生きしてみせる
テトラポットの浜から消えた海の唄
竹原市　石原淑子

懸命に歩いて迂回ばかりして
ふりきって独楽はひとりで廻り出し
美しく老いたい今朝も梅干茶
倖せを赤い鳥居の前で撮る
米子市　新正子

ほどほどの善人で見る月の暈
安全なスリルだったら許可をする
ボクンチはどこと地球儀廻し出す

四股踏めば少し地球が割れた音
兵庫県　森脇和子

還暦のまんまの遺影へ孫のこと
のらくろの話が好きな少年の瞳
ご無沙汰の封書ピンクの花模様
年金が少うし上って花を買う
熊本市　黒田緑

究極の一歩手前で身を躱し
オリジナル好みで道の端を行く
ずっこけた後は笑って事がすみ
簡単に「あと四五年」とこわいこと
熊本市　北川一進

目鼻だち良いのが売れるコケシ展
心配が会社まで来る電話口
残らないように幹事の持つ予算
お茶でもと軽くさそったのが御縁
寝屋川市　井上すみれ

料理番組終って今日も目刺し焼く
ペンフレンド一度会いたし会いたくも無し
梅干しの一つしみじみ母思う
決断の前に妻あり子供あり
佐賀県　山口松枝

好き嫌い豊かな国に住む子供
おもわせぶりして美人でもないくせに
ブローチをつけておしゃまな女の子
ペアで着るセーター愛をこめて編む
熊本県　岩切康子

好きな歌一家で歌った古い家
負け犬の耳も尻尾も低く来る
案ずればハガキが届く友の幸
省略の多い夫婦で相通じ
熊本県　高野宵草

紅葉狩り峡谷に尖った風が吹き
手伝えば妻の手はずむ流し台
ハイウエイ出てついスピード違反する
喧嘩した隣の木犀匂うて来
鳥取県　乾隆風

だしじゃこの骨は太郎に食べさせる
三つ子の頃から落書きをして育ち
ほどほどに積むと荷物が軽すぎる
無器用な男が銭を積んでいる
寝屋川市　宮崎菜月

フォックストロット別れの時も忍び足
通信簿のことは忘れてクリスマス
同僚の嘘に惚れてる年の暮
逆光線私の正体見えてます
鳥取県　太田幸枝

縺れほどいてそれから絆つよくなる
巣立つ子へそれから女ひとりぽっち
五ツ児を産んで女に意地が出来
馬の尻尾に骨があるとは驚いた
八尾市　鷲見章

コンクールお化けかぼちゃは村興し
子供部屋裸婦はピカソのカレンダー
寝たきりに喜寿の祝いのお赤飯
繁華街抜けてサンマの焼ける路地

守口市　結城君子

サークルの顔に共通点がある
旅みやげためらいながらお六櫛
追跡の刑事斜めにいる気配
ぬれ衣を黙って受けている時計

吹田市　栗谷春子

返事来ず日毎反省強いられる
台風に向い負け犬吠えつづけ
小春日に毛虫にょこにょこ渡る道
何があったか母の無口に合わす子等

大阪市　山田妙子

年賀状買うと周囲(まわり)が廻り出す
裕福になって病人あふれ出す
父さんに追いついたのは血圧だけ
かけっこに勝っても負けても同じ賞

貝塚市　池田寿美子

カレンダーに十年先の虹を見る
野仏も初春には春の顔になる
良い方に解釈をしてよく眠り

唐招提寺にて

いつ来ても天平の甍飽かず見る

尼崎市　尾宮弘治

菊活けて見ても見合いの返事まだ
法被着た儘で祭を酔いつぶれ
電柱に矢印ホッとする喪服
公園で一息嘘を考える

大阪市　今西静子

レパートリーテレビ料理がひとつ増え
にぎり飯不揃いでよし母の味
家政婦の休日自分のもの洗う
縫針が怠惰をせめる冬仕度

米子市　門脇晶子

白状をさせてから咲く曼珠沙華
釘一本うってとめたい風の穴
コーヒーの甘さにあいた更年期
少女期に一つ忘れた種がある

倉敷市　田辺炎六

来年の夢を小脇に抱いて病む
値切られた老後の夢をまた値引く
乾盃の音頭がとれる貌になり
秋の実がもの言いたげな彩をつけ

西宮市　秋元てる

歯がゆさよ夫婦揃ってお人好し
夫婦だと言わでもがなのことを言い
見覚えの端切れで母の数珠袋
木の風呂が白く乾いて気が和み

尼崎市　的場十四郎

公園の子供はすぐに輪をつくる

送り出しホッと一息お茶の味
見送りのあとは空しい風になる
フイルムに紅葉を満たし旅終える
高槻市　芦田静江

食欲のゆたかに痩せた歯の治療
ひいらぎの序列色づき兵舎あと
晋平と雨情の出逢い唄はずむ
時あげるチャボに静かな昼下り
尼崎市　佐藤美代子

菊一輪ほのかに香る仏の日
リハビリと思えば楽な拭掃除
十二歳の少年天井知らずに伸び
同病と知ってから垣根がとれた
広島県　森川抜智

責任はもつと無責任なことを言い
コスモスが満員電車のように揺れ
豪邸を建てて悪事が露見され
豊中市　玉井房子

風呂の湯は溢れ読書の秋になる
誘惑をそそのかすのは隙間風
鮨提げて今夜は泊ってゆく息子
八尾市　椎尾公子

城跡に燃えるものあり山紅葉
これからも妥協せぬ手は残しおく
帯上げの色に合う帯あててみる
岡山県　千原理恵

欲張った分だけ掌から転げ落ち
熟女等の話すジョークが恥ずかしい
上品に見せて居るのは隠れ蓑
尼崎市　新井泰子

誤診したことを忘れられない聴診器
踏みつけた人もあろうにあの笑顔
医者行きを止めてレコード買うてみる
尼崎市　木下義嗣

肩書きがつくと毎晩おそくなる
広告を貼るなと電柱怒ってる
老人に用ないビラを戎橋
尼崎市　吉永伊三郎

病院の都合で盥回しされ
そこそこの点で卒業した母校
午前様声を殺して呼んでいる
旭川市　朝倉大柏

口下手だから菓子ばかり食っている
鍵いくつ持てば気のすむ風の中
他人の罪書く鉛筆をとがらせる
静岡市　沢田きん

葉鶏頭恋をささやく赤トンボ
針の穴くぐった糸もほっとする
ここだけの話を風が吹き散らし
鳥取県　田村きみ子

クラス会少女になって師に甘え
春ですねファッションだけは足早に

冬の風わたしの足が痛みだす　大阪市　川原章久

グルメとはむごい話の活造り
おらが街だんじり太鼓がロスへ行く
大津絵の鬼笑うてる顔に見え　大阪市　上嶋ふさ子

願い事多く神様迷うてはる
共白髪炎えた昔の万華鏡
お料理に紅葉一葉も彩にそえ　静岡市　杉山やす

決意してお金を借りに来たと言う
晩秋のコスモス風にすねている
秋夜長川柳塔を読みあげる　高松市　竹川折荷

駈け登るまでが猫の正念場
台風に隣も何かごとつかせ
コスモスが揺れて親子の遍路笠　十和田市　阿部進

親に似て息子も嫁に敷かれてる
ネクタイをもろうて似合う服がない
義理がたいとこが取り得の戦前派　岡山県　福原悦子

メモ日記三行で足る農繁期
間引菜を洗う指まで秋深む
いち早く新米送る里の秋　出雲市　金森知恵子

爽やかにかく汗霧が晴れてくる
風は秋うまい珈琲欲しくなる
文化都市下水工事の真最中　和歌山市　田中輝子

面影を抱いて淋しい菊日和
どこもかしこも菊で埋めたい亡母の忌よ
掌の温み今更想う冬に入る　堺市　山本半銭

グループで雀は犬の餌を狙う
キッチンの窓は大きく外へ向け
童謡の同じところでけつまずく　米子市　小村てい子

広島の鳩に日の丸憶えさす
封書からほのかな灯り母の文字
亡妹のかげがよぎって暦繰る　京都市　森川春子

針箱の底のへそくり思い出し
山菜の楽しみがある山の寮
声かけて行けば野仏笑いかけ　静岡市　安本孝平

帰らねば義理のたたない橋渡る
深呼吸して決断の矢をはなつ
追憶の酒に灯がつく夫婦箸　新発田市　上鈴木春枝

パン焼き器朝餉のメニュー変えさせる
満ち足りて美容院出る自動ドア

指定席決めていつもの喫茶店　富田林市　大澤三四子

双児でも同時入社とは限らない
水澄んで思案している葉が一枚
空席へ同時に座る中年さん　和歌山市　森茜

いい話へ公衆電話小銭切れ
弱い者いじめをしてる二枚舌
ひとり来て月追っていく萩の道　大阪市　島路太郎

病室の外はもう冬秋がゆく
老夫婦二人ぐらしに鮭茶漬
枯葉散る街へ女の急ぎ足　伊丹市　小熊江美

発車ベル鳴って再会誓い合う
真ん中に席が空いてて座れない
百畳に百のお膳の旅の宿　佐賀市　古川一徳

高齢化心の化粧忘れまい
淋しさのあまりに開く玉手箱
灰皿をかえてはなしが改まる　静岡市　柳沢たま

歯車が合う幸せの共白髪
漢方薬値段ほどには効いてこず
乾杯が程よく利いた桜色　熊本市　鶴田謹爾

サイクリング八十路の余生をゆっくりと
実る秋休耕田も目立つ秋
洗顔も風呂もトイレもいやな冬　藤井寺市　高田美代子

つけられているなと思う曲り角
気いつけておくれピンクのヘルメット
言い訳は決してしない高い鼻　鳥取県　津村八重子

一人しか要らぬ伴侶が見つからぬ
ゲートボール一つの球にもめている
たこ焼もさげて年始の客になる　大阪市　桝本蕗児

イヤリングはずしてからの下り坂
母と娘が寄れば本当によくしゃべる
悪役がいるから絵になる時代劇　鳥取県　西川和子

ちぐはぐな足跡も有り夫婦坂
寄添った影が突然伸び出した
野良猫が可愛い子猫生みました　静岡市　中川みつ

金と暇出来りゃ頭がボケてくる
サングラスお取りなさいよ秋の空
父の髪うすくなったとズバリ言う　佐賀市　江口万亀子

熱いお茶手渡す妻のいて安堵
病む母へ足音させぬ嫁でよい

ホームバーあなた好みの花も活け　唐津市　菊地香代子

音立ててコーヒーを飲む負けている
突然に流れを変える女川
花嫁人形いつか男に攫われる　青森県　福士トキ

生きている証しか爪がやたら伸び
りんご頬かむり津軽の秋たける
若さっていいなア女高生の列　青森県　波ただお

柿の木の残った一つの実が赤い
風のない日本海は大鏡
竜の目は何時でも天を向いている　摂津市　望月かずこ

鳥だって喜ぶ心有る世話に
真夜中の電話ボックス淋し気に
来る年をよくぞお越しと思いたい　岡山市　中嶋千恵子

こだわっているのは私の影法師
暴力の怖さ私は失語症
禁酒した夫に何やら手を合せ　唐津市　野田旭恒

可哀想などと言いつつ生き造り
赤とんぼ帽子で聞いてる立ち話
過疎に咲く柿でジュータン敷いたよう　青森県　永沢招人

子の渡る橋に小さな虹を賭け
歩道橋老いの足腰試される
抱くこともなくなり孫の足の音　大和高田市　寺脇三倉

サンプルにたしか二匹の海老がいた
仲人が手持ちの縁を売り急ぐ
墨壺の糸は妥協を許さない　徳島県　宮武まつ女

自画像へ悔いない筆が見当らぬ
横にいるただそれだけの有難さ
かあさんの鞭がずしんときた温み　京都市　小林英子

賞め言葉女は少し毒も入れ
月光の冴えて街の灯眠くなり
他愛ない事に老いらく弾んでる　鳥取県　山之内洋

鼻ヒゲも授賞をすればよく似合う
美術館みんなしばらく別な顔
特選の裸婦の前だけ動かない　鳥取県　鈴木ふみ子

八歳の孫に負けてるカナ文字よ
踏み迷い母の器に受けられる
南国のいずこか亡父は骨もない　鳥取県　山根八重

口下手な父には損がつきまとう
本音とは別な言葉で清書する

先輩を追い抜く腕は無口なり　岸和田市　三輪通彦

栄転と左遷で違う職場の眼
秋風に財布の中を覗かれる
帯に短かく襷に長い子の縁談　鳥取県　西浦小鹿

風船についた伝言コンニチワ
財布から春のかおりがこぼれ出す
冷酒の数だけ涙涸れてくる　尼崎市　中澤向西

和尚さん落葉拾いも忙しい
歳聞くと指をかぞえる三歳児
写真より素顔がよいとお世辞言う　尼崎市　明壁敏之

三四郎転ぶ事から先ずおぼえ
無駄遣いするほど小遣いくれもせず
危ないが渡って見たい橋もある　大阪市　吐田純子

神さまにすがる命の百度石
木枯しが吹いて落葉のひとりごと
ダンジリの汗が男の顔にする　米子市　服部朗子

簡単にドラマ咲かせる電話だよ
一人芝居人の噂におどらされ
お早ようと美しく言う少女の目　和歌山市　山口三千子

予想せぬ数字に眼鏡かけなおす
駅前通り昼間と夜の違う貌
風にのる時期見て凧の糸を切る　出雲市　久谷まこと

木枯らしも袋小路に道迷う
着ぶくれて手の長さだけ用を足し
隙間風もう動じない老夫婦　岡山県　富坂志重

野仏に淋しい老母の願い事
あちら向く涙の顔をとがめられ
庭の石一つ動かし秋を待つ　和歌山県　森三枝子

良い話もって来そうな秋日和
旅立ちの明日へうれしい茜雲
空っぽの頭で老いの意地通す　兵庫県　円増貞子

高々と取る人もなく柿の熟れ
最高の月見吾が娘と露天風呂
たっぷりの皮肉すんなり受けて無事　豊中市　小材一夫

種のない柿をやっぱり淋しがり
勝敗はともあれ空は夕焼ける
雑踏の川に流れるのは易し　藤井寺市　楠昭子

向き合って無口がつづく寒い家
すき透る刺身のせれば絵皿冬

大きな声うらもおもてもない夫　今治市　渡邊伊津志

愚痴を吐く男に返事くれぬ海
あの人に出会った日から海が凪ぐ
さりげない化粧しているから冴える　和歌山県　山田久子

感動が伝わる扉叩いた日
札束が動いて結着つく話
じゃがいもが美味く煮えたと呼びにくる　流山市　神田治

午後三時専業主婦のひとりごと
飲み食いも女が払う夢が覚め
そのうちに青チョウチンになる酒税　米子市　金山夕子

徳のある人の背中が道しるべ
距離おいて身内の糸を握っている
カラスでもジョークの一つ持っている　岡山県　牧野秀香

曽孫の運動会に老い忘れ
鉢植えの紅葉も秋の美を飾り
煙る雨山の模様を変えてゆく　奈良市　米田恭昌

秋風にゆらぐ下着もペアルック
一言が過ぎて満座の狙い打ち
定退の背にズッシリ家族の目　岡山県　土居ひでの

空想をどこまで飛ばすシャボン玉
ほとぼりを醒ます器を洗うてる
夢一杯ためて娘のコンタクト　静岡市　西村千代

口答え許しませんときつい顔
カタカナ語入歯が外れそうになる
目覚しが鳴ると日課が始動する　新潟県　高野不二

上司でも黒を持たせる昼休み
上京し歩きつかれて帰って来
日記帳迄まんが文字書いてある　倉吉市　田中八太朗

一気飲み囃子に乗った拷問よ
ワンマンが非力を知った哀れさよ
裏腹に小さい方を先に取り　藤井寺市　菊地繁男

正確に一番列車橋渡る
じゃれる猫俺しか友が無いのだろう
急かされてシャツの端を見せたまま　泉南市　坂根流水

から風の刈田に葱の苗そよぐ
点々の玉葱小屋も風物詩
オフの秋話題はやはり江川卓　呉市　岡田寿美礼

自己流に白菊活けて秋日和
おいでおいで応援太鼓呼んでいる

お嫁に行くほほに紅さす孫いとし　島根県　今川　三津江

お祭りの匂い野良猫知ってくる
文化祭秋の名残りの花競う
たき火からいもの匂いのするも秋　唐津市　原野　常善

肥満児の親が気をもむ体育祭
結着がついて渋々手を握り
七輪で焼いて欲しいと魚言い　弘前市　小寺　ギホウ

酒煙草売っていない病院へ行く
旅先のバッグの隅にお守りが見え
本棚に並べるほどの価値はない　愛媛県　八塚　三五島

カメララジカセ保険満期になりました
タレントをネタに週刊誌の生きる
好きなもの食べよと医者の無表情　岡山県　池田　半仙

三十年前の手帳は夢もあり
階段に手すりの欲しいのも歳か
一言が又感情を軋ませる　静岡市　大石　たき

時により耳の遠いのも好都合
曽孫去り淋しく残る紙おむつ　岡山県　松本　元江

新しい夢をつぎ足す祝膳

欲張って生きる覚悟の荷を背負う　八尾市　向井　しづ子

切れ味の悪いはさみにある仕事
うどんすき二千五百円とは高いこと　奈良県　田中　紀美代

かがやいた女の一日短かすぎ
アメリカンばかり飲んでるお付き合い　島根県　小田川　智重子

寝坊して隣のリズム聞いている
コマーシャルのボリューム絞る時動く　静岡市　諏訪　志げ

もうすぐに師走の風が吹いて来る
まっすぐに歩いて行けばつきあたり　奈良市　西川　寿人

クシャミまで吉兆にして嬉しい日
阿蘇山の流れる霧に想う女　岡山県　伏見　すみれ

相合傘とっくに雨は止んでます
母サンの時計は五分進ませる　岡山県　平田　たけよ

どん底の暮しに負けぬ束髪
向い風に耐えぬき過疎に農守る　倉吉市　田中　八太朗

四捨五入五ではあるけど満足し
句が出来ていま消した灯をまた点ける　静岡市　片平　静代

口喧嘩出来る幸せ老い元気　静岡市　久保きぬ
朝市に素朴を売って過疎の味

大の字になって吐き出す大あくび　大洲市　西山えつ美
花好きな鋏やたらと切りたがり

仮装行列みられたくない人に逢う　呉市　蔵重成人
肥ってる方が美声かオペラ歌手

会話から今日の寒さをかみしめる　枚方市　中山おさむ
少年の脱皮に父の影を踏む

自転車で気さくな顔を見せに来る　鳥取市　山田草人
暗証番号老妻に内緒の使い道

じんわりとご利益がきく百度石　静岡市　浅子まつゑ
居直ってみても吊り橋揺りやまず

塾へ行く親の願いは春にかけ　島根県　菅田かつ子
歌は下手手拍子うまく叩きます

病院のベッドはおならを待ちわびる　山口県　高崎雀声
落穂ひろう老母を絵にして日が沈む

書店にて題名のみを読んで出る　岡山県　後安江山
発車ベルもう一言を窓になげ

夕焼が夫婦の影をロマンにし　米子市　大田みさと
自信あり私平気で謝まれる

陽だまりで柿の皮剥く老いふたり　高石市　宮田純一
咲いてから花のいのちを数えよう

奥飛騨路美少女といる露天風呂　佐賀県　石田源吉
寿の一字だけ書いて出す賀状

党首会談見せる握手を写させる　唐津市　福島紀一
居ないよりましな夫と口が過ぎ

老人天国秋風そぞろ吹きにけり　島根県　加本義良
豊作を取り繕えずいる農政

今日という歴史の流れページ繰る　羽曳野市　麻野幽玄
目が覚めて見れば妻の声だった

山の幸送れば海の幸届く　岡山県　後安ふさえ
母さんがマイクを持った酔うてはる

今年から夫婦揃って敬老会　富田林市　加藤ミツエ
大安日結婚式も三時間

世話好きでどこでも顔出す我が女房

イヤリング似合わないのにぶらさげて　静岡市　三浦つね

知識欲まだ少しある七十七
豊作の稲田跨がる虹の橋　愛媛県　石手武

ちょぼちょぼの暮しで仲の良い隣
ひげ剃りをしながらニュース拾い読む　竹原市　古田比呂子

つまずいた小石が何か訴える
子を叱る私を夫叱るなり　大阪市　稲本凡子

中流の気持でゴルフの素振りする
親の見栄塾と家庭教師と続く日々　豊中市　三宅つえ子

赤を着てどこへ行くのか車椅子
無念さは赤い実をつけ枯れている　島根県　岩田三和

けったいなお方と旅に来ています
父の汗ようやくわかる変声期　大阪市　堀口欣一

毎朝のよきお通じのありがたさ
今もなお姫路の燐寸愛すなり　青森市　三木野玄哉

失業の手当吸いとるパチンコ屋
飼い主によく似て吠える犬二匹　静岡市　滝花喜平

雑談の中から拾う知恵袋
ありがとうその一言に泣かされる　京都市　山脇正之

結婚をしてから甘える癖がつき
死にたいと言いつつ注射堪えている　久留米市　中垣米之

民主主義の隅で庶民は生きている
好伴侶静かに秋の針仕事　唐津市　浜本治幸

待人は来たらず一日無駄になる
数珠繰れば自ずと読経高くなる　鳥取県　乾喜与志

味噌汁が好きで朝飯よく食べる
文化祭だから私も文化人　静岡市　丹羽定次

好きなほど悪口言える仲の良さ
肩書も決意新たにやる気出し　田辺市　染道佳明

スーパーで才女がお総菜を買う
冷凍魚顔のないまま解けてくる　鳥取市　武田帆雀

現役の頃のスマイルとは違う
初孫を抱き上げ許す意志表示　黒石市　相馬英三

無い袖を振って親父の墓参り
喫煙を止めぬ男の心意気

寒風にめげず子供の元気な声　和歌山県　田中隆積

暖冬を願う一日(ひとひ)が過ぎていく　唐津市　入江喜久夫

駒下駄が似合う素足の白い女

芒野の月も今宵は暈の中　川西市　田中喜俊

絵画展上野の森によく似合い

都心でもこんな静かな下宿あり　吹田市　西岡豊

飲みに行く口実妻に覗かれる

肩書きで重みができた子の名刺　鳥取県　木下芙葉

大舟に乗った気で嫁き的はずれ

伝言板逢えぬむなしさ消して去り　橿原市　西本保夫

背信の眼が血走って来た不安

シナリオの様に怒りの手紙書く　大阪市　冨岡温子

鼾ない静かな夜で眠れない

酔ったふりして決着を回避する　岡山県　杉本伊久栄

結婚記念日一日過ぎておもい出し

人生欄我が身の上と引き合せ　鳥取県　久野野草

子に問うて夫と手を取り土守る

性急の夫の歩幅が乱れがち　島根県　児玉幸子

残月の影におびえて朝の道

流れ来る小川もみじが乗ってくる（帝釈峡にて）　出雲市　高橋きよし

敬老会増えて座席が縮められ

井戸端が無くてニュース聞かれない　広島県　藤解静風

弁解をする程遠くなる誤解

逃げ道を絶たれてからの闘う眼　八戸市　島田昭治

銭湯で冗談ばかりの人が死に

初孫の寝息大物らしく聞こえ　枚方市　二宮由紀子

退屈が招いた妻の二段腹

イタズラを叱り寝顔に詫びている　東大阪市　大平太一郎

動じない父動かせた嵐の夜

立ち読みで知った運勢喜寿の暮　泉佐野市　真崎浪速子

転がした土地を横目に笑う奴

口笛が若さに融ける登山帽　熊本県　立道善太郎

出来ぬこと子に託したいことばかり

乗鞍岳初雪の日は日本晴れ　島根県　松本聖子

今日もまたノルマに追われ暮れました
妙薬と言われあれも買いこれも買い　大阪市　喜多佐津乃

足で蹴る等はしないで落葉の精
一年の無沙汰詫びてる年賀状　豊中市　森田俊昭

病床で掬うメロンの甘さかな
伝言板消して明日をよく願い　兵庫県　西脇冨美

見逃したゴキブリ友を連れて来る
こんな時母もやっぱりこうしてた　吹田市　山田里子

若やいで還暦集うクラス会
あたたかいほんまの色の草木染　静岡市　青柳金吾

流し目の会釈に財布軽くされ
お人好し約束しては苦労する　大阪市　平井露芳

立読みの隣もヌードの頁くる
女子バレー技を見るより脚を見る　静岡市　谷紀代志

順繰りの賞にも優の字が欲しい
煽てられ一人で済ますドブ掃除　岡山県　江口有一朗

初空へ龍年の抱負なぐりがき
山脈をひきいて児島富士の立つ　奈良市　井上大

総裁の株は暴落させぬよう
手術成功六十二年の大ニュース　島根県　喜島ノブ

あれあれと言う間に消えた虹の橋
ぱっくりと割れたざくろの実が赤い　大和郡山市　渡部トキワ

秋の夜を趣味にうつつで何時か更け
一人住みカモフラージュに男物　豊中市　額田明吉

ハイテクで修復された大織冠
罫線に未練が残る大波乱　和歌山県　岩崎瑞穂

老い二人孫台風にダウンする
粕汁に酔うてはにかむ下戸の顔　尼崎市　新井朋子（中二）

◆ジュニアの部

鳥の声ハモって我に問いかける
お金よりため息たまる貯金箱　枚方市　二宮摂子

人々もいつもの通り衣がえ
タンスでは冬夏服も交たいに　枚方市　二宮正彦

月曜日たまには家ぞくで外食を
朝ごはん母の手作りおみそしる

愛染帖

橘高薫風選

青森市　工藤甲吉
二人寝てチンチロリンを聞いている
まるめろの香に包まれている秋思

倉敷市　田中好啓
連れ面の鼻のすずしさなども好き
節操を亡くし今様万媚とか

名古屋市　藤井高子
湯けむりに軽く肩章浮いている
チンと鳴る料理が妻をかどわかす

寝屋川市　堀江光子
大阪の町は川から秋の風
さそい合うように灯ともす島と島

茨木市　堀良江
フルムーン同士仲よくなった旅
しばらくは芒が原の風となり

茨木市　井上森生
年輪の最後は丸い円になる
思いきり生きた熟柿の艶やかな

熊本県　立道善太郎
み仏の顔の中にも好ききらい
名刺には善太郎とだけ書いておく

徳島市　宮武まつ女
神さまが下さる疼きなら貰う
修羅抜けた女に似合う白い足袋

吹田市　栗谷春子
木枯しに美味しいパンを抱えてる
漫才か政治家ならば売れる顔

大阪市　桝井露児
象の目を猿も柔和だなと思う
庭石が一期一会の顔を持ち

平田市　久家代仕男
赤い実の成る樹が胸の奥にある
女三人沈黙ごっこなどいかが

今治市　渡辺伊津志
ふところで言葉ぬくめてから話す
膝っこと耐える姿勢も盲人か

和歌山市　神平狂虎
わらをたし藁たし春を編みましょう
紅蓮から樹氷に変わる北の地図

和歌山市　西山幸
千倍に伸ばせば怖い蝶の顔
年毎に諦めが増す数え唄

島根県　堀江芳子
肩書の割に重さの無いお人
苦むして昔むかしがまろくなる

島根県　堀江正朗
米子市　川上より子
弘前市　波多野五楽庵
今治市　山田宝保
福岡市　吉川一郎
姫路市　釣遊光
富田林市　藤田泰子

羽曳野市　麻野幽玄
お喋りなインコは淋しがりやです
山嶺子義足の息子太鼓打つ

唐津市　入江喜久夫
例のもの頼むと言えば例のもの
微くさいプライドを持つ母ゆずり

寝屋川市　岸野あやめ
わい談は笑って聞いてみな忘れ
雪虫の舞う頃ですね亡母様

高槻市　河瀬芳子
喪の庭にひっそりと咲く枇杷の花
蒼天やうごめくものは人ばかり

出雲市　板垣夢酔
枠越えてしもたら防衛費も恋も
簡単に言えばハッピーエンドです

和歌山市　後藤正子
リハビリヘマリオネットのもらい泣き
わが胸に咲く連翹忌白百合忌

今治市　月原宵明
ゆっくりと鶴は離陸をしてみせる
紙の舟世の辛酸はまだ知らず

鳥取県　新家完司
手ばなせば紅葉のように散る未練

大阪市　渡部さと美
豊中市　田中正坊
鳥取県　江原とみお
富田林市　片岡智恵子
大阪市　島路太郎
岡山県　松本元江

生きるのも使命と思う薬包紙　町田市　竹内　紫錆

まだ連れがなくバリウムを飲まぬ妻　大阪市　井上　白峰

紺碧の空へ一太刀飛行雲　大阪市　亀井　円女

口笛を聞いたひよどり首かしげ　高知県　赤川　菊野

人生とは何だっけ棺の顔　岡山県　灰原　泰子

一本の糸がもつれてからの負け　堺市　山本　半銭

紀州路を往くとてんてん手毬かな　米子市　林　荒介

ぼくんちの海から太陽が昇る　流山市　神田　治

自画自賛グツグツ煮えているおでん　新発田市　上鈴木　春枝

自動ドア続いて入るタイミング　吹田市　園田　文子

生きていて聞く友達のいい言葉　岡山県　清水　悠貴女

幸せは今定位置にある茶碗　和歌山市　牛尾　緑良

黒を着て人間らしく死を送る　奈良市　岡田　きぬゑ

せせらぎを見たく聞きたく雨の中　島根県　松本　文子

坂無事に越えた安堵と空しさと　枚方市　中山　おさむ

錯覚でもよいから句集埋めてゆく

妻ある日フォークボールを強打する　唐津市　浜本　ちよ

炭住の風は乾きて人もなし　唐津市　浜本　義美

愚痴をみな妻が燃してる換気扇　静岡市　安本　孝平

言いわけのできぬ一言いわし雲　大阪市　今西　静子

冬苺上手に嘘をつき通す　和歌山市　木本　朱夏

芸術を付ければ裸婦に箔がつき　大阪市　町田　達子

サラダ記念日うちはうどんの記念日か　唐津市　福島　紀一

パレットを洗ってならぬ祭の夜　唐津市　仁部　四郎

薔薇々々々々世界が競演中之島　西宮市　瀬尾　六郎太

秋祭何も変らぬ住宅地　河内長野市　植村　喜代

群集にまぎれ無職でいる孤独　和歌山市　山田　高夫

ゴマすりの家来ばっかり残ってる　八尾市　山下　みつる

制服を着れば貧富の差なき顔　鳥取県　松下　たつみ

鬼瓦睨みが利いて人の波　東大阪市　大平　太一郎

老いて今飾りボタンという役目　堺市　高橋　千万子

雨の別府湯けむりのぼる濃くのぼる　岡山県　井上　柳五郎

腹立てて釘打っている槌の音　岡山県　小林　妻子

うどん屋の箸の軽さもよき余生　箕面市　椎江　清芳

焼鳥の串に噂が突き刺さる　唐津市　久保　正敏

通訳の緊張笑顔にはなれず　高槻市　辻　白渓子

髭剃って鬱金の菊にまみえんか　大阪市　塩田　新一郎

地に還る落ち葉のささやきしかと聞く　岸和田市　古野　ひで

年上の新婦に重い晴れ衣裳　寝屋川市　豊福　路子

ノーベル賞に紅燃ゆる京都大　奈良市　井上　大

哲学書いつも読んでるジョーク好き　広島市　流　奈美子

ロボットが人の心を読んだ時　唐津市　田口　紅汀

ピアノ弾く十指へ秋の彩ひかる　静岡市　渥美　弧秀

大樹一本切れば朝日がまばゆくて　仙台市　川村　映輝

降るような星空今の子は知らず　摂津市　望月　かずこ

ハードルをとぶ生涯ときめている　富田林市　松本　今日子

雲流れ風の足跡追っている　米子市　光井　玲子

寝屋川市　宮尾　あいき
湯を透けて見える乳房はまだ丸い

岸和田市　三輪　通彦
経済もマンガで読めばよく判り

大阪市　山田　妙子
結局はプラン倒れの寝正月

大阪市　板東　倫子
無気力が丸くなったと見られてる

鳥取県　小谷　美っ千
毒のある花を一本植えておく

島根県　榊原　秀子
一番星出ると聞えるわらべ唄

豊中市　辻川　慶子
余生とはまだ先の事みかんむく

青森市　漆戸　凡々子
自らを先生という平教諭

宝塚市　丸山　よし津
嫁姑仲良しごっこにくたびれる

茨木市　北村　寛子
狭い部屋時代おくれの字典あり

米子市　服部　朗子
天の恵み静かに熟れる果実あり

弘前市　真喜内　実
あせらずに歩いて長い距離にしよ

海南市　三宅　保
運命が叩く扉に鍵はない

米子市　田中　亜弥
てれているから真ん中に花を置く

米子市　青戸　田鶴
背のびした分だけ水がほしくなり

静岡市　永倉　僕川
心電図波乗りに似て打つ動悸

和歌山市　丸岩　晏
たそがれの回転木馬に乗るおんな

唐津市　菊地　香代子
コーヒーをいっ気に飲んで事件記者

唐津市　筒井　朴竜
想い出を肴に竹馬の友と酌む

唐津市　相葉　あき
独身という名で旅をする鷗

岸和田市　芳地　狸村
肩パット夢二の女にないタイプ

和歌山市　山川　克子
男までアクセサリーとはなさけない

倉吉市　奥谷　弘朗
愛の鈴鳴らし続けて古希の坂

岡山県　池田　半仙
柿の葉は大方散って熟柿だけ

長岡京市　木本　如洲
極楽の母からとどく花の苗

唐津市　山口　高明
追悼の献花空しい忠魂碑

倉敷市　田辺　炎六
野心まだ抱いて火のつく車引く

大阪市　川原　章久
嫁女には憎い姑の座りだこ

和歌山市　桜井　千秀
モタモタのままで乾いて来たぬり絵

和歌山市　山口　三千子
言いにくい事は女にまわされる

和歌山市　田中　みね
たまさかの自由が欲しい篭の鳥

広島県　田村　新造
犬過保護ドッグフードの好き嫌い

佐賀市　石田　源吾
新体操真っ青中国雑技団

貝塚市　行天　千代
店じまいなどとあんまり安くなし

兵庫県　脇田　米朝
大学を出る頃夢は小さくなり

笠岡市　松本　忠三
その任に非ずと言って居座る気

奈良市　米田　芳子
作業衣も鎮座ます博物館

堺市　桜沢　あか里
千羽鶴ざわざわ夜が白みかけ

＊

投句先　〒560　豊中市中桜塚三丁目13―15
橘高薫風宛（ハガキに3句）

NHK川柳募集

課題　「客」　選者　**橘高薫風**
締切　**1月10日**
（ハガキに三句以内）

投句先　大阪市東区馬場町3―43
NHK大阪放送局〝ふれあいラジオセンター〟係

発表　1月31日（日）ラジオ第一放送
午前11時5分から

—水煙抄

秀句鑑賞

—前月号から

清水健司

標的へ矢をためらわぬのも女　野村京子

タテマエとホンネ。この句には女の本音とこみあげてくる怒りをためらわずに発散できる女の姿を見てしまう。しかし作者は傷つきやすい心を持っている気持のやさしい女性なのである。

シーソーゲームの果てふところの不発弾　舟渡杏花

社会の弱者となってゆく気の弱いほうの人間がいつも持たされる不発弾。生きてゆくことのさびしさやむずかしさをふところの不発弾がいちばんよく知っている。いつの日か大爆発をすることを祈っている。

夢ばかり写す鏡が手離せず　流奈美子

こんな鏡があればだれでも持っていたいものです。しかし世の中そんなに甘くはありません。鏡の裏側を見ることも大切。それとも裏側を知りたくないのかも。

花束に隠れた棘は見ぬことに　河瀬芳子

そうです。生きてゆくためには他人のねたみや噂は気にせずに花束だけを喜んで貰っておきましょう。

ディフェンスの固い女の十二月　寺中三枝子

十二月だけですか。私には毎月のような気がします。

折鶴を飛ばせば後を追う未練　大川幸子

大切なものを逃がしたくはない。逃がせば残るのは後悔だけ。しっかりと抱きしめて離さずに。

マネキンの着てるサイズの上を買う　薗田漠沓

本当はマネキンの着てるのが欲しいのだが自分のサイズを思うと上しかしかたがない。上の上でなくてよかった。

いささかの自由を潜望鏡の視野　黒田緑

古風な女性。たまにデパートへ行ってもゼロの数を見てくるだけで、結局は地下の食料品売場がいちばん落ちつく。しょせん人間は孤独な存在。

実印は力一杯押さえられ　高野宵草

実印は大事なもの。間違っても保証や手形の裏書きに使うと待っているのは地獄だけ。

胃の透視黒い汚点は妬心かも　森脇和子

人間には嫉妬やねたみがあるから生きてゆける。これがなくなると無味乾燥になってしまう。あまり自分の腹の中を見ずに一度自分の姿を突き離してみる必要がある。

矢印の切れた所でほっとする　田中輝子

右へ曲れ、左へ曲れ、なぜこんなに指図ばかりされるのか。目的地はまだなのかまだまだ矢印が続いている。しかし矢印は永久に続いているほうが良いように思う。

クレヨンの青が無くなる秋の空　菅田かつ子

ほのぼのとした詩。クレヨンの青がよい。童心にかえって古里の山を思い出させてくれる。

編棒のリードに酔っている毛糸　森三枝子

平和な家庭。妻のリードにだまってついてゆくダンナ。たまには浮気でもしてみたら。

一軒が二軒になって売り出され　津田スミ子

近頃の土地の値上りに悲鳴をあげている庶民の知恵。

何時間昼ねをしてるのお人形　小四　新井晶子

人形がすねているのかな。晶子チャンが遊んでくれないので怒っているのかな。人形はお話を出来ないから晶子チャンがしっかりと見てやって下さい。

女性コーナー

黄香の世

八木千代選

木守柿　刻を飾ろうかと思う　和歌山　後藤　正子

今の時間こそ私の試されている刻だと孤をさらすことで心を飾る木守柿。まして背景には深くて広い秋の天のみです。透明感のある表白に共鳴します。

信号が変る　坊さんまで走る　大阪　町田　達子

「坊さんまで走る」というこの明るい書きかた。おかしくておかしくて、読み直してみるとハッとさせられる人生の一大事なのに。川柳とはこんなに真実がさらりと書けるものかと改めて川柳に打ちこみたくなりました。

生命(いのち)より大事なものを巣の中に　米子　寺沢みど里
あふれては困ってしまう水の嵩　尼崎　春城　年代
黒ばかり並べばその差見えてくる　堺　松本はつ子
ほっと一息つく　夜のオモチャ箱　寝屋川　稲葉　冬葉
アルバムの過去を称えて何としょう　米子　林　瑞枝
迷路続いて時効の風にまだ逢えぬ　和歌山　西山　幸
もしという二字へわたしを賭けてみる　和歌山　坂部紀久子
差し上げた毬は弾んでおりますか　米子　川上より子
なりゆきにまかす喜劇さ寒椿　大阪　津守　柳伸
焚いても焚いても寒い部屋である　田辺　染道　佳明
アクセサリーじゃらじゃら自信ないのかな　和歌山　山川　克子
茶がらから人の噂は拾うまい　岡山　清水悠貴女
ふかぶかとお辞儀をしたい秋となる　大阪　堀　いくの
秋の絵にわたしが一人欠けている　和歌山　木本　朱夏
夕暮れてもらう暦はおそろしい　米子　門脇　晶子
振り向かぬため柿の皮長く剝く　出雲　園山多賀子
個性いろいろ実の大きさは語るまい　藤井寺　高田美代子
軽いジョークで明日(あした)の席を予約する　米子　政岡日枝子
闇に去るいとしいものへ声かぎり　和歌山　森　茜
まだひそかに想いつづけている能面　八尾　宮西　弥生
美しい月夜だ老母も無事だろう　島根　松本　文子
翔びそこねてじれているのは肩パット　名古屋　藤井　高子
九官鳥カラスの真似はしないこと　西宮　奥田みつ子
もう泣かず翔ばずそして黄昏れる　高石　浅野　房子
落しても割れない皿に添うてから　松原　佐藤　藤子
言い訳はしないが花を活けてある　大阪　鍛原　千里
霧が巻くジタバタしても始まらぬ　堺　鈴木三千代
鷹揚に笑って男とは男とは　高槻　河瀬　芳子
満腹の笑顔はとても美しい　米子　田中　亜弥
母の愛　懸崖菊の傘ほどに　寝屋川　宮崎　菜月
満たされて炎が消える不安感　大阪　神夏磯道子
笹の風ひとりひとりの羅漢たち　和歌山　福本　英子
つつまやかあの世へ渡る切符代　羽曳野　福田満洲子
陽の当る場所で指切りしておこう　米子　足立由美子
朝の茶の旨さへ今日を信じよう　姫路　丁坪サワ子
右手の毬が弾んでこまる五十歳　大阪　田中　弘子

夢を見る気で持っている藁一本　竹原　信本　博子
簡単に付けてはくれぬ落ちボタン　米子　石垣　花子
サヨナラを未練たらしく言うすすき　大阪　西出　楓楽
かえり咲いてもうっすらと罪の彩　米子　青戸　田鶴
じっくりと私を覗く鏡撰る　和歌山　松原　寿子
幸福に仕返しされそう誕生日　西宮　秋元　てる
さまざまな風に押されて来た峠　米子　沢田　千春
影武者の腕ためされぬまま老ゆる　八尾　高杉　千歩
おにぎりにユニークな愛入れておく　貝塚　池田寿美子
赤ちゃんを見れば話しかけたくなる　茨木　堀　良江
冬の虹追うと段差にけつまずく　大阪　渡部さと美
翔んでみて初めて分かる遠い距離　出雲　石倉芙佐子
うんこらしょよいこらしょと蟻の群れ　島根　喜島　ノブ
繋ぐものなにもない時のすぎゆく　大阪　古川美津枝
美しく生きたしなさけ惜しまない　鳥取　さえきやえ
絹糸をはじく亡母さま恋しくて　佐賀　寺中三枝子
空白を読んでるそこに愛がある　堺　高橋千万子
本当の涙はみせぬ旅役者　大原　千原　理恵
責任をとると女は何になる　米子　新　正子
何もかもすきっとはして秋冷える　吹田　栗谷　春子
ひっそりと君の遠のく音を聴く　寝屋川　岸野あやめ
ある別れ背に散るもみじ炎えぬまま　富田林　片岡智恵子
一言が父に弓矢を引いている　岡山　灰原　泰子
真ん中も端も踏みゆく丸木橋　和歌山　砂山千枝子
美しい箱で迷わず陽にかざす　米子　小村てい子

陽だまりで老母と向き合う時よ止まれ　米子　大田みさと
雑念は神にゆだねている寝顔　広島　流　奈美子
かんたんに飛び越えられぬ向う岸　出雲　吉田　智子
不器用な女がのぞく花の芯　倉敷　小野　克枝
ウツ病というて逃げるのも一手　大阪　板東　倫子
親も子もトレードしたいと思う日々　埼玉　根岸　方子
パーティーで総理買うさま見ていよう　横浜　大橋よしゑ
天の声　縄が曲がって降りて来る　倉吉　淡路ゆり子
着せ替えの菊師　菊の香にむせぶ　守口　結城　君子
引き出しをあけると母のデリカシー　大原　土居ひでの
割引きに弱い女で憎めない　出雲　金森知恵子
美しい足跡二人三脚で　寝屋川　平松かすみ
思うこと言葉にならず峠道　吹田　茂見よ志子
わたし自身に甘い採点捨てました　米子　野坂　なみ
あきらめがついたら見えた戻り道　和歌山　桜井　千秀
破れたら又つぎ合わす愛の糸　大原　山本　玉恵
初春へ開く蕾を抱いている　岡山　松本　元江

一月号からいっしょに勉強させて頂くことになりました。おかげさまでひじょうに質の高い投句をいただきましてありがたいスタートでした。茴香の花が匂うときも近くなりそうです。たのしみに待っています。

◇

ハガキに雑詠3句　**毎月10日締切**
投句先　〒683　米子市花園町一四　八木千代

62年度愛染帖賞

受賞作品

木山遠二

呼び鈴に妻よりも猫速く来る
九十には恋人がなし長閑なり
寝たきりがお天気博士のファンとなり
老夫婦お花見猫も来て座り
寝たきりに妻はにこにこ叱られる

評　最終的には、木山遠二、西山幸、堀江光子、新家完司、政岡日枝子、渡部さと美、八木千代、土居耕花、工藤甲吉、矢野佳雲諸氏の作品五句を抄出、審査の対象とした。愛染帖抄は、新鋭作家にとの思いが強かったが、今年度だけでなく、寝たきりの境涯にあって、融通無礙の淡淡たる作句生活を続けられる木山遠二氏に川柳の深奥を教えられた。第一回の愛染帖賞に推薦する。今年も大方の皆様の変らぬご支援をお願いする。

（薫風）

西山幸

走れ縄電車よ春は遠からじ
花だよりあの世この世の住所録
何故に春胸のあたりはさむいのに
下手に釘打ってはお亡父さんを呼ぶ
ピリオドが上手に打てぬ五色豆

堀江光子

もう逢わぬ椅子を男はさきに立ち
一年がひとときとなる落葉焚き
そつのない酌で万年鞄持ち
鈴つけに来た男をば抜擢し
逆立ちをすれば青春見えるかも

62年度茴香の花賞

受賞作品

西山　幸

許せないものは許さず秋を待つ
母の忌の薔薇も牡丹もにくむべし
紬着て素直なものを取り戻す
今日も元気ですかいたずら電話さん
表札もひとり暮らしに草臥れる

茴香の花は、地味な花ではあるが、壺に活けようとしても、他の花を寄せ付けない程の個性があり、何本か束ねて活けてみて、その姿に見惚れるほどの趣がある。
五句選ばせて頂くにも、この花のように、他人とは違う作者独自の作品であるということを大事に考え、賞とすることにしました。
句を掲げさせて頂けなかったが、松本文子さん、西出楓楽さん、佐藤藤子さん、河瀬芳子さんのお名前を掲げて、作者の心を大切にしたい。
（智子）

鍛原千里

繋がった沢庵今日も良しとする
旅に出る支度はいつも出来ている
ぽっくりと死にたいなんて嘘を言う
新しいペンは昨日を嫌っている
三人の中に私はいつもいる

春城年代

まな板に男の貌を見せた鯉
亡父の里どこの家でも茶が美味い
デカンショの町からついて来た郷愁
手押し車のおばさんの菊待っている
神さまのひいきと思うことにする

タツは青春

東野大八

いろは歌は四十七字で、一字も重復せずまとまった意味を持たせた弘法さんの最高傑作である。中国の千字文がこのいろは歌の要領で作られたいろは歌中国版だが、ゴマンとある漢字から千字だけ重複しないように選べばよいのだからラクなものだと考えたら、これを作った南朝の梁の周興嗣という人は、一夜で髪が真白になったそうだ。しかし結局一夜漬だから弘法さんの方が上手だ。

中国では千字文を、いろはと同じように序列表示に用いる。日本の高文試験に当る科挙の試験場は、千字文の初めの天、地、玄、黄の順に記号をうつのがならわしである。

さて天地玄黄だが、天地は判るとして玄は黒である。年配の向きにおなじみ深い墨のブランドに「玄之又玄」という墨があった。小学生の頃に書き方の時間に使った墨のことだ。この句は、老子の言葉で、天地万象の根源をなす「道」を説明するのに用いたのである。玄（黒）は天の色なので、道教ではこの字を大切にとうとんだ。

東南西北といえば麻雀でおなじみだが、東は日出ずるところとあって方角では一番すぐれている。中国では東は皇太子の住むところで、日本でも東宮の用語がある。東宮に対し西宮は后妃の住むところである。西太后等ですぐ思いつくが、中国の西は西王母の伝説などで、女性が片寄る方角だ。

南は草木が繁茂する日当りのよい場所だ。天子は南面する。臣下はそれに向きあって北面する。北面の武士の語源である。北は二人の人間が背を向け合ってる恰好だ。「敗北」というのがあり北は一字でも逃げるという。

東南西北を色と方角と獣で現わすとこうだ。

青―春―東―竜
赤―夏―南―鳳
白―秋―西―虎
黒―冬―北―亀

したがって青竜、白虎、朱鳥（または朱雀）玄武が東南西北を象徴する瑞称とされ、中国では宮殿にこの名の多いのは周知の通り。

中国人が「天下」を意識しはじめたのは戦国になってからで、春秋以前は主に「四方」といった。従って東南西北は中国人の最初の世界意識であったといってよい。だからこの四方のなかに「四季」も「四色」も「四獣」もとり入れたのである。中国人が最も尊敬する色は「黄色」であるが、それは東南西北の中心の色と考えている。「中華」とはここで生れた。とにかく今年の色は東風である。青―春、いわば青春のタツである。がんばり給え。

近畿文字放送作品募集

題「猫」　橘高薫風選

3句　締切1月15日

ハガキに明記の上、左記へご投句下さい

〒540　大阪市東区谷町2丁目36
大手前ウサミビル3階
近畿文字放送　川柳係

匿名氏より
金一封
ご寄贈いただきました

川柳塔社

頌　春　1988

川柳わかやま

橋本・紀水川柳会
由良・川柳ゆら

★昨年は、わかやま 200 号達成記念川柳大会、合同句集「あおい海」第二集、野村太茂津編著「川柳はまゆう」刊行。
絶大な御支援を戴き厚く御礼申し上げます。

明けましておめでとうございます
ことしもよろしくお願い致します

米子　川柳塔きゃらぼく

桑原伊都　木村春枝　木村富美子　川上より子　金山夕子　神崎あい子　門脇晶子　大塚恵子　大田みさと　石中時子　新　正子　足立由美子　青戸田鶴　石垣花子

野坂なみ　野中御前　中井ゆき　寺沢みど里　田中亜弥　菅井とも子　白根ふみ　塩谷八重子　さえきやえ　坂口一江　沢田千春　雑賀美世　小村てい子　小西登栄

八木千代　矢野満子　茂理高代　三好寿々子　光井玲子　政岡日枝子　増田竹馬　堀江純子　祝部寿美子　藤井文世　広江富枝　服部朗子　林　瑞枝　林　荒介

明けましておめでとうございます

川柳塔社常任理事会

理事長
西尾栞

副理事長
阿部柳太
阿萬萬的
橘高薫風
黒川紫香
西田柳宏子
野村太茂津
板尾岳人
岩本雀踊子
内海幸生
榎本吐来
笠原吸江
樫谷寿馬
金井文秋
神谷凡九郎
河井庸佑

常任理事
河内天笑
小出智子
里小路敏
高杉鬼遊
田中正坊
谷垣史好
玉置重人
辻白渓子
中川滋雀
中村ゆきを
春城武庫坊
藤井一二三
松川杜的
宮口笛生
宮園射月芳

Kさんへの手紙

時実新子

Kさん、ありがとう。

こんどの出版のこと、プロセスは何も話さず、いきなり「協力してね」という私のいつものわがままに、あなたが「よっしゃ」と答えてくださったうれしさ。感謝のことばがみつかりません。

朝日新聞社から三人の人が来訪されたのは七月初めのことでした。

「正直に申しますと、川柳の『サラダ記念日』にしたいのです。ぜひ出させてください」

私の担当になった人は四十代。ズボンの膝を正してそう言われるのでした。

私が直感人間であることはKさんもよくご存知ですね。私はその上野さんという人の目をまっすぐにみつめました。上野さんは二、三度まばたかれましたが、とても誠実な人だということが一目でわかりました。

「承知しました。よろしくお願い致します。

これで第一回の会見は終わったのです。

東京ではその日から七人のスタッフを組んで、句選びが始まったそうです。暑い盛りの東京で、男・女、二十代、三十代、四十代、五十代、各層の人たちが、それぞれの目で私の『一萬句集』から数百句の抜き書きをしてくださいました。

最終選は九月末。このときは上野さんを中心にホテルにたてこもっての協議だったとか。

そうして十月初め、また別の三人の人が神戸へ来られました。本の名を決めるためです。

ワープロで打たれた六百五十句を見て、私は声をあげたのです。

「えッ、これが私の句ですか!?」

でも、落ちついて見れば、一句、一句、まぎれもない私の子なのでした。他人によって選ばれた私の子は、ちょっとはにかんでいましたが、やがて、

「母さん、ぼくたち全国のたくさんの人のところへ行ってくるからね」

「わたしもガンバルわ」

どの句もみんな健気で、私は胸がきゅーんとなりました。

『有夫恋』という本の名は

十七の花嫁なりし有夫恋　　新子

から採られたものです。

「有夫」というのは「夫のあること」と辞書に出ていますが、「有夫恋」というのは私の造語です。

Kさん、あなたと私はほとんど同じころに川柳の出発をしました。昭和二十九年、あなたは二十八歳でいらした。私は二十五歳、すでに二人の子の母親の位置からの出発でした。

私が一人の女として文芸に生きるとき、私の恋や愛は自在のはばたきを見せましたが、そのどれもが有夫の恋であったこと。この宿命をいま、私は莞爾と笑って享けようと思っています。

『有夫恋』――美しい名だ、とあなたが言ってくださったうれしさ。

Kさん、昭和三十八年に処女句集『新子』を出したときの昂ぶりが、もういちどやってまいりました。

川柳が世の中へ出ていくのです。

これは単に私一人の出来事ではありません。やがて何人もの俊秀が世に出るための捨石のようなものです。

Kさん、ほんとうにありがとう。

どうか皆様によろしくお伝えくださいませ。

（S62・12・4）

句集「絵皿」のおいしいユーモア

橘高薫風

盃を持ってよろめく喜の祝

この句は昭和三十四年四月の第九十八回大萬川柳の天位の句である。選者は言うまでもなく麻生路郎で、高橋千万子さんが路郎の選に抜けたのは、後にも先にもこの一句だけだという。大萬川柳の最盛期ともいえる時で、その月の集句数は七百二十七句と記録にある。

千万子さんの師系は、大萬川柳の当主松江梅里氏で、

命まで賭けた女でこれかいな

の句が印象深く私の脳裏に残っている。

私が中学校に入学して初めて英語を習った時、村田重俊先生（後に大阪経済大学教授）が、英語の発音は最初に教えられた教師の発音が終生身についてしまうものだと言われた。

川柳とてその通りで、大方の初心者が最初の指導者の句風に大きく影響される。千万子さんもその例にたがわず、梅里作品の諧謔を身につけられた。冷徹な眼で見る批判性と、時には鋭く時にはぼうようとしたユーモア。それが千万子さんの味だと思うのだ。抒情に偏る女性の中でユニークさが際立つ。

男らしく女らしくの三ヶ日
封筒の色に似合わぬきつい文
割勘のもつれにレジの無表情
すぐ返す気の五日たち十日たち
三面鏡片方閉めて許してず
落し主拾い主ほど善でなし
老いらくの恋胸で咲き胸で散り
駄目という言葉は犬も知っており
寄せ書へいつも寄り添う片思い
連れが降り女スイッチ切れたよう
化粧品値切らず鰯値切るなり
嫁もらい五十女が泣きに来る
飲んで来たなと耳元でささやく蚊
立ち話マンションはいま全自動
妻の嘘うまいと思う襖ごし

目についた作品を書き出したが、まだ句集の半ばである。昭和六十一年度の路郎賞を獲得されて、にわかに句集の編纂を思い立たれたそうだが、句集は発刊後瞬くうちに無くなってしまった。昨年の四月発刊された土居耕花句集「やっこ凧」とともに、ユーモアの味に溢れた句集としては双璧であろう。

第8回 ときせん賞作品募集

雑詠2句（未発表句）

選者 大野風柳・橘高薫風・寺尾俊平・去来川巨城・小松原爽介

投句締切 昭和63年1月末日着便

発表 昭和63年時の川柳4月号誌上

賞 ときせん賞 一名
準ときせん賞 二名
佳作 五名

投句料 五百円（定額小為替）
▼誌友外で発表誌希望の方は五百円追加のこと

投句先 〒652 神戸市兵庫区大同町2丁目3－18 ト部方
時の川柳社編集室宛

◎多数のご応募をお待ちします。

時の川柳社

NHKラジオ第一放送
新春川柳大会（東京）
1月2日午後3・05から約2時間
選者 堀口北斗・森中恵美子

鹿野よいとこ

西山　幸

鹿野町みか月七周年記念川柳大会に出席するため、秋たけなわの浜村駅に降り立った一行は、森中恵美子さんをはじめとして、黒川紫香、岩本雀踊子、野村太茂津、高杉鬼遊、小池しげお、吉田笑女、秋元てる、小熊江美の皆さんと私の総勢十名。

鷲峰山のふもと鹿野町は、「戦国時代、亀井氏によって形成された城下町で、天正年間以降からの史蹟も多く、単に温泉による保養にとどまらず、訪れる人をして昔を偲ばせ、懐古の情を深くさせて、再度足を運ばせるに充分の地である」と書かれている通りの、実に素朴な、穏やかなたたずまいであった。汚れていない空気が清々しい。

すでに先着されていて、出迎えて下さった「風の会」の金築雨学さんと水永ミツコさんそして土橋蛍会長、森山盛桜さん、中原諷人さん、みさ子さん、汲香さん達と再会を喜びあい、出迎えのマイクロバスとそれぞれの車に分乗して、先ずはりんご狩りに行く。

紅いみごとな実が、重そうに成り下っている林檎の木を、はじめて目のあたりに見て眩しくなる。開放していただいた園は、〝品種〟ふじ〟で、どの木も紅い実がたわわなのに、垣の向こうは未だ全部袋が冠せられている。充分に実って、袋を脱がせ、陽光を浴びなければ紅くならないのだそうで、袋の中はまだみんな青いりんご達だ。

鋏で切り取るとばかり思っていた私達は、捩ぎかたを教えられてから、それっ！とばかり、あれか、これか、大きいか、紅いかをお互いに比べ合い、より大きく、さらに大きくと、みんな欲張りじいさん、ばあさんになって、籠に入りきらないような大きいのを捩ぎとってはニコニコ。重すぎて、あとで難儀することなど考えずに……。

それにしても、捩ぎたてのりんごの、なんと美味しかったこと、水々しかったこと。

そして、林檎山から見えた夕凪の海の素晴らしかったこと。まさに山紫水明だ。

みんな満足そうにりんご籠を提げて、宿舎の山紫苑に着く。旅装を解いて、鹿野の名湯に浸り、旅に来た気分を満喫して、やっと、くつろぐ。

名物の露天風呂は、もっと暗くなってからと思っていたが、これは入りそびれた。

ロビーで案内のパンフレットを読むと、亀井茲矩の墓所もあまり遠くないようだ。それよりも「七難八苦」で有名な山中鹿之助のお墓へ行ってみたい。一難二苦でも逃げたくて愚痴を言う私だから。

儲けさせて欲しいので、「もうけ神社」には何としてもお詣りしたいけれど、あまり欲なことを考えていたら、末おそろしいかナ。

隔年昭和年号の奇数年に行なわれるという「鹿野まつり」の三台の屋台の華麗な写真は一度実物を見てみたいものだ、とその壮大さを思いめぐらしてみる。

さて、その夜の宴会は、心尽くしのご馳走と人情とのプログラムで、楽しく和気藹藹。

地元の皆さんの特別出演で、鹿野音頭、鹿野傘踊りや銭太鼓等に見惚れながら、お酒も美味しく、みんな快く酔うて騒いだ。

余興での圧巻は、何といっても盛桜さんの〝東海林太郎〟と、熊生さんの〝貝殻節〟だったろう。百畳の広間狭しとラストダンスで宴が果てるまで刻を忘れて……。

外はいつか雨になっていた。

十一月十五日、みか月川柳会七周年記念大会の会場は、すでに準備万端滞りなく、各持場の人達の大会への心構えが感じられた。

句会参加者への記念品は、汲香さんの見事な題字で飾られた句帳「志加奴笠」。

夜来の雨も上がり、河内天笑さん、月子さんが到着。

開会を告げるファンファーレが高らかに鳴り響いた。出席者一三八名の熱気あふれる大会である。盛桜さんのスマートな司会のもと蛍会長挨拶に続いて、「勇士は還りぬ」のメロ

ディーの中で、前年度のトロフィー、賞杯の返還式が行われる。今年度のそれぞれは、いったい誰の手に、という期待がいやが上にもふくらむ。

町長さんの祝辞は、とてもユニークで、ユーモラスで、鹿野町が川柳の町として発展すること間違いなし、みか月川柳会の前途洋々と心からの喝采を惜しまなかった。

森中恵美子さんのおはなしは、(川柳の原風景)とも言える感銘深いものだった。混沌のこの世の中で、二つの物差しを、明日からは忘れないようにしたいとおもう。

昼食、休憩後、いよいよ入選句の披講が始まる。誰もが一喜一憂しながら聞き入る。句会の詳報は句会誌を待つことにして、

第一位　森中恵美子
第二位　野沢　大漁
第三位　河内　天笑
第四位　新家　完司

以下、第八位までの表彰式があり、最後までセレモニーは順序よく運んだ。

懇親宴に移り、高杉鬼遊さんの音頭で、句会無事終了の乾杯を交わす。みんな皆、やっとリラックスしてビールが喉に爽やか。

山盛りの豪華な海老や貝もおいしかったけれど、熱気の会場での冷奴が嬉しかった。

ひと味違うお豆腐だった。聞けば鹿野町自慢のものだとか。

食欲がすすみ、話がはずんでいるのに、帰りの乗車時間が迫ってきた私達は、尽きぬ名残りのなかを中座、見送りに出て下さった皆さんとお互いが見えなくなるまで、手を振りあった。

浜村駅で熊生さん達のご一行ともお別れし「はまかぜ」で帰途についた。

昏れのこる錦秋の鷲峰山が美しかった。

旅はよいものだ
出逢いはよいものだ
別れもまたよいものだ

みか月川柳会の皆様有難うございました。旅の始めから終わりまで、幹事役を引き受け、お世話下さった紫香さんに心からお礼を申し上げます。皆々様ほんとうにありがとうございました。

それからへ林檎がとても紅くなる　幸

当日の秀句は次の通り。

無位無冠　雑魚にも雑魚の骨がある　高杉　鬼遊

いい出会いだから日記に書いておく　野沢　大漁

敵もあっぱれだ火の矢を投げ返す　八木　千代

それからへ林檎がとても赤くなる　西山　幸

灰皿に父の苦悩を積もらせる　住田　三鈷

寮の灯が消えて瞼に母が来る　矢内寿恵子

大器にはなれず大地へ鍬を打つ　河内　月子

愛されていますと娘電話口　佐々野紫泉

羽原静歩氏（守口市）より
句集「いのち」発刊記念として
金一封拝受いたしました
川柳塔社

初歩教室

題 ― 良心

阿萬 萬的

今月の課題「良心」は難しかったようですね。まともに向かえば平凡な説明句になってしまうし、翔んでみたくても範囲が限られているようでして、全くのところ……

ところで良心といえば社会悪の一つ、まがい商法が目につくのですが

良心のかけらもないよな儲けぶり　昭　治
良心の呵責忘れて金儲け　小　鹿
まがい商法良心不在で荒稼ぎ　三津江
良心があるかに見せて詐欺商法　正　之
良心を忘れた鬼がまかり出て　秀　香
（良心を忘れた鬼に居坐られ）
良心を永漬けした悪商法　サワ子
（氷結した良心地上げ屋詐欺まがい）
良心の崖踏み外すけもの道　章　久
良心がないのかと言う鬼の顔　つゑ子
（商魂が良心歪めた鬼の顔）
良心と背中合せの出来心　勝　美
良心も欲には勝てず恥さらし　幟
良心にブレーキきかず黒い霧　美恵子
（ブレーキが効かず汚職に名をつらね）
良心と邪心が摩擦して生きる　三千子
（邪心と良心都会は生きてる回ってる）
だが、こんな人もいるのですね。
良心が許さず辞める詐欺商社　三三三
良心に恥ずることなく粗衣粗食　金　吾
良心に恥じぬ暮しに花が咲く　志　重
下五花が咲くを「白い花」にしてみては
どん底に生きても良心持ちつづけ　三三三
馬鹿正直と言われて嬉し吾が心　芳　枝
（自己満足馬鹿正直と言われても）
だが良心だけではとかく都会は住みにくく
良心的に生きて出世に遠くいる　志　洋
良心的と言われ経営細くなり　千鶴子
良心を看板にした店じまい　晏
御時世で良心多けりゃ損をする　三津江
現代は良心だけでは住み難く　正　之
良心だけでは越せない波もある　ト　キ
（良心だけでは越せぬ世間の波もあり）
巷には良心薄き人の群れ　昭　治
良心が麻痺されそうな都市砂漠　しず子
忙しく良心目減りしてる街　て　る
（良心も目減りしていた暮の街）
だがね良心的なお店はやっぱり強いようで
良心と笑顔魅力で人が寄る　太一郎
良心的を買われ老舗の灯は消えず　み　ね
あの医者は良心的で大はやり　喜代子
（良心的な医者ですロもちと荒く）
ここらで一寸向きを変えてこんな良心も
良心が咎めて一線を越せぬ　喜与志
（良心の呵責一線越えられず）
割り切った筈が咎めて寝つかれず　三千子
良心があってその夜は眠られず　三　倉
良心の呵責に悩むあの一夜　み　ね
（良心の呵責に夜が白んで来）
良心があるのか二人で泣きました　悦　子
良心の苦しみ逢うて獄の中　美恵子
（良心がうずく夜道を行く二人）
良心を騙しつづけてもて遊ぶ　保　夫
良心があるから悩みつきまとう　しず子
（良心の呵責女に夜がある）
良心の咎めを写すうす明り　章　久
良心にちょっと逆らいああ無情　洋　子
（良心に逆ろうて見る春の宵）
良心に雲が掛って荒れている　野　草
人妻へ良心咎めて茶で別れ　繁　男
男には男のくらしがあって
気がつけば灰皿へ出る左の手　隆　雄
良心てなんぼのもんじゃ冷やの酒　正　子
良心も少し酔うてる千鳥足　志　洋
良心が負けそう赤い灯が揺らぐ　しんじ
お年寄の良心は時として通じにくい時もあって
頑迷を良心的と煽て上げ　紀代志
明治の膝乗り出して説く良心　すみれ
（頑迷に良心を説く老いの膝）
悪人になれず良心抱いて老い　遊　光
（悪人にもなれず良心老いて来る）

三分の理良心曲げて我を通し　明吉
（三分の理老いの良心我を通す）
自叙伝へ良心先に顔を出し　遊峰
（自叙伝へ良心曲げた事も書き）
良心が昔話になっている　小鹿
良心の助言のつもりが厭味です　方子
（良心の助言が厭味な曇り空）
嫁からの良心姑に通じない　喜代子
（嫁と姑の良心にさえあるひらき）
旅はともすれば温かい心に触れるもので　洋子
良心を信じ路傍の無人売り　方子
無人駅切符を置いて人恋し　春枝
旅先の良心市で見た情　善太郎
（良心その儘朝市のひとよく笑い）
良心を袋に入れて旅をする　八重子
（良心を袋にローカル線の旅）
お人好しは何かにつけて心を痛めるもので　金吾
軽い嘘ついて良心そっぽ向く　ミツエ
良心に咎められてる軽い嘘　野草
（軽い嘘にも心痛めるお人好し）
良心が咎めお世辞の嘘がばれ　芳枝
隅っこの良心小声で詫びている　輝月
言い勝ったエゴに心が疼く夜　千鶴子
良心に顔向け出来ぬ日のあせり　すみれ
（良心のあせりへ冬の風の音）
良心を少し削って胃が痛む　保夫
良心の呵責にたえずつい本音　紀代志
良心の呵責律儀を眠らせず　照子
（良心の呵責枯葉の音を聞き）　喜与志
良心と裏腹の言がスッと出る　タネ
（良心と裏腹の言葉が出る暗さ）
後戻りする良心に救われる　路子
（後戻りする良心へ冬木立）
良心に気付き周章てて話聞く　繁男
（良心に気付いて話聞き直す）
良心のかけら妥協の線に乗る　秀香
良心に負けた涙は温かい　遊光
街に住めばこんなこともあります。　美子
自転車と一緒に良心放置され　円女
良心が居眠りしてる優先座　輝月
（シルバーシート良心居眠りしています）　サワ子
良心が手折った花へ詫びている　春枝
一枝が欲しいが無断で折れもせず　タネ
母親の良心とは淋しい響きですね。
良心を捨てて仮面の母で生き
子を捨てた親にもあろう苦しみが
（水子地蔵へ花を手向けた秋の空）
良心は拭いても拭いても汚れます
良心と話せば母の顔浮かぶ
良心が母の瞳へ疼き出す
良心が少うし疼く子への嘘
この儘の御無沙汰良心許さない
（良心のはしくれ無沙汰の母を訪う）
では最後にもろもろの良心を　てる
良心にソッポを向いた日の日記　しんじ
良心の並んで本殿身のしまる
（玉砂利踏む音良心へ真っ直ぐに）
良心と悪女いつでももめている　美子
（良心と悪女が揉める雨の午後）
正気かと良心疑うミス候補　志重
（ミス候補に良心疑う人も居り）
良心もあろう事にと顔を見る　はる
（スニーカーの良心疑い顔を見る）
良心の手肩にじっととまったまま　晏
（良心の手が肩にのる夜のしじま）
良心が教えてくれる一本道　幟
（良心を教えてくれた田舎道）
魂胆を良心見透す花鋏　照子
良心の化身ではない見舞金　緑良
睨めっこ達磨に良心覗かれる　勝美
ゴキブリをあっさり殺して拝んどく　悦子
蟷螂の雌に良心あるだろか　正子
良心を写す鏡が一つある　円女
騙された風では舞わぬ風車　善太郎
ひょっとこの面で良心庇ってる　緑良
良心がちょっぴりうたた寝しています　トキ
良心があるから揺れる丸木橋　三倉
これで終りますが課題のせいもあるのでしょうが、説明的な句になってしまって詩情に乏しかったように思われるのが残念でした。
ではまた来月の名句を期待しています。

◇

題「茶碗」　**1月10日締切**（3月号発表）
ハガキに5句以内
「顔」　2月10日締切（4月号発表）
宛先　〒598　泉佐野市中庄一〇八一—九九　阿萬萬的

松

石田清泉選

幼な子は松ぼっくりに夢を持ち　蕗児
風雪に耐えて老松苔を抱く　裕
潮騒の松葉雫の松露掘る　朴竜
テトラポット衣をかける松がない　どんたく
おみくじを結ばれ松の独り言　規不風
若松のどこまで真っ直ぐ伸びられる　元江
門松へ正座楷書をしたためる　奈美子
鉢植えの松開式へ正す威儀　四郎
松根油集めて飛んだ日の悪夢　旭恒
童心へ松ぼっくりが夢さそう　倫子
松籟という友ありて雪月花　虹汀
松活けて我が家の顔になる新居　森脇和子
盆栽の松に松籟聞いている　満津子
雪少し積もって欲しいと思う松　度
ブロペラを付けて門出の松の子等　正子
寂しさを一本松は語らない　三五島
旧道の松が守っている歴史　たつみ
からみ蔦絡ませたまま松伸びる　新造
神様は留守らし宮の松枯れる　博子
お手植えの松すくすくと初明り　本蔭棒
根上りの松に意気地を見せられる　保
遺言は松の根っ子に埋めてある　とみお
門松に平和な日本主張する　雀踊子
風が出て松の呪文を聞かされる　美代子
村の歴史を老松から学び　劔
風の色緑に染めて松並木　有一朗
松喰いにやられるものかと松の私語　かつ子
松枯れて幼なき夢は奪われる　宵明
松ぼっくり幼馴染みの声がする　寿美
松の内だけでもと化粧するらしい　蛍
松の葉に抱かれて届くかつお節　康子
出雲路の風情をかもす築地松　ちかし
盆栽の松に寄り添う福寿草　白峰
村の辻民話を持った松が老い　博友
盆栽の松ねじ曲げている平和　重人
落城の哀史を語る城の松　高明
佳
潮風に耐える松にも四季の詩　正敏
松ぼっくり勤め果たして旅に出る　枯梢
門松は小さめにして定年後　晏
経営の赤字は見せぬ門の松　可住
潮風を素手で掴んだ松の枝　はるひ
人
原点に還って松の苗植える　雄々
地
這い上る僕を見ている老いの松　克子
天
丘ひとつ握りしめてる松の色　白汀
軸
老松を添わせ見事な天主閣

驚く

吉原紅月選

つまみ食い背からどうだ旨いかね　みね
嘘、本当、そんなことなどあるもんか　ただし
驚いた振りして無心うまく逃げ　サワ子
はっと眼をあけたら違う駅に着き　源吉
驚いた悲鳴あわててへびも逃げ　悠泉
警察の電話は友人からだった　はるお
大げさに驚いてやる孫の面　八太朗
鑑賞の眼を驚かすゴッホの値　どんたく
驚いた顔で知ってる噂聞く　三倉
見てくれと彼女を連れて乗りつける　ろ亭
驚いた馬が私を置いて行き　劔
アメリカのくさめ驚く兜町　宵明
血圧を妻が測って驚いた　きよし
それは嘘しゃっくり止めてあげただけ　満津子
ゴキブリが飛んで子供が悲鳴あげ　素身郎
田圃から日本最古の寺の跡　杏村
真夜中のベルに血圧上がりだす　重人
町内のドケチがポンと寄附をする　弘朗
背泳ぎのギャルに驚く露天風呂　白峰
単身赴任妻は突然やってくる　道子
仔犬チョロチョロ若葉マークを驚かせ　本蔭棒
驚いて突撃ラッパなど吹くな　三五島
驚いた振り見て猫もとび上り　玉恵

学者にはとても見えない隠し芸　新造
顕微鏡まだまだ驚くのは早い　可住
犬の尾を踏んで両方跳びあがり　三千子
葬替えの寺に驚く金が要り　重信
だし抜けに妻から届く果し状　美代子
驚いた真赤な靴がドアー蹴る　たつみ
驚いて喜ぶ母へ急ぐ足　規不風
ファミコンの指に驚くおじいちゃん　よし津
ニアミスの自衛隊機にある恐さ　勝美
驚いた顔で打つ手は打ってある　文平
ベラベラと喋り見合いと後で知り　博子
驚かす筈の背中が向きを変え　裕
家中をパニックにする孫の熱　正坊
ゴキブリに驚き妻に叱られる　雄々
三面記事もうキリストは驚かぬ　正敏

佳

落ち柿の音に驚くトタン屋根　サワ子
預かった孫が鼻血を出している　たず子
救急車隣が驚かされて起き　白渓子
驚いた途端に入歯外れかけ　軒太楼
信じてた子から別居を言い出され　大柏

人

何見ても驚く母と旅をする　倫子

地

野兎の驚き野火へ追い出され　朴竜

天

驚いた瞳が素晴らしい好きな人　雄々

軸

顔色にその驚きが出てしまい　規不風

妥協

神夏磯　道子　選

妥協せぬ父憎らしく頼母しい　米朝
名工は納得ゆくまで妥協せず　通彦
決議した妥協に足枷はめられる　悟郎
妥協する事から始まる朝の膳　ただし
この辺でと言われぬ先に蹴る妥協　章久
耐えて来た姑に沁みてる妥協ぐせ　元江
坂の途中でふと妥協する気が変り　玉恵
銭のこと以外は妥協してやろう　とみお
歩み寄る妥協の線が揺れている　多賀子
争いが嫌いで妥協の道えらぶ　正之
ひとりでは生きて行かれぬから妥協　太郎
妥協することのメリットデメリット　倫子
八方美人になって妥協を繰り返し　達子
妥協する覚悟へおろかな靴をはく　テルミ
営業用笑顔に妥協のくせがある　勝美
借りがあるのでこの辺で妥協する　新造
神の妥協　十円玉で祈ってる　静子
境界線　互に譲る杭を打つ　旭恒
妥協せぬ男の背筋曲らない　伊津志
妥協してどちらも少うし損をする　白渓子
妥協すると決めたら肩が軽くなり　ふみ
天体ショー宇宙は妥協してくれぬ　可住
すぐ妥協するので心の扉が開かぬ　規不風
仲裁の顔にしぶしぶ妥協する　三千子
妥協した心に嘘の無い笑い　洛酔
妥協してぐっすり眠ることにする　重人
妥協してから男なら迷わない　螢
ありのまま写る鏡に妥協する　白峰
妥協して丸がきれいに見えてくる　森脇和子
妥協するつもりへ死んだ振りをする　雄々
方円の器の水の妥協ぐせ　寿美
妥協してハードル少し高くする　はつ絵
誠実が水と油を妥協させ　本蔭棒
妥協して左手器用になってゆく　高子
一徹の男も女に妥協する　弘朗
墨糸の厳しさ一分へ妥協せぬ　寿恵子
妥協して石の重さを考える　和友

佳

一枚の紙の白さにある妥協　雀踊子
妥協して卵をふたつゆでている　正子
曖昧な妥協してからふさぎがち　美代子
一歩ずつ下がり明日へ手を握る　大柏
妥協して似たもの夫婦になってくる　満津子

人

妥協する歩幅を持たぬ男下駄　公一

地

妥協してどっちも苦い酒を酌み　素身郎

天

妥協したあたりで晴れ間見えてくる　妻子

軸

妥協して余生を歩く花の地図

柳界展望

集録―敏・武庫坊

★第22回岡山県川柳大会
日時　1月10日(日)9時開場
場所　邑久町立中央公民館
（赤穂線邑久駅より7分）
宿題　各題2句〆切11時
「稼ぐ」　板尾　岳人選
「女史」　大森　一甲選
「釘」　加藤きよと選
「包む」　恒弘　衛山選
「首」　西川けんじ選
「匂う」　前田　一石選
席題、特別席題　当日発表
会費　千五百円（発表誌・昼食・参加賞呈）
投句　22センチ×4センチの句箋に一句ずつ記入、五百円を添え左記へ。一月七日必着
〒701-42　岡山県邑久郡邑久町山手一一一六　嘉数幸栄

★札幌川柳社30周年記念「柳画集」募集中!!
全国川柳人でこの事業に賛同くださる方どなたでも。
内容　一人一頁使用、川柳一句に「川柳さっぽろ」の表紙画を描いている清水祐幸氏が絵を添え、18・5×23センチぐらいの特上紙上製本。
参加料一万円
申込先へ参加料と作品三～五句（その中から一句を選んで柳画を掲載）
締切　63年5月10日必着
〒069 江別市文京台46―16　藤谷息民愚宛
参加者にはあなたの原画と柳画集（予価三千円）五冊をお届けする。

★京都塔の会は、十月二十六日、会長・松川杜的氏の路郎賞受賞記念句会を京都府立セツルメントで開催。最優秀句を杜的氏夫人の芳子女史が獲得され重ね重ねのめでたい句会であった。

★湖山駅待合室第5号の宿題「伝言」の投句総数は四四九句と飛躍的な増加。小・中・高・大の学生からも作品が多く寄せられた。

★みかん十二月号に、「人づくり　若本多久志編」と題し、故多久志氏（元本社副理事長）の名語録が紹介されている。

★いずも川柳会は、「尼縁之助主宰出雲市文化奨励賞受賞祝賀川柳大会特集号」を発刊。十月十八日の祝賀会のオモテとウラが紙面に溢れて圧巻!!

★竹原川柳会の「たけはら」誌十二月号は、第35回竹原市総合文化祭参加句会を特集。山内静水選「鉄路集」に百名以上の作品を掲載。新年号からは、小島蘭幸氏が担当される。

★十一月四日、川柳大阪と友好川柳（大交会）が、第二回友好川柳句会を大阪市交通局本局で開催。福島正則氏（元不朽洞会会員）をはじめ川柳大阪の現職とOBが十六名出席した。

★昭和63年岐阜川柳社川柳大会
日時　3月21日(振替休日)
10時　〆切12時
会場　岐阜市文化センター
兼題　各2句　投句拝辞
「微笑」　青木　晴嵐選
「乗る」　内藤　乱選
「情熱」　保地　桂水選
「背中」　石森騎久夫選
「髪」　浅野　滋子選
「新鮮」　酒井　路也選
「つかの間」　加藤　翠谷選

「好調」　亀山　恭太選

事前投句

「気品」　野口　初枝選

事前投句（ハガキ）及び宿泊ご希望の方は、63年2月末日までに左記へ

〒500　岐阜市真砂町7丁目

野口　初枝方

岐阜川柳社（川柳大会係）

会費　千五百円（昼食付）

宿泊　一泊朝食付

四千五百円

▽同人消息△

★石田清泉氏（島根県）は、62年度島根県書道展の「かな文字の部」の一位（銀賞）を受賞。

★橋高薫風氏は、NHK学園刊行「川柳春秋」第七号の川柳人物史に路郎師について執筆。

★東野大八氏（美濃加茂市・相談役）は、柳宴十二月号に「本場漢方薬だんぎ」と題して執筆。

★川柳新聞No.131に、川柳塔九月号所載の「季語」と「句語」＝田中正坊執筆＝が、全文に近い内容で大きく紹介されている。

★児島与呂志氏（和歌山県・参事）は、川柳大阪誌に私の川柳大阪回顧と題して連載中。

★井上白峰氏（大阪市）は、十月八日、環境保健部主催の大阪市健康祭川柳展で「優秀」賞獲得。

趣味の会ライバルがいて老けられず　白峰

★松江番傘十二月号に、「新風土記文芸編川柳」の記事を再録。石垣花子、政岡日枝子、光井玲子の三麗人（本社同人・米子市）が顔写真入りで一頁記事で紹介。

★小西雄々氏（鳥取県・本社参事）は、打吹川柳誌の秀句抄を担当。

▽お便り△

■土橋螢氏（鹿野町みか月川柳会会長・本社理事）十一月十五日の「みか月川柳会結成七周年記念大会」は、和歌山・大阪・岡山・島根からの参加者も含め、百四十名の出席と四十八名の投句者と新記録。不行き届きで御迷惑をおかけしました。皆様の御指導御鞭撻により歩けるようになりました。今後ともよろしく!!

■両川洋々氏（鳥取市・本社理事）

「川柳列車の旅」で十一月七日、八日秋の吉備路と瀬戸内方面に五十名で出掛けて来ました。

■小西雄々氏（鳥取県・本社参事）

物故者供養松露川柳大会は十一月二十三日天候にも恵まれ出席者七十名と盛会でした。川柳塔誌上にも掲載していただき、鳥取県川柳作家協会、川柳塔きゃらぼくに大変お世話になりました。これを機会に一層頑張るよう誓っています。今後共よろしくお願いします。

■安藤寿美子氏（豊中市・本社理事）

ご会葬ありがとうございました。

引き潮に乗ってしずかに母の舟

新同人紹介

松井　かなめ

―栞・薫風・智水庵・千秀推薦

小村　てい子

―日枝子・瑞枝・千代・薫風推薦

白根（しろね）　ふみ

―日枝子・瑞枝・千代・薫風推薦

川柳たけはら

〒725 広島県竹原市竹原町田中
山内静水方

明けましておめでとうございます。
今年もよろしくお願いします。

会長　山内静水
副会長　小島蘭幸
　　時広一路
　　森井菁居
　　古谷節夫
　　石原淑子
　　信本博子
　　藤解静風
　　田村新造
　　岡本清水
　　山内房子
ほか一同

1988頌春

川　柳　大　阪

大阪市交通局互助組合
文化部　川柳部

部長　平井孝始
責任者　山下みつる
事務局　中原比呂志
編集者　高須賀金太

川柳塔社同人

斉藤三十四
児島与呂志
玉置重人
岩井本蔭棒
西岡洛酔
田中笑風
井上喜酔
岡本天平
塩満　敏

川柳大阪　柳人一同

頌　春

富田林富柳会　一同

賀　春

わかあゆ川柳会

島根県大原郡木次町四六一

小砂白汀　森山英子
谷岡芳枝　園山世似
石田清泉　河原恵美子
松本はるみ　渡部悦良
藤原鈴江　吉田笑子
細木歳栄　小田川智重子
細木志保　菅田かつ子
北川民子　松本聖子
田中ヒデ子　大野蒼流
鶴原文子　乾　紫朗

外会員一同

本社　十二月句会

十二月七日(月)午後六時
メンズファッションセンター

本年最後のおはなしは薫風編集長。

十二月を詠んだ川柳といえば昔は暗いイメージのものが多かったが、一億中流の今は、借金苦といったものもなく、切実感が少くなった、と路郎や諸先輩の句を紹介。これは前置きで、ここ一、二ヵ月身辺に起った、ほのぼのとしたエピソードを話され、あたたかい心のつながりを通して川柳という小さな文芸が広がってゆき、そこに「和」が成り立っていると思う、と結ばれた。

今月の月間賞は飯田悦郎氏が獲得。　(S)

(進行—天笑)　(受付—はつ絵・いわゑ)
(記録—射月芳・隆二)

出席者—鬼遊・笛生・〆女・杜的・水客・凡九郎・小路・佳秋・紫香・芳子・萬的・章久・池田寿美子・はつ絵・狸村・千代三・金太・美房・白峰・達子・勝美・満津子・典子(道子改メ)・柳影・重人・柳宏子・白渓子・隆二・眉水・柳右子・柳伸・幸・太茂津・敏好・淳一・美代子・悦郎・おさむ・楓楽・文秋・岳人・作二郎・英子・朱夏・千秀・智子・喜風・いわゑ・東雲・昭子・吸江・頂留子・藤子・外吉・吐来・英壬子・寿子・薫風・正坊・度・三男・寿美・天笑・月子・みつ子・雀踊子・一二三

席題「ねばる」　佐藤藤子選

この人の本音喋る迄ねばり　〆女
五人目にやっと男の児が生まれ　美代子
もう少しねばろう春がすぐそこに　おさむ
逆転の風はねばった方を向く　金太
ばあさんのねばりに負けたもつれ糸　三男
結果どうあれ最後の一分までねばる　度
マイナスになったと思うねばった日　悦郎
三浪の粘りマージャンパチンコ屋　冬葉
じっくりとねばったことがあるノート　智子
どん臭い男にじんわりねばられる　雀踊子
切り札がないからねばるプロポーズ　正坊
ねばってもまけてくれない百貨店　白峰
ねばったが自分の無力知っただけ　楓楽
ねばるだけねばってチョキで勝ちました　杜的
買うまでを玩具売場でねばられる　笛生
先客もまだ貸付けでねばってる　外吉
魂胆があって看板までねばる　射月芳
ねばってるうちに名案ひょいと出る　度
ねばり勝するのはいつも妻の方　柳宏子
どん底で妻のねばりに励まされ　いわゑ
脳みそがねばりはじめた物忘れ　天笑
押し売りのねばり防止に男下駄　白峰
税務署で無駄な弁解ねばってる　美房
ライバルがまだねばってるカウンター　正坊
王将がねばっています負け戦　重人
ねばられて乗った話でした火傷　千秀
母さんへ粘ればたあい無く負ける　芳子
もうちょっとねばりが欲しい男まえ　重人
兄さんが粘るから弟も粘る　柳影
あの粘り雪国育ちとすぐわかる　千秀
とろろ汁ほどのねばりにすがりつき　美房
本当のねばり田舎のつくね芋　柳右子
かあちゃんのねばりに負けたお父さん　隆二
閻魔さんの前でもねばることだろう　智子

昨日からねばり続けている机　智子
もう少しねばりなさいと残り福　典子
火吹竹にねばる心が詰めてある　幸
灰皿があるからねばることにする　作二郎
横綱を苦しめ抜いた土俵際　笛生
欲が出てすこうしねばり出た息子　天笑
冬空になってもねばる木守柿　紫香
ねばる子へ大器晩成信じよう　楓楽
銀杏散る鳩の豆売りねばってる　作二郎
門を外すとねばる風の音　藤子

席題「散歩」　岩内外吉選

犬は犬同士散歩を待ちかねる　美代子
お互いに犬褒め合うている散歩　白渓子
愛犬にまたせがまれている散歩　智子
散歩から帰ると来てた良い便り　藤子
散歩から戻れば妻の置手紙　正坊
散歩から帰ると名刺置いてある　度
味噌汁の匂い散歩が帰る頃　千秀
散歩道茶のみ友達出来そうな　柳宏子
よそさんの花美しい散歩道　重人
散歩道また一軒の家が建ち　紫香
散歩は朝だなんやかや落ちている　眉水
散歩道いつも何かを拾うてくる　満津子
財布拾ってそれから散歩好きになり　史好
妻とする散歩はいつも百貨店　杜的
コーヒーの店がきまっている散歩　重人
陸橋の上から散歩いやになり　太茂津
流れ雲父は散歩に行ったきり　楓楽
散歩したついでたこやき買うて来る　杜的
遮断機が降りて散歩は引返す　眉水
水中花軽い散歩をあこがれる　はつ絵
三味線の爪弾き聞いてきた散歩　朱夏
どこからか第九聞こえてくる散歩　幸
偶然に散歩事件に巻き込まれ　はつ絵
灯台を見て来て散歩引き返す　作二郎
負けぐせがついて散歩に出てしまう　水客
お邸の表札替っていた散歩　朱夏
散歩してきますブーツを買ったので　幸
亡父のいる方へ散歩をし始める　金太
パチンコ屋の開店待っている散歩　規不風
散歩でもして来なはれと邪魔な暮れ　佳秋
やむを得ず散歩をしてる粗大ゴミ　射月芳
散歩しながらふと蒸発を考える　幸
いつもの女といつものとこで逢う散歩　度
散歩道未だ声かけられぬ人に会う　美房
公園に刺激求める夜の散歩　白峰
幸福を拾うて来ました夜の散歩　柳影
君となら散歩コースを変えてみる　冬葉
柿の枯葉が母の散歩を遅らせる　作二郎
雨ふっている日の散歩疑われ　天笑
未亡人になられた家を見て散歩　外吉

兼題「錯覚」　高須賀金太選

あの夜は錯覚だったとはいえず　外吉
あの時は錯覚だったか妻の顔　杜的
錯覚をおこした夜は妻も美女　千代三
錯覚をして大胆に手を握り　紫香
愛情と錯覚させた罪深さ　美緒
肩書がする錯覚は赦されず　白渓子
錯覚が彼を詩人に仕立ててる　達子
老人の錯覚にしてけりがつく　妻子
竹槍で勝つと信じた時もある　佳秋
錯覚へとてもきびしい改札機　柳伸
錯覚のままいちにちが動き出し　天笑
Cカップの胸に錯覚まろく溶け　寿子
錯覚だったといまさら明かすことはない　年代
錯覚がかさなり愛が深くなる　武庫坊
信号の錯覚だったでは困る　妻子
錯覚の恋もあろうか喫茶店　敏
錯覚はときどきするが呆けてない　白渓子
思い違いと分った時は遅かった　柳影
味方だと錯覚をした聞き上手　楓楽
にこやかな笑顔に錯覚せぬように　重人

62年月間賞杯永久保持
西山 幸さんに決る

62年本社句会月間賞の受賞者は1月＝楓楽、2月＝水客、3月＝幸、4月＝律子、5月＝吐来、6月＝寿美、7月＝かず枝、8月＝千代三、9月＝藤子、10月＝幸、11月＝泰子、12月＝悦郎

この結果、2回獲得の西山幸さんが永久保持者と決りました。

酔眼の錯覚隣の戸を叩く　白峰
地下鉄を出て錯覚の風当り　小路
肩書がつくと錯覚してしまう　射月芳
錯覚と気付いていないから困る　美代子
錯覚であろうと愛を信じ切る　博子
酔えそうもない錯覚にしておこう　小路
豊かさを錯覚してるうさぎたち　鬼遊
乱立のビル錯覚を笑うまい　柳伸
錯覚を確かめている老眼鏡　典子
錯覚は曇り眼鏡のせいだろう　幸
迫真で迫る錯覚とは知らず　おさむ
錯覚のままで解けないもつれ糸　諷云児
錯覚とも知らず逃げ水追いつづけ　みつ子
戦争に勝つ錯覚がまだ残る　規不風
メロドラマの錯覚のまま葱きざむ　いわゑ
スペアキー貰い錯覚してしまう　はつ絵
錯覚のなかで不倫の花が咲く　年代
錯覚と誤解で積んだ砂の塔　楓楽
錯覚はあの娘の持っていた詩集　幸一
錯覚もあって結べた赤い糸　楓楽
生きていることが錯覚かも知れぬ　金太

兼題「狸」　吉岡美房選

腹つづみ打つ丘狸また追われ　笛生
瓜二つ信楽で見る亡父の顔　佳秋
人間に化かされそうな狸増え　柳宏子
電卓は狸専務を知っている　しげお
老練な狸平気で人を喰う　楓楽
夫婦にも狸ごっこの日があろう　幸
お互いに狸を意識して坐り　白渓子
狸汁にされた悪夢にうなされる　芳子
手鏡に写る狸の自尊心　冬葉
街角でひょいと狸とすれ違う　智子
家康が好きで友だち出来にくい　外吉
満月の狸囃子に加わろう　おさむ
狸寝の背中に布団かけられる　紫香
狐から見ると狸はお人好し　外吉
思い直して狸の群に仲間入り　寿子
狸寝に聞こえるように言うておく　千秀
女狐と狸でうまくやってます　天笑
泥舟に乗った狸を嘲えるか　楓楽
信楽の狸のうつはまだ消えず　柳影
図に乗った狸が尻尾踏まれてる　寿子
満月に老いても狸血が騒ぐ　はつ絵
虫喰いの葉っぱは金にせぬ狸　英壬子
信楽の狸も相合傘の顔　小路
子狸の少女に化けるとは限らない　杜的
刑務所の塀を歩いている狸　しげお
狸とも言われ大物とも言われ　正坊
時として狸にもなり丸く住む　達子
俺よりもタヌキと刑事身構える　天笑
狸にも騙す訳あり十二月　岳人
信楽の狸が笑う青い夜　どんたく
狸寝をしてはおれないいい話　隆二
信楽で豆狸が風邪を引いている　英壬子
程のよいあなたに狸の臭いする　外吉
強い円持って狸も海外へ　史好
ヒゲを生やした狸が人をこき使う　鬼遊
腹鼓打たぬ狸で隙がない　武庫坊
夜遊びの好きな狸に秋が来る　〆女
狸寝入りのそばでメロンを切っている　英子
イソップの童話に狸でてこない　度
淋しいと素直に言えぬ古狸　太茂津
ぬれぎぬを狸は月へ訴える　どんたく
狸にも化けねばならぬ辛い過去　美房

兼題「化粧」　塩満敏選

家計簿に防衛費なみの化粧品　杜的
判決を聞く朝化粧も念入りに　典子
午後一時電話を待っている化粧　外吉
アトリエの窓化粧する蔦もみじ　みつ子
濃化粧私の顔はどこ行った　満津子

62年本社句会全出席者

宮園射月芳・西口いわえ・上田佳秋・北勝美・桑原喜風・山本規不風・高杉鬼遊・笑原吸江・玉置重人・寺井東雲・岩本雀踊子・川原章久・田中正坊・池田寿美子・板尾岳人・野村太茂津・河内月子・宮口笛生・藤田頂留子・稲葉冬葉・松川杜的・榎本吐来・井上白峰・辻白渓子・松原寿子・吉岡美房・川島諷云児・西出楓楽・佐藤藤子・金井文秋・神谷凡九郎・阿萬萬的・堀端三男・高田美代子・上田柳影・芳地狸村・西田柳宏子　（37名）

吉報の肌にクリームよくのびる　重人
化粧せぬ日も美しい雪おんな　千代三
化粧した妻今日いち日はとがめない　悦郎
化粧して少女がいつか蝶になる　〆女
雪化粧山は男を狂わせる　一二三
高い方ばかりが売れる化粧品　正坊
寝化粧を月の光にのぞかれる　みつ子
化粧品の方が多分あきれてはるでしょう　凡九郎
お化粧を落した顔が美しい　美代子
鏡見てアンタも化粧しやはるノ　凡九郎
いつからか妻が化粧をしなくなり　笛生
化粧した女が歴史塗り変える　武庫坊
インターホーン化粧どころかまだパジャマ　小路
飼猫も呆れて見てる厚化粧　紫香
ファンから化粧まわしにカメハメハ　東雲
初化粧女のいくさ始まりぬ　いわゑ
女ですリ紅だけは持って出る　紫香
化粧びんへ野菊を生ける台所　博子
化粧下幸せうすき肌と知る　水客
ラブレター恋という字が化粧する　〆女
会いに行く化粧と鏡知っている　吐来
長女次女三女と違う化粧品　悦郎
恋人がかわり化粧もまた変り　楓楽
真剣にパフ叩いてる丸い鼻　重人
戦場へ出向く男の化粧品　佳秋
これっきり逢わぬつもりの紅をさす　朱夏
時差ぼけの顔ポンポンパフで叩いとく　水客
ジーンズが似合う女のへちま水　鬼遊
化粧する生命線の長い手で　緑良
化粧する代りにショパン聞いている　みつ子
寝化粧は別の男へとっておく　朱夏
大阪へ着いたら剝げていた化粧　英子
くすり指拭いてお化粧出来上り　天笑
三途の川渡る化粧はねんごろに　三男
魚鳥木女も男も化粧する　敏

兼題「終り」　高杉鬼遊選

お祭りが終って元の過疎の村　美代子
大晦日今年も無事の社会鍋　柳右子
子育てをやっと終れば孫のもり　白峰
長電話鍋焦げるまで終らない　幸一
鶴を折る恋が終りになりそうで　いわゑ
世話役が宴の終りを待っている　敏
この恋は終りと思う花時計　度
秋の終りを告げる大和の木守柿　萬的
終り迄言えずに帰る欲しい金　章久
終りまで観せてくれないお呼び出し　小路
お伽噺が終ると眠くなってくる　智子
反抗期ぼつぼつ終る子を見てる　水客
最終のレースを見てる小銭入れ　佳秋
パトロンも円高潮どきと思う　外吉
この恋も終りにしょう爪を切る　佳秋
ラストまで踊りしっぽく食いにゆく　三男
終る日をふと考えている時計　智子
借金を返す雪崩の終る朝　はつ絵
カラオケの終りはちゃんと手を叩く　柳伸
勝っているから終りにはしてくれぬ　柳影
はしご酒終りはどこでどうなった　柳影

市川鈴魚
〒502 岐阜市旦島西町一丁目21
電話0582(31)0283

会葬が終り喫茶で競馬見る　白渓子
ローン終る家の明かりが本物だ　はつ絵
私が死んだらきれいな星になる　〆女
一年のけじめがつかぬまま終る　年代
終りまで聞くと傷つく人が居る　白渓子
平凡な夫婦のすする晦日そば　いわゑ
渚仏に祈りを終えて海女潜る　作二郎
世も終りならん男が産室に　史好
死んだらしまいそうはさせてくれないョ　凡九郎
訣れましょうもう奥サマに知れる頃　外吉
雪もよい愛は終りを告げている　金太
自作自演幕も私がおろします　雀踊子
生きている限り喜劇は終らない　楓楽
人生の終りは菊の匂いする　岳人
干大根母の今年も無事終る　作二郎
いくさ終って次の戦にとりかかる　天笑
ジャンプ傘一つの恋が今終る　年代
ねずみとり今日はあなたでおわりです　天笑
臨終へ独りひとりの天がある　悦郎
葬儀屋へ誰が電話をしてくれる　鬼遊

（清記・楓楽）

老地柳壇

締切毎月25日。必ず原稿用紙使用のこと。
作品は雅号も含めて20字まで。
担当・玉置重人

川柳ねやがわ　高田　博泉報

波紋なげ知らぬふりして友は去る　智　美
売上げも伸びて社長の髭づくり　高　雄
夜の蝶主婦も器用にこなしきる　山　久
お裾分け失礼ながら値踏みする　曲ん手
主婦の友読んだ昔もある懐古　勝　美
嫁った娘の部屋の広さに妻と佇つ　良　三
招待券三枚も来る文化の日　頂留子
ストレスを一気に弾く鳳仙花　杜　的
専務派に付いた波紋と知る辞令　創　吾
けちのつく一日けちを持ち歩く　朱　美
養護学校まだ静かなり明けきらぬ　吉　峰
主婦の座に自由が欲しい子沢山　紫　香
放浪の画家が忘れた童唄　咆　煌
紅のいろ少し濃くして秋深し　紀　代
自転車をとめて百円玉拾い　さかえ
カルチャーとエアロビクスと主婦多忙　千鶴子
自転車に孫の初乗り目を細め　増　造
流し目の波紋大きな波となり　なつめ
やせ松茸値札の蔭に身を縮め　権　太
バス停を降り主婦の顔とり戻す　おさむ
天皇にメス医師団の勇気あっぱれ　とし
定年でやっと治った胃のいたみ　波留吉
諸々の音が気になる主婦の風邪　菜　月
お見舞いを忘れてはしゃぐ四人部屋　藍　子
中心で指揮棒をふる水すまし　君　子
ほくそ笑んで波紋拡がるのを見てる　あやめ
冷飯があれば何んとか主婦の知恵　かすみ
サイクリング末の娘の輪に合わし　シマ子
爽やかにニュースキャスター四季を着る　速　水
停年にもう用おへん花名刺　一　途
自転車を駅に残してコップ酒　晴　風
会葬の列に屋台の顔見知り　章
塩加減主婦の確かな目分量　光　子
極楽の法話に足がしびれだす　勝　一
放浪のはてに女がついて来た　てまり
ペダル踏む主婦は十円安を追う　冬　葉
けんかした朝自転車がパンクする　鉱　平
気が急いているのにゆっくり物を言う　博　泉
主婦として図太く値切るたたき売り　三千子
主婦業は年中無休の旗を立て　吉之助
放置自転車に容赦なく叩く雨　亜　成
主婦達者体温計が見つからぬ　礫
詰将棋考えながら見る月見　亜　鈍
レンタサイクル押して嵯峨野の秋の道　萬　的
自転車のお蔭と律義の日々勤め　覚然坊
自転車を止めて話題も久し振り　小　路
放浪の旅にも温い陽の光　柳宏子

駒つなぎ川柳会　里　小路報

ありがとうギャルに貰ったプレゼント　英　子
寝たきりに欠かさぬ孫の三分粥　あおい
心電図じっくり明日を考える　正　一
じっくりと正倉院に見るロマン　善　信
趣味の輪で札束を読むバカがいる　国　公
暴薬効かす都会の綱渡り　章　久
雑踏へ孤独を捨てに行く都会　隆　二
定員突破事故を気にする主催側　覚然坊
わんこそば記録突破に愛芽ばえ　喜代治
前夜祭明日の突破を信じ合う　曲ん手
妻の背へいつも無言でありがとう　素　灯
機械化がじっくり型に肩叩き　悟　郎
じっくりと思わくも良し秋夜長　しんじ
高尚な趣味と上司を持ち上げる　庸　佑
夜の都会化物が出る魔女が出る　眉　水
都会にも自由がなかった洗面器　雀踊子
都会で生きて一日一度雲を見る　十　歩
突破口探す二人の嫌怠期　新　造
死線突破青空仰ぐ試歩の日々　真　砂
俗気を突破山の霊気を身に浴びる　勝　美
ありがとう先に言われて口ごもり　幸　治
じっくりと勘定書を確かめる　恒　明
じっくりと舌に転がす秋の酒　章
競走をするとしんどい趣味となる　度
つき合いが上手で浅く広い趣味　文　秋
盛り場の死角で傷を癒し合う　重　人
女一人指さす人もない都会　寿　人
バイブルに見つけた生きる突破口　博　子
突破したノルマに女傑茶を点てる　柳右子
ちぎり絵の机は秋の陽に和む　作二郎
趣味に熱入れて課長を又逃がし　頂留子
お隣のくしゃみきこえてくる都会　美津枝
じっくりと見れば妻にも良いところ　冬　葉
じっくりと考え込んでいて無策　千代三

商魂は買わぬ客にもありがとう　射月芳
B面の趣味は釣書に書いてない　甘平
じっくりと読む気でベストセラー買う　翠公
ありがとうの母は心の杖もらう　英一
たかが趣味されどお世話に疲れ果て　律子
じっくりと聖書を秋の部屋で読む　浩一郎
突破口探す駄洒落が絵にならず　萬的
都会には都会の顔があってよし　美幸
騒音に馴れて都会が抜けだせぬ　柳伸
気の強い女で突破出来ぬ溝　小路

翠洋会　中西兼治郎報

職業欄無職で老いははばからず　兼治郎
職場からラジオ体操朝の顔　為子
鳥渡る頃に毎とし来るたより　春子
叱った娘の部屋のあかりが未だつかぬ　君子
職場では偉いあなたも子供なみ　良江
頬を打つ父も涙の顔をする　照子
勘定書残して女去って行く　佳秋
みの虫に母の小言を思い出す　宏子
お茶時を屋根職人も降りてくる　東雲
勘定を取りたてにきた京言葉　光子
貴賤ないとは言え職をかくしとく　綾子
脱サラのうどん屋鉢に凝りすぎる　みつ子
ラブレター見て淋しさをまぎらわす　登志実
おもちゃ屋がごねる子供をおがんでる　いつを
かみ合わぬ求人欄と職探し　眉水
西成の消し印があり生きている　鬼遊

堺川柳会　河内　月子報

熱のない返事で答出ています　小雪
餌を狙う雀へ犬は見ないふり　半銭
ただ祈る以外に何もしてやれず　かりん
年金で口紅一つ選っている　春香
人間の根を地上げ屋にさらわれる　彗梢
食前の祈りをせかす腹の虫　れい
解熱剤赤いハートに効き目なし　楓
年金を貰う程まだ弱ってない　東雲
デパートの熱気なるほど十二月　千万子
この街が好きでどっしり根を下す　紀美女
年金が気ままな旅行プラン立て　博子
根回しの利いた拍手とも言えず　妻子
男なら一度は狙うでかい椅子　新造
異土に老い祖国よ年金ありがとう　秋風
刑事の目スリの目財布は一つなり　曲ん手
年金の暮しに馴れた父の背　凡子
年金などどこ吹く風と鍬をふる　頂留子
登校拒否ときどき高い熱を出す　道女
出稼ぎの夫の無事を祈る妻　信博
狙ったくじ下の桁からはずれてる　純枝
安住の地を地上げ屋に狙われる　素灯
絵馬堂で祈る花子の恋の絵馬　金三郎
捨て猫の箱お守りが入れてある　たつお
年金にしてはたいそな暮しぶり　芳子
熱っぽいまなこでそない見られても　甘平
熱さめて恋の渦中を遠ざかる　真柳

川柳泉尾　吉川　寿美報

絡む糸ゆっくり解こう明日がある　和子
全身を食欲にして秋の旅　シメ子
満月に狸囃子も聞こえそう　三世
大空へ自分を暗示にかけてみる　三千代
柿すだち秋たっぷりと市場竈　トミ子
みだれ髪ひやかさないでお月さま　美代子
ビールから熱燗にかわる肌寒さ　文子
可愛さにカルガモ葉書ひょいと買う　満州子
さりげなく帆を下ろしてる才女です　はつ子
僕は中大きなジョッキは彼女です　伴子
ライバルに負けるな靴を光らせる　敏
めぐり逢う縁に飾る夫婦雛　美子
四国路は遍路の列の風物詩　敦子
食べたい気にさせる写真の味めぐり　素子
思い出の二人の季節めぐりくる　途子
めぐり来た実りの秋のマンジュシャゲ　清子
城崎の七湯めぐりのお湯にとけ　淑子
言葉使いいつもソフトがここちよい　美奈子
秋の夜のソフトムードのおつきあい　義一

川柳泉尾　吉川　寿美報

ゲンコツもソフトな言葉で宙に浮き　昭子
娘でも嫁いでしまえばよその人　悦子
よその花刺の痛さがわからない　弘子
よそよそしいウソも許せる時もある　二三
余所見して人生時々けつまずき　シマ子
叡山をめぐる行者は霧に消え　白水
赤い花男はすぐに余所見する　寿美

尼崎おはま句会　上田　佳秋報

札束で頬叩かれて黒い判　貞男
子の部屋を作りノックをさせられる　定人
主席ではないが五本の指にいる　歌子
風邪ひいて尻を叩かれ医者通い　いわを
性急な妻にお尻を叩かれる　夢之助
娘と住んでうるさいながら平和です　江美
母からの賀状は何時も和の一字　昌子
母にだけ伝えておこう好きな人　よしつぐ
問題を出して教師は外を見る　敏之
問題を笑顔でほぐす姑と住む　弘治

問題の女が遂に夜逃げする　保　蔵
木曽谷は心の旅路霧が舞う　清　太
三等賞キャベツぶらさげ運動会　寅之助
友達がまた聞き返すマンション名　た　か
ミンク着て兎小屋からお出ましだ　貞　吉
寝つかれず落葉さらさら夫を待つ　向　西
恵まれた友と旅する秋の宿　十四郎
ぶぶ漬けが好きで京から抜けられぬ　佳　秋
天婦羅を揚げると電話のベルがなる　武庫坊
横着なオウムで聞えぬふりをする　す　み
嫁貰う話へお茶を入れ変える　紫　香

尼崎いくしま句会　上田　佳秋報

秋の序曲景色の中の白い石　和　友
片意地な石だが情けにすぐ流れ　伊三郎
燃えつきた男の石は軽くなる　正　一
つまずいた石と話がしたくなり　いわゑ
釜茹での蟹が這い出す温泉の町　水　声
電気釜祖母はお焦げを恋しがり　曲人手
用意する産湯大きな釜で沸く　白渓子
食べ終えた釜も土産に旅終る　(河)芳　子
チラシには旨いと書いていなかった　ときお
広告塔夜空で招く旅の街　貞　子
広告で正札以下で買いました　かね子
広告の中の暗示に負けてくる　静　夢
広告を信じてからの不幸せ　伊　升
新聞の隅で帰れと呼んでいる　はつ絵
折り込みの広告近所が売りに出し　定　人
幼な子がお百度踏んで祈ってる　保　蔵
逆縁に祈りがながい老母の数珠　かすみ
晩年の母の日課は祈ること　一　郎
鈴鳴らす祈り素顔のわたしです　佳　秋
人の命を祈りつづけて枯葉舞う　年　代
役おりてからの歩幅が軽くなる　美智子
役するといよいよ自分判らない　凡九郎
ひと役が済んだコーヒのうまいこと　紫　香
役を持ち役に振り回されている　英　子
聞き流すことが出来ない地獄耳　諷云児
嫁に来て「オイ」という名に変えられる　みち子
風車素直に回る風を待つ　(松)芳　子
知ってからひとりよがりをふと恥じる　嘉　矩
宅地広告駅を目玉に引き寄せる　園　歩
わが庭の菊にためらう花鋏　春　子
赤色の好きな男で気が弱い　郁　栄
シャッターチャンス赤いトンボ今止まる　杜　的
書添えるラストの文字に愛を知る　〆　女
聞き上手な少女の長い髪の艶　萬　的
秋のひとりが鯛焼に並んでいる　作二郎
いい旅の終りに覗く丸い月　歌　子

西宮北口川柳会　松本　一郎報

母さんを出せとは無心の話らし　柳　影
母の櫛哀しいまでの深い艶　恵美子
足して二で割ったような子が生まれ　杜　的
独身の引越し本の荷が嵩む　白渓子
旅馴れて女平気な露天風呂　みち子
片方が無口で丁度よい夫婦　園　歩
円高も株価も用のない暮らし　柳　伸
姫いつも孤独でマンガ読んでいる　青　珠
異人墓地の隅から秋が深くなる　光　代
富士登頂五合目までは歌が出る　柳右子
湯上りのまんざらでない鏡見る　千津子
一芸に秀で頑固な父の首　いわゑ
招待で酒を飲むのも芸のうち　保　蔵
木登りの下手なお猿で毛が多い　武庫坊
人寄せが芸なら猿に負けるなョ　凡九郎
両の手を心が晴れるまで洗う　美智子
選ばれて平気でうそを言う議員　よし津
芸のない息子が連れて来た娘　て　る
あんぱんとミルクで済ますひとり言　年　代
六十路坂楽しく登る輪の中に　英　子
秋夜長昔のジャケツ編みなおす　陽露子
父さんが逝って姫りんごも枯れた　(河)芳　子
深く根を下ろして草の冬仕度　笑　女
学芸会孫を主役に見て帰り　(松)芳　子
宴会で見られぬ芸を教えられ　江　美
登山帽今年も婚期また延びる　佳　秋
還暦の不倫は橋の手前まで　しげお

佳句地10選（前月号から）

吉岡　きみえ　選

クモの巣の真ん中にある殺意　雀踊子
蟻の列ひととき塾を忘れさせ　英　子
座布団の端に座って詫びを入れ　紫　香
旅先で出会う訛りで飲みなおし　正　朗
まる優で静かに枯れてゆく夫婦　忠　雄
原宿へ恋の切符を買いに行く　ちかし
敵一人つくって心冬となる　百合枝
太陽の指輪をのぞく煤ガラス　美津子
母の手の温もりダイヤにも勝り　真　砂
菊人形明日は他人になるふたり　百　子

雑巾を手まめに乾している嫁御　伊三郎
登りつめ孤独に堪える回り椅子　よ志子
貧しくても平気茶の間はあたたかい　静子
末席の男が目立つ芸達者　一郎
クレオン画平気で母を鬼にする　正一
握手する右手が平気で嘘を言い　房子
借りている方が平気な顔でいる　諷云児
姫様が美人ばかりと限らない　定人
寺の裏和尚の越中干してある　眉水
ふるさとのポスト安定感がある　水声
姫だるま人を痛めたことがない　天樹
寝たきりの母の平気に背を押され　美幸
トランプ占いクイーンがいつも邪魔をする　みつ子
屋根瓦雀にもある居住権　ノブ
姫言葉消えて女が自立する　曲ん手
一姫がやんちゃで二太郎萎縮する　千秀
お姫様下町のガキと仲がいい　芳仙
下積みの大根いつも塩を噛み　御前
絵日傘をさしたら姫に見えますか　良征
女系家族で乳房八つも干してある　米朝
峠まで磯の匂いを提げてゆく　荒介
人形が見ない振りしている涙　博子
どう髭を生やしてみても凡人だ　茂雄
さわやかに騒ぐ退院のその朝　市雄
病む床に六甲縦走勇気づけ　千世子
そばの花祖母の自慢の遠い味　紫春
花束を夫に捧げてから死のう　善太郎
人間になってしまった犬と住む　高子
混んでても座席に荷物知らぬ顔　六郎太
五十年生きても平気の難しさ　森生
電車に押されてソロバン落着けず　文夫
ロボットになると平気で嘘をつく　保
踏まれても平気雑草に生まれつき　正坊
宿命を角い芸人の子に生まれ　紫香

高槻川柳サークル卯の花　河瀬芳子報

ボール箱仔猫が顔を出している　彰一
未決箱飲み屋のつけをためている　一郎
退屈な指宝石箱を買っている　百合子
釣銭入れになったアルミの弁当箱　萬的
ひとまずはしまって捨てる空の箱　章
おもちゃ箱鬼が覗くと軽くなる　如洲
何て哀しいジョークが詰まる玉手箱　(河)芳子
箱に折鶴少女二〇一号室で病む　作二郎
上品に見て楽します京料理　逸
上品な顔と心は一致せず　暢子
上品ぶっているとたちまち肩が凝る　スミ子
上品な手口を刑事見逃さず　陽露子
客筋が上品過ぎて騒げない　諷云児
世を捨てて世の塵を掃く品の良さ　秀男
子供心に九條武子の品の良さ　年代
上品の蝶々で止まらぬ曼珠沙華　杜的
上品な女の嘘が胃にたまる　〆女
裏切りを予想して手を打っておき　武茂
象使い象を裏切ったりしない　恵美子
裏切りの鍵郵便受けへ入れて出る　花代子
裏切った人棲む窓を見上げても　礫
遠い日の裏切り今はなつかしく　栄
少し待たせて女裏切る切符買う　和友
裏切った島でも墓を建ててくれ　紫香
今ならば裏切り許せる気の弱り　光代
ガン告知微妙な医師の顔と合い　房子
松茸を食べに電車で娘の家へ　多賀子
金環食吸い込むような口をあけ　春風
中の下も味覚の旅に出る貯金　栄子
すねる気のまだ残ってる古稀の母　悦子
産土の大蛇が生きる祭笛　静江
ダイエット不倫財テク主婦多忙　景治
それなりに良妻だった黒リボン　とおる
出る幕でないが少々気にかかる　よ志子
ステップの輪に一人だけ乗り遅れ　節子
再就職もう諦めた靴の減り　佳秋
夫婦茶碗何時も私の方が欠け　(松)芳子
古い芸だと言われたくない皿廻し　信子
コスモスは風を憎いと思わない　鬼遊

大原川柳社　小林妻子報

ペンダントだった夫の旅帰り　みづえ
古里の瀬音と思う旅の宿　宮子
彼岸花咲いて天国空想し　辰子
退院の試歩へコスモスおじぎする　やよい
総裁戦遠く聞いてる老夫婦　朝代
老いわかば老のたのしき道をよる　元江
日曜日きっちり休む弁当箱　妻子
北の旅母を待ってた子の笑顔　悦子
自転車が我が者顔の登下校　美代子
姿見に文句つけてる六十歳　巴子
コンバイン日曜の音せき立てる　喜美子
受刑の身網走の風冷たすぎ　敏子
三世代いて幸せな日々に足り　こふゆ
伝統を守り継がれて秋祭り　睦子
赤い糸つなぎつながれ夫婦坂　みさえ
空想の中で歩いた車椅子　寿恵子
一徹の母黙々と土愛す　正子
まとまらぬ話に鍋の底がこげ　あすなろ

成果なき肩書連ね碑文見る　直二
幸せの鍵をさがしに大空へ　理恵
空想がとても楽しいネグリジェ　耕花

三幸川柳教室　桜井　千秀報

夕焼けに轍はためく村おこし　良子
夕焼けへ飛び込んでゆくホームラン　正一
夕焼けが燃えつきネオン甦る　高夫
出遅れて明日へ夕焼け道急ぐ　靖子
夕焼けのように終熄飾りたし　愛子
夕焼けがすっぽり包んだ過疎の村　孝代
夕焼けにカナカナ蟬が鳴き残る　力
山寺の鐘に夕焼け溶けてゆく　正
横文字のサイン信じる外はない　千秀
弱点を隠す鎧が重すぎる　三千子
弱点を包む風呂敷妻が持ち　金一
吠えるから弱点ポロリころげ出る　隆行
弱点を逆手男はたじろがず　鉄治
弱点に蓋をするから破裂する　保
一も二も強気酒には弱い人　千枝子
弱点と見せて上手にかわされる　カツミ
弱点を四人のチーム助け合い　当代
弱点と知って数字で攻めて来る　孝子
弱点は老母の涙と子の寝顔　和子
末席に弱味握った奴がいる　智水庵
離れすむ子におくる米白く搗く　千香子
鎖から離れて犬はまりのよう　幸子
帰る頃寒いだろうなエアメール　敬子
若者が離れた土地が痩せてゆく　育子
一期一会明日はどんな人にあう　朱夏
離れてく影は追わない父の部屋　茜
定年でスーパーめぐり趣味となる　一郎
売り出しに母もひと役買ってくれ　澄子
スーパーへ本を持参で付合いし　忠昭
タイムバーゲン鬼面となったマーケット　み　ね
スーパーのまき餌鯉ども口をあけ　重次
スーパーのチラシベッドで鶴を折る　桂香

川柳化粧櫓　植村客遊子報

口下手な夫の祝辞肩がこり　大鷹
地球儀の此処等あたりは生地獄　岳詩
ぜいたくが自滅の穴を掘りに来る　越山
腕白の孫来る度に鉢を割り　秋月
公然の秘密別れた母に逢う　白李
貝割菜さあお前らの出番だよ　葉香
釣針を呑まされている顔が寄り　紅月
喫茶店ポケットベルがけたたまし　礎石
公立が受かり親孝行したつもり　悲子
色づいた段だん畠のみかん恋う　とし
独居のうさを晴らして唄うたう　みつこ
一言がハート摑んで玉の輿　輝月
隠し事出来ない秋の碧い空　サワ子
敵視する人を許して秋桜　遊光
胃に溜る憂さは溶けない消化剤　遊峰
嫁の留守茶漬で済ます昼の膳　みね子
死ぬまでは生きると老友は怪気炎　永楽
せがまれた指切りへ買うプラモデル　瑞穂
明日炊く小豆が煮えて妻早寝　客遊子

久世川柳クラブ　二宗　吟平報

夢を抱く男は後を振り向かず　つた子
選る事を知らぬ男の市場篭　千代女
丸い背休む暇なく又産れ　英子
我武者羅に生きて女の帯を締め　江山
受けとめて老いは手向う矢を持たず　さわ恵
針金の痛みに耐えて鉢の松　ふさえ
日給がいたい週休二日制　静香
薄の穂みんな並んで北へ向く　あき子
傘だけが歩いている様な幼稚園　雅紅
騒がして蛙鳴きだし傘を持ち　秀香
天気図に明日の旅行指南され　種子
白紙にも秘密が潜むあぶり出し　半仙
清書する呼吸ととのえ白い紙　美恵子
良心が睨めど怖くない白紙　志重
欠席の白紙委任に策を秘め　楽山
運のよい白紙万円札となり　吟平
では白紙と言うは安いが潜む悔い　勝子
白紙一任あなたまかせで結果待ち　旭泉
白紙には戻してみても残るしみ　甫正
戻るなら過去を白紙にもどしたい　知代子
先の事聞くまい白紙胸に入れ　虞人
あの人ならみんな白紙で任しとこう　定山
白紙には出来ぬ余生のこのドラマ　山人
出直そう白紙にもどし一歩から　光水
ごたごたを白紙に戻し美味い酒　禅心
未来像若い二人が画く白紙　保恒
白紙から貴方好みの色に染む　伊久栄
じゃんけんに負けて爺ちゃん馬になり　あや子
じゃんけんに負けて来たかと閻魔いい　邦人
酒やめて友一人減り二人減り　賛平

川柳藤井寺　赤木　和子報

ダイエットする身に辛い秋になり　志洋
一すじの道まっすぐに靴がへる　つやこ
ピンセット明日の幸せ挟みたい　ときお
ピンセット無い才能はつまめない　スミ
飲むだけの友達だった帰り道　きよし

老化へのたたかいルンバでも踊ろ　喜道
ミニチュアを器用に入れるピンセット　かな女
山の辺に古代文化の匂う道　三郎
夜長には読むより飲みたい眠りたい　選者
娘の口を大きく開かすピンセット　作秀
ピンセットで選ばれたような縁結び　昭子
逃げ道を使い果して猫を噛む　美代子
打ちあけるチャンスに月が明るすぎ　美房
直線の道に田畑がちょん切られ　本蔭棒
つかの間の風に遊ばれ落葉舞う　与呂志
道一杯におばさん達の笑い声　伴子
秋深く独眼龍も菊衣　婦美枝
野仏に赤のエプロンよく似合う　正人
横綱の弟子に逃げられ綱さみし　祐二
ご臨終へ家政婦次へ荷を纏め　繁男
ピンセット白衣の匂いまだ残り　うめ
傷口の心やさしいピンセット　末一
ビルの谷秋来ぬと誰も驚かず　みのる
電柱があるから道もついている　美佐
露草の紫色濃く恋終わる　彩
墓の道コスモス揺れて白い風　和美
この道を一筋道化演じ切り　雅美
行く年の愉しい余生であってほし　清子
人の世は自分と他人の別れ道　初枝
かくしても病名知ってるピンセット　清心
美しい夢が音にもなるポスト　ふゆ
いらだちを蹴った石から笑われる　治子
秋の風そよげば何か落ちる音　正枝
女房の機嫌がわかる手弁当　とつを
光熱費切り詰め税に吸い取られ　敦子
駅弁の楽しみ消えた新幹線　秀伸
山田では弁当食べるめおとだけ　秋園
弁当は孫にもたせてくれた嫁　幾
傷跡は残る白紙に戻しても　和子

川柳ささやま　脇田　米朝報

稲穂の波乗って聞える祭り笛　ゆう也
松茸が出ておまつりのはずみつき　ひか平
祭りの灯さけて二人に星が降る　可住
お神輿もタイヤに乗った過疎の村　エキオ
お祭へ嫁いだ娘も来る母の味　素水
母の文字二度三度読む下宿の灯　百合子
民宿の訛りが囲む温い鍋　テル
丹前になって落ちつく旅のお茶　越山
交際が好きな財布で痩せている　米朝
家計簿にどっかと座る交際費　文平
交際の義理を包んだのし袋　やよい
交際が下手でも温い友に酔う　靖子
肩書を取れば約束知らんふり　とみ子
約束を破った蝶が奇麗すぎ　法斉

静岡市川柳塔同好会　永倉　僕川報

露天風呂羅漢の顔が勢ぞろい　弧秀
澄んだ目の孫に約束なじられる　金吾
松茸を買物籠の上に乗せ　紀代志
母にだけ夫を自慢して帰り　ゆたか
煙草好き肩身のせまい席ばかり　定次
疑った耳へ嬉しいいい便り　やす
白髪に赤いセーター良く似合う　たま
外聞も気にかけず着る一張羅　たき
約束は無理にも言えぬ義理もあり　志げ
急ぐでもないが躓く癖がある　千代
知識欲まだ少しある七十七　つね
針の穴くぐった糸もほっとする　きん
親友を疑う心胸をつく　き
疑いのまなこで見るは悪い癖　ぬ
お隣と無駄な話で信じ合い　まつる
疑うこと知らぬ育ちのお人好し　み
看板に偽り多し花言葉　つ
癌という疑い晴れた青い空　孝平
人生の迷路トンネル解らない　静代
　　佐川川柳　赤川　菊野報
気まぐれに始めた趣味に生かされる　喜平
気紛れな天気きになる露天商　僕川
気まぐれな女待ってるバーの椅子　恒子
反応を試されているとも知らず　憲一
手応えは太いと思うウキが引き　美智子
反応で手前勝手な票を読み　天花
拒絶反応なくて手術の医師安堵　節子
反応が見えず撒餌がおしくなり　和興
反応がまだ現れぬラブコール　十面子
反応はないがやっぱり好きな人　功

京都塔の会　松川　杜的報

猥談のはしくれに居る聞き上手　ただし
ポックリ寺も札所も終えて欲が出る　白李
つくつく法師稲荷の山はすでに秋　(小)英子
小京都にみんな盗られた京情緒　求芽
ハンカチに小さな夢を折りたたむ　諷云児
買い物の妻を本屋で待たされる　杜的
御先祖の愚痴を聞くのも久し振り　達子
来年も生きるつもりの花の種　正坊
鐘撞いて一願祈る長岳寺　花代子
おんなを終わる日まで鏡と親しもう　幸
兄嫁は千手観音ありがたき　年代
背の低い外人が居て寄ってみる　武庫坊

亡母と来た落葉の温み踏んでゆく　はつ絵
細筆の穂先きれいな歯で噛まれ　紅月
雛の瞳をいれる細筆選っている　紅陽
細筆のかすれた二字に意味がある　陽露子
人形の生命を入れる細い筆　(松)芳子
言い分がまだ出ぬうちに多数決　紫香
多数決義理も半分交ってる　登志代
多数決のカレーライスを食べてます　(福)英子
要点はわからぬままの多数決　〆女
多数決へこころのなかで振る反旗　礫
対決という土壇場で多数決　三求
多数決だからついてく雑魚のむれ　和友
面倒くさいので多い拍手の中にいる　太茂津
多数決の一人私は風見鶏　飛鳥
多数決のなかの一人になり果てる　水客
親しみを持って話せるだんご鼻　美穂
鴉には一番親しい野の仏　佳秋
財産はないけど親しい友の数　正博
親しさはちとゆがんでる羅漢像　萬的
鍵っ子に親しみ捨大尻尾ふる　白渓子
焼いもに親しむ寒い風となり　よ志子
妻の忌や親しくなった般若経　三男
秋の海親しさがある波の音　麗水
赤トンボ親しいひとの訃を運ぶ　(河)芳子

むらくも川柳会　藤井明朗報

賑やかに送られ嫁ぐ晴れ姿　みどり
聞き流すことを覚えてまるい日々　秀子
耳たぶへ愛のささやきためている　文子
妻伊川の流れに遊ぶつがい鳥　吉野
商店街時代の流れか灯も淋し　武衛
名曲に汚れた耳を洗われる　福子
吹き流し過疎にも日本男児あり　竹乃
耳よりな話といってのせに来る　林蔵
孫出産にぎやかになる我が家の灯　しげ女
喜びを背中に見せるリュックサック　千里
四季の彩みせて流れはとどまらず　ヤス子
尺取り虫上手に化けて身を守り　三津江
腹の虫ぐうぐうさせている姑　巡歩
卓球に若さのはずむ腕は鳴る　なつえ
ピチピチと肌が生きてる若いママ　雪路
若者にまだ負けまいと老いの意地　克子
気分だけ若くていらぬ口を出し　ふみ女
賑やかな虫合唱の転作田　梅園
虫の音を聞いて読書の夜は更けて　幸子
ニューリーダー政治もこれから若返る　蚊声
若い気でいたのに敬老祝われる　峰雪
若づくりしてもかくせる白髪染め　昌子
ニューリーダー若いと言えるか六十路　清祥
除草剤撒くのはよそう虫が鳴く　由郎
七十歳まだ若い気の畑仕事　ゆき子
入浴の私に虫が語りかけ　よし美
疳の虫連れてお宮へ虫封じ　緑水
耳も年もらい賢くなりました　正朗
はずむ声して喜びのお福わけ　芳子
淡水化世論の流れまとまらず　明朗
旅先を気づかう薬も入れて出る　はる代
旅先のここも円高不況風　義良

川柳塔きゃらぼく　政岡日枝子報

崖道を歩いて思わぬ花に逢う　日枝子
足元に光が射して歩が進む　朗子
ひんやりと歩く背中に冬の音　夕子
ひたすらに歩きつづけた亀である　玲子
好きだから歩くと老母の足さばき　花子
しがらみの中を歩いた山頭火　荒介
小錦が歩くと地球へっこみそう　亜弥
凧糸のもつれ歩いてよりもどす　恵子
杖になり明日も歩く夫婦坂　八重子
枝先を信じて歩くかたつむり　御前
飛びすぎた毬をさがしてただ歩く　やえ
活火山抱く子と歩む六十路　登栄
歩くことをまだ諦めぬ京人形　千代
歩き疲れて空の青さにお辞儀する　てい子
歩かずに富士に登った自己嫌悪　正子
万歩計のとりこになった粗大ゴミ　ふみ
何の因果で歩いてしまう修羅の道　瑞枝

サークル檸檬　片岡智恵子報

恋愛と同時進行する見合　美緒
勝閧の響き残りし古戦場　雅子
澄みきった空に一本飛行雲　千代女
秋の空澄んで心の固まらず　智恵子
万葉の夢正倉院展空気澄む　泰子
同時にはいかぬときめた墓の下　今日子
地味ながら響くものあり文化祭　三四子
味噌汁が澄むと原爆型きのこ　薫風

わかあゆ川柳会　小砂　白汀報

お賽銭アイスクリームを舐めながら　悦良
病床に梨が半分残されて　ヒデ子
見合いだけならよかろう生返事　世似
現実を遠く遙かに見る化石　紫朗
レーガンも出雲弁には音をあげる　一男
両膝が笑う八十三の愚痴　天痴人
化石一個眠る深海の底の闇　蒼流
初物は半分ずつでも分けてやり　聖子

歯をはずし涼しかろうねお老母さん　かつ子
セールスに隙をつくった生返事　清泉
肩書を並べたてとるほとときす　恵美子
半分はその気でおった花の芯　鈴江
ああ実年あなたもわたしも生返事　智重子
生返事もう許されぬ黒字国　はるみ
引力が無くなりました生返事　白汀

八尾市民川柳会　飯田悦郎報

嫁が来てパン食になる朝の膳　晋吾
木村屋の餡パン記憶のあみだくじ　勝美
一切れのパンへ必死になった過去　覚然坊
ていねいに嘘でかためた見本パン　悦郎
餓鬼大将家来を塾にみな捕られ　八斗酵
美しい家来で社長見栄をはる　しづ子
内職に武器を作っていた家来　比沙胡
どさくさに紛れて逃げていた家来　憲太郎
不況風家来もひそと社を案じ　喜風
指図する家来と降りる無人駅　柳伸
五六人家来が出来て餓鬼大将　しんじ
あばかれた汚職に連座する家来　頂留子
大学でだんだん忘れてゆく単語　鯛牙子
木の枝に差した蛙を忘れてる　東雲
こんな詩何時書いたのか忘れてた　和子
松茸の味も忘れて秋がゆく　三男
忘却の彼方に摘んだ花いくつ　壮之助
ある事情あって片道切符買う　甘平
子を捨てる事情を作り出すネオン　欣之
王様は事情を言わず処刑する　美幸
遅刻した事情きれいな嘘にする　砂輝守
弁護士の手に入り事情丸くなる　雅風
訳あって女には逆らわぬ　憲祐
人間の事情で鹿の角切られ　度
泣きじゃくる訳は聞くまい肩を抱く　信治
それぞれの事情を背負う百度石　冬葉
事情があって男が米を研いでいる　律子
茶柱にすこしときめくのもおんな　夕花
茶ばしらに一つの欲が燃えてくる　光乱
佗助のころり茶庭の雪景色　みつる
島の茶がはるばる宇治へお嫁入り　白洋
たかが一杯飲むに茶道のむずかしさ　章

岸和田川柳会　植山武助報

吸いがらを空き缶ヤングの吹きだまり　勝晴
秋風が吹くと漢方薬匂う　よし子
口笛を吹いて少女の背がのびる　湧波
革命歌尺八で吹き叱られる　圭一
病棟の屋上に吹く白い風　射月芳
オーデコロン少うし法螺吹く心地良さ　寿美子
紙風船吹けば老女の目が優し　初太郎
吹き荒れる嵐は神の鞭だろう　甘平
肩上げの着物で飾る七五三　みのる
肩のこる話に補聴器をはずす　一弥
右肩を上げて我慢の子が帰る　武助
肩書きは無いけど母は素晴らしい　通彦
肩書が消えても人徳あるお人　ひで
右肩をあげる姿が父ゆずり　冨志子
魔がさした汚職肩書泣いている　春栄
頑固でも温もりがある父の肩　狸村
大学を出たがデスクは端の端　ゆづる
転がした土地を横目に笑う奴　浪速子
文珠さんの壁へ願いが書いてある　さよ子
書くたびに過去が光ってくる自伝　ダン吉
寄れば聞く老いの自慢に座が白け　こう
だまっていても世間が自慢してくれる　幸代
自慢話は父から聞いたことがない　白光子
生き伸びる感謝夕焼けすばらしい　操子

川柳塔鹿野みか月川柳会　土橋螢報

体当りするのに囮などいらぬ　由多香
何もせず仏法僧と啼くばかり　三鈷
鷹の爪鳩のカーブを持つ法貝　石花菜
戦せぬ法を化石とせぬように　瑞枝
法かえて怖いオモチャを買いたがり　花子
憲法の中で男を遊ばせる　日枝子
法よりも深いおもいの俑の瞳だ　荒介
法則を忘れはしない秋の天　完司
五官うすれたれどゆたかな心の絵　千代
法律も裏だけ見える月あかり　坐牛
純白の皿で囮にひっかかり　雅女
岩屋から囮の歴史始まった　盛桜
種がない手品に鳩を住まわせる　正子
世は豊か俺の振子は止まらない　洋
コスモス街道無風無音の午後になる　美っ千
亀千年の命を背負う家背負う　保子
人には人の法犬には犬の法　汲香
虫干しを歳時記にして亡母に会い　富恵
貪りを刈るのは仏さまだろう　隆風
宝島めがけて走る夢ばかり　房子
母の叱った種から強い蔓がのび　諷人
尺八の中からチチロ鳴いている　はるお
温床に季節を騙す種をまく　けんじ
種あかしすれば笑ってすむはなし　和子
結局は囮にされただけだった　八重子
義理人情果す囮の道を行く　智恵子
バーゲンの囮にされる熟女たち　くに子

豊かさの中で欠けてく月がある　小鹿
朝だ朝だ生かされている法がある　喜与志
子の頭刈って対話をみつにする　幸枝
宝の中に居て宝物見出せず　三千代
老僧の法衣に罪を包まれる　きみ子
十字路で手の鳴る方が気にかかり　かつ乃
鳥をとる囮をつかういい声だ　中一順一
たんぽぽの種どこまでもとんで行く　中一忠臣
荒れた地にみどりの種をまきに行く　中一大介
弾丸うける囮は倒れないように　蛍

川柳塔まつえ11月例会　恒松　叮紅報

沈黙の中から椎の実がはじく　登美也
沈黙の溝を子供が埋めてくれ　多賀子
沈黙の中で吸殻たまるだけ　三男
沈黙の裏で男は無に耐える　弘円
沈黙の紙人形の抱く炎　蒼流
沈黙の廻り舞台は孫が押す　正朗
沈黙が続く不安な活火山　笑円
沈黙の父に心中見透かされ　みえ
沈黙の目にはうるさい秋の蠅　ノブ
庭石は沈黙の美茶をすする　みつこ
沈黙の男ゆっくり口開く　操子
すれすれのところで矢玉が尽きてくる　鳳人
すれすれの所で止まる父の貨車　昭二
すれすれに飛んで獲物を見逃がさず　静恵
すれすれを歩いて噂たつ女　たつみ
すれすれの水着泳げぬ人が着け　ちかし
すれすれで合格立派な東大生　小生
すれすれのデザイン人気呼んでいる　妻子
すれすれに鴨居に届く伸び盛り　翠星
すれすれの線で詫び状書いて置く　きみえ
すれすれの線へ男に坐られる　市雄
すれすれの魅力を見せる膝小僧　友子
あの世まで持てぬ荷物を整理する　文子
肩の荷をおろして余命たしかめる　雄々
下り坂私の荷物かるくする　寿美子
出来もせぬ公約荷物にさげている　静翁
長男の荷物だいじにされて生き　好子
髭のある亭主が荷物になっている　貢範
荷物にはなりたくないと老いの意地　君江
荷造りの贐にする祝い酒　代仕男
グループの荷物になってやめる破目　愚童
そこそこに荷物まとめて夜逃げする　房子
お人好し他人の荷物で汗をかき　玄艸
子は宝さりとて困る子沢山　長三
子沢山中にいけない子も混じる　巡歩
夕食は楽しい騒ぎ子沢山　風子
秀才もまぎれ込んでる子沢山　与根一
嬉しくてポケット刺繍で飾ったの　日出子
洗濯しポケットの中で泣くお札　静江
片思いポケットでねむるラブレター　幸子
ポケットにホルモン剤と胃薬と　鶴丸
ポケットに瘤癪玉を入れている　叮紅

川柳はびきの　田中　隆二報

今日の花今日の命をいとおしむ　ケイ子
秋晴れを出番と思う絵の具箱　蛙声
貧乏な親から書き出す立志伝　健三
手の届く幸せだけは守りたい　美子
アドバイス聞かないだろう父に似て　繁男
神の目にとまって命拾いする　三千代
稲刈りの風が運んだ草いきれ　与呂志
世界一長寿の国に生きている　隅谷義一
飽食の国でペットもオシャレする　重人
入門書素質の有無にふれていず　満洲子
雨男メッシュの靴をもてあます　敏
給料日父に箱ずし母おはぎ　淑子
野に下りてもう胃薬は要らぬ背　吐来
稲刈りをやっとすましてえびす笑い　キミ子
二枚目になって見ているメロドラマ　志洋
久しぶり孫と楽しく川に寝る　清子
良心が騙した指輪光りすぎ　敦子
とうもろこしを蒸すサッポロの細い声　隆
長居したらしいと思う固い椅子　美代子
虫めがね片手で探す求人欄　絢子
野仏に野菊一輪と飴三つ　トミ子
一杯が三杯となる胸の傷　比沙胡
整形の鼻とは知らず蚊がとまる　みつる
千歳飴なめる吾子へハイチーズ　優
秋冷えに冷え性冬が気にかかり　白水
秋風に乗って台風迷い込み　末一
むいた栗買って手軽に旬の味　伴子
ライバルを意識しているのし袋　隆二
カメラ好きパッチリ秋を持ち帰る　シメ子
晩秋の寒さ知ってる猫の足　たけし
落葉掃く明日はきっと晴れるだろう　弘子
血圧が気になり出した秋太り　昇
霜に勝つわらの服着る野菜たち　悦子
切り口が真白諸の掘りそこね　胡村
無口でもしっかり子供作ってる　和子
能弁は銅だと知ってから無口　一屯
吉本のケチを花月がネタにする　淳一
ケチになれケチになれよとパンの耳　寿美
無口だがやさしい人としたわれる　石橋義一

笑ってたケチへお金を借りに行き　昭　子
胃カメラに酒の味など解るまい　希代司
最後までドラマをつなぐ行き違い　美津子
一坪の庭にも秋の虫が住み　ダン吉

川柳塔唐津支部　久保　正敏報

寝てる間に月は容赦なく上り　虹　汀
商売と女房に惚れよ成功の元　旭　恒
良く走る独身号という電車　あ　き
国守る気慨も無くて自衛隊　高　明
唾薬つけて男の向傷　久仁於
二番目に綺麗と娘が言う参観日　香代子
長距離の電話に孫は声変り　掬　水
束の間の三十路儚や菊の旅　朴　竜
まんまるに祭りの朝日真東に　四　郎
十二月飲み過ぎシール売り切れる　正　敏

川柳大阪　山下みつる報

生きるのも死ぬのも旗が欲しくなる　重　人
秋の陽をまともに孫を応援し　与呂志
色気などどこかへ置いて来た食い気　本蔭棒
地獄迄持って行くのか古鞄　洛　酔
キッスしてる男の背に隙がある　敏
毛虫にも夢あり明日は蝶で飛ぶ　しげお
這い這いの孫が狭しとうさぎ小屋　雅　巣
サイレンが野次馬連れて事故現場　我　勝
十円で孫にもてる祖父でよい　司
人生の方程式を妻と解く　柳　弘
僕を抱く霧消え際を迷ている　凡九郎
番犬の昼寝へ邪魔なご用聞き　喜　酔
太陽がこんなに温い昼休み　笑　風
ペットシーンないチャンネルを昼は見る　鉄　心
マッタケを口にほおばる夢を見た　もとみ

旅行して心少しは広くなり　遊　心
旅先の浮気ごころに妻の顔　喜　楽
花の香に心揺ぐも旅の宿　鈍　泉
もう色気などおまへんと笑う妻　天　平
お多福のお面の奥の鋭い目　比呂志
営業用の色気男を逃さない　金　太
満月も一緒に同行船の旅　哲　流
おねだりは虫の居所見定めて　酔　舟
現実は内職つきの昼寝抜き　一　歩
熟年の色気もちょっと出して見る　矢佐志
われおれの河内言葉で生活してる　みつる

川柳高知　川竹　松風報

夫婦なら言える言葉が胃にたまり　康　子
前向きに生きる姿勢のネックレス　とみ子
良心がまだ生きている無人市　かず子
団らんを無粋な客に狂わされ　朱　坊
ここだけの話ここにも置いて去り　春　枝
嫁で泣き今度は姑で泣く世代　義　人
髪洗う女に明日の夢があり　功
明日はもうよその子になる角隠し　佳　風
開票の明日を待ってる達磨の目　竹　萌
元気でと別れた人を恋うも秋　玲
元気かと無口な父が出た電話　千　鳥
誰からの電話か元気になった父　幸　泉
カットバンどこかに貼って元気な児　嘉　代
札束で怖い話がもみ消され　節　子
歳月が哀しい過去を消してくれ　菊　野
切り札をさげて男と差し向い　松　風

川柳後楽　井上柳五郎報

すり切れたおしぼり愛の終りかも　健　一
セールスのぐちを聞いてるおしぼりか　照　路

フィルムにあの日の秘密あばかれる　玉　水
人生のフィルム切りたいとこがある　たけ志
フィルムの切れ目切れ目にある内助　美智子
フィルムがまっ白あの頃拗ねていた　草　風
総決算間接税だけ引きつがれ　進
鎌足も昭和の科学におそれいり　佐加恵
竹下と小渕で早稲田の森歌う　浄　美
表札の女名刺に三味の音　吟　平
むずかしい名前で表札おぼえられ　九　坡
表札をはずして夜逃げの荷を纏め　秋　月
表札は掲げず女ひそと住み　哲　郎
表札を見れば恨みの血が騒ぐ　博　友
漫画から恋の手立てのヒントを得　七面山
漫画読み不老長寿の薬かも　文　平
教科書を押えつけてる漫画本　金　吾
父ちゃんは漫画地でゆくような日々　柳五郎
漫画にもなりはしないよ痴話喧嘩　拓　治
別々の漫画を書いている夫婦　桃　風
孤児達の見る日本は冷めたすぎ　鮫虎狼

打吹川柳会　江原とみお報

占いのカードは吉とかぎらない　早　苗
足首の太さが殺すハイヒール　亮　二
日めくりの一枚下にいる命　雀踊子
働きに出てます夫を飼ってます　紫　映
子の宿題家族四角な顔で寄り　たつみ
本気でも息子に勝てぬ腕相撲　雄　々
魔術師のように川柳創れない　巡　歩
善人の税もミサイル弾になり　宗　光
落ちこぼれても群衆の中にいる　蛍
笠の下幼さ残る修業僧　規　仔
秋の陽を拾い集めてふとん干す　道　子

悲しみを我慢して居るから笑う　日枝子
おはようが家のリズムを円くする　孝美
法螺貝を吹いて我こそ日本一　梅朗
妻子捨て単身赴任米をとぐ　吉朗
前身を言うのはよそう揚羽蝶　柳風
手を出して確かめている通り雨　白峰
空気にも水にもなれぬ老いの坂　ただし
居酒屋に善意の傘がおいてある　とみお

川柳たけはら　森井　菁居報

あきの山はっぱがすごくまっかっか　小二昌　之
そろばんでゆうしょうとったいばりんぼ　小二史　子
まつりの時早くいかやき食べたいな　小三裕次郎
運動会五年生にも出たんだぞ　小四晶　美
一輪車友達とするから楽しいな　小四晴　美
へびが来た母さん大声でさわいでる　小四視　幸
ちかごろはしゅくだいねるのもおそいよ　小五由　博
試験勉強息抜きのほうが長い　中一純　平
あきらめが肝心本来無一物　菁　居
饒舌な女がチョコをもてあそぶ　こうじ
夕焼けを見る逆上がり出来ぬ子と　蘭　幸
いつまでもふたりは若い妻のメモ　静　水
大都会企業戦士になるもんか　靖　子
日食を観てる大きな口あけて　麻　代
口ぐせの勿体ないを疎まれる　静　佳
人生の秋も来るのか冷えてくる　俊　夫
久し振り立花を活けて若い気に　喜久恵
自分だけ心得ておく腹の虫　浪　子
姑いまだ胸に三十三回忌　栄　恵
あざやかに黄蝶白蝶舞台舞う　愛　子
豊作の米が今年もいびられる　勲
彼岸花辿れば亡夫に会えそうで　喜美子

珍しい方の電話に意図ありや　八重美
七十の坂を過ぎるところばない　君　枝
許しとけ言ってござるよ南無阿弥陀　千年枝
我ながら作品展にある意欲　ヤスエ
高野槇背負う善女の丸い背よ　ふさ枝
老いて尚信念だけは曲げられぬ　清　水
ここはこう言うべきだったなあ雲よ　笑　子
女王蜂より働き蜂が性に合い　静　風
秋の陽に優しさもらうひとりぼち　淑　子
指の先あしたの旅の道を追う　政　己
天高し秋陽のなかで小菜間引く　房　子
ペアシャツ女が一歩先を行く　博　子
ライバルは無気味サルビヤは真っ赤　太　虚
コスモスに迷いなどない晴天よ　比呂子
いい事が一つ易者を信じよう　貞　子
生きているあかしに今日の傷をなめ　康　子
一人佇つ波止で私の海を見る　一　路
差し出せば手からこぼれる鰯雲　静　火
キャンパスをこよなく愛す秋の筆　山　久
四捨五入切られる組に僕が居た　不　動
棹させどさだめの波に逆らえず　シゲヨ
人間が好き春夏秋冬人を恋う　臣　子
思い出の布ぎれ集めているおんな　年　子
うしろ手を組むと年寄りくさくなる　なぎさ
訪うごとに亡母の匂いが消えてゆき　澄　江
それぞれに折れて平和の灯がともる　千代子

豊中もくせい川柳会　田中　正坊報

眼鏡をかくととても似ているモンタージュ　きく子
老眼鏡かけて見つめている孤独　つえ子
悪夢から消したい男現われる　よし子
無駄な灯を消すためスイッチつけてある　明

男の声が風に消されて冬の海　萬的
感心はしたものの落書を消す　薫風
引越しにピアノまたかとひとり旅　富子
この路地もピアノが鳴っている平和　メ女
場内に鍵盤踊るリサイタル　典子
みかん狩みかんそれ程食べられず　慶子
材料はいつも通りに関東煮　英子
雪虫が飛ぶ頃友が欲しくなる　作二郎
ニアミスも刺激になって老夫婦　美祢子
うしろにも目のあるような恐い人　登志実
雲白くしずかに揺れて秋終る　市雄
悠々自適たまには米を研いでいる　曲ん手
口コミは地下水のように浸みわたる　隆
鳥取の砂丘一坪なんぼやろ　博史
七人の敵の一人は古い友　福一
端正な顔してバッタ秋をとぶ　洋子
白秋忌銀杏の実は緑なり　正坊
人間も風物として通過駅　花村

川柳わかやま　神平　狂虎報

美しい声と美人は別らしい　忠
どうしても声が出なくて手を握る　武雄
無言電話の声聴きたくて聴きたくて　正子
声の無い世界で心見えて来る　千寿子
大声で泣こうよ誰か来てくれる　緑良
灯明が揺れてる亡母の叱咤の声　紀美女
大声で喋れる素晴しい自由　柳宏子
声だけは可愛いままのおばあちゃん　信子
聞こえたか般若心経わしの声　勇太
いい声を地球の裏へ届けよう　克子
私だけやさしい声だと信じとり　与呂志
よく透る声再会を盛り上げる　光代

群衆の中で自分の声を出す　信秋
亡妻の声聞きたくなると娘に電話　三男
追いついた時はあなたはもう他人　英子
理想追うひたすらに播く花の種　太茂津
追われてる立場を風が斬りにくる　寿子
古傷は追わぬ社長の太っ腹　正博
追い越さずぴったり二番で風をよけ　天彦
何か追う生きていますと言いたくて　凡九郎
追うことをやめたら靴が軽くなる　幸
まぼろしのリルがよぎった港町　鬼遊
ファンタジックな面影になる私の絵　桂香
面影を追うと不倫の芽が伸びる　登志代
星移り美女の面影今何処　瑞穂
面影を抱いて女の細い櫂　恭子
夫のシャツ洗濯渦に逆らえず　紀久子
農政の渦の中でも頑固なり　隆積
ユーモアに笑いの渦が巻き起こり　かずこ
あれ以来渦中の人にされていた　照子
主義主張通して渦の中にいる　紫香
嫌いになりたいと小声で言うてみる　狂虎

南大阪川柳会　**中川**

発足へキツイ言葉も慈悲だろう　雀踊子
発足をしてそれからのきつい坂　智子
発足へ目立ちたがりがまた一人　公一
発足はしたが軌道にまだ乗らぬ　ハル子
発足へ幸せすぎた落し穴　山久
素人にも素人なりにある目算　度
目算を夫婦でたてる余命表　慶三
天高く秋は目算くるいがち　藤子
目算を問えばだまってついて来い　頂留子
目算の少し外れの包紙　しんじ

滋雀報

音無しの構え目算あるらしい　寿美
目算がはずれダルマの目に困り　三恵子
成功の手前で目算喰い違い　晴風
目算へ次から次と要る出費　雅風
腐る程のカネに脱税考える　文秋
欲張って見ても器は知れている　勝美
欲張るな枝が折れるぞ庭の柿　善信
欲張りのポケットにある寒い銭　新造
欲張りの荷物重さを感じない　曲ん手
かたくなに老骨ペース崩さない　庸佑
憧れの淡谷のり子も枯れてゆく　柳伸
老骨の意地口だけは負けていず　久子
老骨の枯れた温みが背なにある　柳宏子
老骨も画けば絵になる詩になる　滋雀
あとあとが恐いおまけを貰うて来る　章久
老齢化決しておまけやおまへんで　恒明
百点のおまけ園児を勇気づけ　凡九郎
再婚へ出雲のおまけは子連れなり　喜風

打吹川柳会　**奥谷**

助け舟姑と妻との真ん中に　覚然坊
和を保つ妻の才覚だけ光り　孝美
ゴールイン元銭のかからぬ線をひく　とみお
笑うには俺よりほかに一人要り　柳風
泣きにやる実家へ男の名を捨てる　雀踊子
仮病でもちゃんとカルテに何か書き　たつみ
マネキンも驚く高級品が売れ　雄々
腰の鎌垂れる稲穂の私語を聞く　紫映
散り際と花の命にかいま見る　道子
柏手を神にとどけと力こめ　梅朗
正論を阻止する拍手多数決　吉朗

弘朗報　**蛍**

いろいろな怒りを一つずつほぐす　早苗
明日という幸せのある米を研ぐ　規仔
仕事場の苦心名人持ち込まず　宗光
持ち味の道化哀しい時笑う　日枝子
裸一貫勝負はここと胸を張る　亮二
新婚は楽しうっかり出した欠伸　巡歩
我慢してやっと温めた嫁の席　節子
簡単に手ぶらで行ける友を持ち　弘朗

城北川柳会　**神夏磯道子報**

タイガース新監督でVねらい　敏子
かばい合いゆっくり歩こう老いの坂　寿美礼
ニューモード買えば娘が着て帰り　ふみ
噂もう先に此方へ着いて居た　ただし
虫の音もまばら散歩の背が冷える　達子
一人住みカモフラージュに男物　トキワ
死にたいと言いつつ注射堪えて居る　正之
レパートリーテレビ料理で一つ増え　静子
秋空に人訪ねれば皆んな留守　悟郎
負けまいぞ神経痛に負けまいぞ　静歩
今年ゼロ来年ダブル七五三　市郎
妻の振る鈴へ素直について行く　登志代
乱れてもコスモス自己を失わず　テルミ
酔った振りして決着を回避する　温子
青みかんむいてる可愛い紅葉の手　八重子
雲流れ心残りな陽が沈む　満津子
ささやかれてからは眠れぬ夜が続き　公一
もうあきた指輪に月賦まだつづく　新一郎
空缶の絵に絆されて捨て切れず　佐津乃
敬遠のボール投げるも処世術　倫子
紅葉の見事さ絵皿に盛り切れず　道子
酒煙草自販機客の齢読めず　白峰

1 月 各 地 句 会 案 内

	日／時及び題	会場と投句先
堺川柳会	3日(日) 午後1時より 旗・爆笑・はかる・橋	河内天笑宅 〒593 堺市堀上緑町2－9－2 河内天笑 会費 3,000円 投句料 300円(郵券可) 福引あり
尼崎 いくしま	8日(金) 午後1時半より みやげ・運・自由吟	サンシビック尼崎 阪神電車尼崎下車南西徒歩3分 〒661 尼崎市南清水11番1号 田淵定人 句会費 今月に限り500円 投句料 60円切手3枚
川柳塔 まつえ	9日(土) 午後1時半より 歌(唄)・書く・初春	慈雲寺 松江市和田見町 〒690 松江市雑賀町1686 恒松叮紅 句会費 300円 投句料 300円(60円切手可)
川柳 わかやま	10日(日) 午後1時より 揃う・すし・甦える	和歌山県民文化会館 4F 〒640 和歌山市鷲町15 野村太茂津 句会費 300円 投句料 60円切手3枚
八尾市民 川柳会	10日(日) 夕6時より 舞妓・空(そら)・静か・リズム	八尾市労働会館(山本) 近鉄山本駅すぐ 〒581 八尾市弓削町南2－141 飯田悦郎
西宮北口	11日(月) 午後零時半より 盃・未来・自由吟	西宮市中央公民館 阪急神戸線西宮北口駅南出口歩5分 〒661 尼崎市武庫之荘5－25－17 春城年代 句会費 今月に限り500円 投句料 60円切手4枚
高槻川柳 サークル 卯の花	14日(木) 午前10時より 自由・太陽・世話・自由吟	高槻市民会館302号室 阪急電車高槻下車歩5分 〒569 高槻市宮田町3－8－8 川島諷云児 句会費 500円 投句料 200円(60円切手3枚と20円切手1枚)
川柳 ねやがわ	17日(日) 正午より 家族・目標・喋る・相撲吟	寝屋川市国松公民館 京阪香里園駅より寝屋川駅行又は仁和寺行バス国松南口下車、京阪寝屋川市駅より香里園行バス国松北口下車 〒572 寝屋川市春日町9－9 高田博泉 句会費 1,000円 投句料 300円
もくせい 川柳会	18日(月) 午後1時より 年輪・火・追う・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急宝塚線曽根下車東南歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5－801 田中正坊
南大阪 川柳会	19日(火) 夕6時より 意気・協力・失敗・誓う	寺田町高松会館 JR環状線寺田町裏駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1－5－2 金井文秋 句会費 500円 投句料 180円(郵券可)
南海電鉄 川柳部	21日(木) 夕6時より 年賀・金(きん)・招く	南海会館ビル内南海電鉄本社地下食堂 南海・近鉄・地下鉄各難波駅下車高島屋東南角 〒542 大阪市南区難波5丁目1番60号 南海電気鉄道(株)(川柳部) 不動産管理部管理課 廣井季雄 句会費 無料 投句料 60円切手1枚
富柳会	21日(木) 午後1時より 景色・元気・月賦	富田林市中央公民館 〒584 富田林市南大伴353 池 森子
川柳 東大阪	23日(土) 夕6時より 飾る・神・くちびる・仲間	東大阪市社会教育センター2階 近鉄布施駅北へ5分長堂小学校隣 〒579 東大阪市新池島町1丁目4－14 斉藤光利 句会費 500円 投句料 60円切手3枚
駒つなぎ 川柳会	25日(月) 夕6時より 明るい・友情・身近・鏡	寺田町高松会館 JR環状線寺田町駅南口下車南へ1丁3筋目左へ駅より歩3分 〒545 大阪市阿倍野区天王寺町北1-3-11 津守柳伸

★特に記載なき場合 句会費 500円、投句料 300円（郵券可）、各題3句以内

原稿送り先（〆切・毎月20日 予め決定している場合は何ヵ月分でも結構です）

〒597 貝塚市地蔵堂53番地の5-1-401号 宮園射月芳

本社1月句会

本社1月句会は藤村〆女句集「ともしび」発刊記念句会です。詳細は表紙裏に掲載。

川柳塔社

2月の兼題　「念入り」「食後」「切符」「歴史」

2月の本社句会は8日(月)

『夜市川柳』募集

第8回「蓋」　新家完司選
3句・締切　1月末日

第9回「きもの」　津守柳伸選
締切　2月末日

投句先　〒593　堺市堀上緑町二―九―二
河内天笑方
堺川柳会

●募集●

三月号発表（1月15日締切）

川柳塔（10句）西尾栞選
水煙抄（10句）黒川紫香選
愛染帖（3句）橘高薫風選
茴香の花（3句・女性）八木千代選

課題吟（5句）
「客」　内芝登志代選
「水」　吉岡きみえ選
「隅」　奥田みつ子選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。

四月号発表（2月15日締切）

川柳塔（10句）西尾栞選
水煙抄（10句）黒川紫香選
愛染帖（3句）橘高薫風選
茴香の花（3句・女性）八木千代選

課題吟（5句）
「遊ぶ」　福浦勝晴選
「肌（膚）」　林瑞枝選
「的」　永倉僕川選

★愛染帖・茴香の花・課題吟は同人・誌友を限らず。

1月の常任理事会はお休み

定価　五百円（送料55円）
半年分　三千二百円（送料共）
一年分　六千三百円（送料共）
昭和六十二年十二月二十五日印刷
昭和六十三年一月一日発行
編集兼発行人　西尾巌
印刷所　藤原童心社
〒545　大阪市阿倍野区三明町二―一〇―一六　ウエムラ第2ビル202号室
発行所　川柳塔社
電話（六六六）六九一四番
振替口座大阪8―三三三六八番

＝編集後記＝

☆あけましておめでとうございます。

☆昨年も元日から旅に出たが、今年も妻と大晦日から別府航路で旅に出る。母の生存中には母とよく旅をしたもので、「母がいなくなったら君と出かけるよ」と妻に納得させていた。旅は母と一緒にするより妻と共に出る方が余程たのしい。二日は、竹田城趾や深耶馬渓が行程にあるので、そこでNHKのラジオ番組「初春川柳大会」を聞くことになるだろう。選者の森中恵美子さんは正月早々大変だと思うが「よめやうたえや川柳天国」のフィーバーぶりを再現して欲しい。

☆時実新子さんの句集「有夫恋」が旧臘十二日に朝日新聞社から発刊になった。ジャーナリズムに乗る女流作家として森中恵美子さんと双璧である。栞主幹が本誌十二月号で、短歌の俵万智、俳句の松本恭子に続き川柳でも有名出版社からの句集現れよ、と述べられたが、それが実現したのだから、発行部数をどんどん伸ばして欲しいものだ。川柳界にとって龍のような勢いのある年にしたいと思う。

☆東野大八氏の川柳群像も今年はわれわれの知る川柳家が続々登場する。本号の大山竹二から十二月の不二田一三夫まで、例えば木下愛日、鈴木九葉、三条東洋樹、清水白柳ら、まだ体温のぬくもりの感じられる先輩の記事が続くので大いに期待して頂きたい。

☆愛染帖賞と尚香の花賞の個性的なお二人は、第一回の受賞者にふさわしい実力者である。今年もまた充実した作品での、大方のご支援をお願いする。

☆私の机の上にレモン一枝が挿してあり、可愛い実が一つ街灯のように黄色い光を放っている。十一月の吟行時、有田のみかん山で頂いたもので、三個のうちの二個はすでに紅茶に浮かして賞味した。仲間の暖かい励ましは、頗雑な仕事の力ぐさになってくれる。

☆新春句会、おめでとう会でお会いしましょう（薫）

▼作家であり劇作家である井上ひさし氏の処女戯曲に「うかうか三十、ちょろちょろ四十」という脚本がある。私はこの題が好きなのである。当時二十四歳だった彼にとって、三十、四十歳は未知の年代なので、内容は別にして、この題は想像の域を出ない。今の私には、二十もそれ以後も表現することができる。〝ぼんやり二十、あくせく五十、とろとろ六十〟。

▼〝しら梅に明る夜ばかりとなりにけり〟蕪村の辞世の句だが、六十七歳で没している。何という理由もなしに、その歳を私の行年とひそかに思っていた。

▼とろとろしているうちに昭和六十三年の元旦を迎えた。思い通りに近かなかったのである。長命を拒んでいるのでないから不服どころか喜ばねば罰が当る。ただ、その用意がないだけである。

▼毎朝、新聞の社会面の下の死亡記事を読む。知人を探しているのでない。が歳が気になる。自分の歳を中心にして長命だ、短命だと判断している。何ということもなく自分の歳を確認しているようなものだ。時々歳を訊かれて即答できないことがある。

▼作家の志賀直哉氏だったか、毎朝この欄を見て自分の名がないと安心すると言う話を聴いた。元旦の頁数の多い、この欄を急いで繰って見る。私の名が載っていない。（き）

☆中学（旧制）を卒業して四十五年、昨年はじめてクラスの同窓会があった。年齢も六十を越し、それなりの苦労をして、みな驚くほどの変りようなのは当然だが、その中で無二の親友だったMだけは、一目でMと分った。

☆Mとは三年生の春まで同じ町内に住み、毎日一緒に連れ立って登校した仲である。城のある公園を通り抜け上り坂の多い道を学校まで小一時間はかかる。市内居住者は全員徒歩通学、自転車まかりならぬ、が校則であった。朝礼に遅れるときびしい罰が待っていた。

☆Mは朝寝坊だった。時間をはかって誘いに行くと、平気で待たせる。遅刻がイヤで、次第に先に行くことが多くなった。そんなとき彼は大抵、徒歩というより駆け足で遅刻寸前に校門に滑りこむものであった。高学年になるにつれ、駆け足の距離が長くなっていった。

☆年一回、秋に全校マラソン大会がある。五年生のとき、Mは三位に入賞した。一位、二位は陸上部の選手であった。〝日ごろの行いがええからや〟と皆にひやかされた。

☆いま各地で困っている駅前の放置自転車。あれは、駅から十分以内の人が、みな駅まで歩いたら問題は殆んど解決するという。〝だから十分早く起きましょう〟という立看板を見るたびにMのことを懐しく思い出すのである。（史）

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
昭和六十二年十二月二十五日　印　刷
昭和六十三年一月一日発行（毎月一日発行）
昭和六十三年　通巻七二八号　川柳塔　一月号

時実新子句集

『有夫恋』

解説　田辺　聖子

作品　十七の花嫁なりし有夫恋
　　飛行機の降りる角度は愛に似る
　　古箪笥むかしのお手紙がわんさ
　　何だ何だと大きな月が昇りくる
　　靴の紐男の帰心見ていたり

外六百五十句

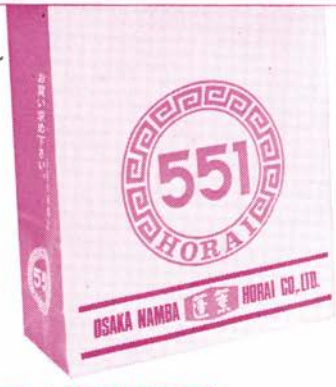
☆現在、八面六臂の活躍ぶりの著者の来し方を集約して見せる短詩川柳ドラマ。
☆作品は超一流の評価を持つ著者、装丁は「サラダ記念日」と同じ菊地信義氏。
☆「今度の旋風は川柳の番である」西尾栞主幹の念願が実現するか。

発売　十二月十二日
定価　一、〇〇〇円
全国の書店でお求め下さい

発行所　朝日新聞社

ボリュームたっぷり　スタミナ満点!!

豚饅・焼売・焼餃子



551 HORAI

ほうらい
蓬莱
TEL641-0551

なんば戎橋筋本店
その他有名百貨店でどうぞ

雑誌　05703－1